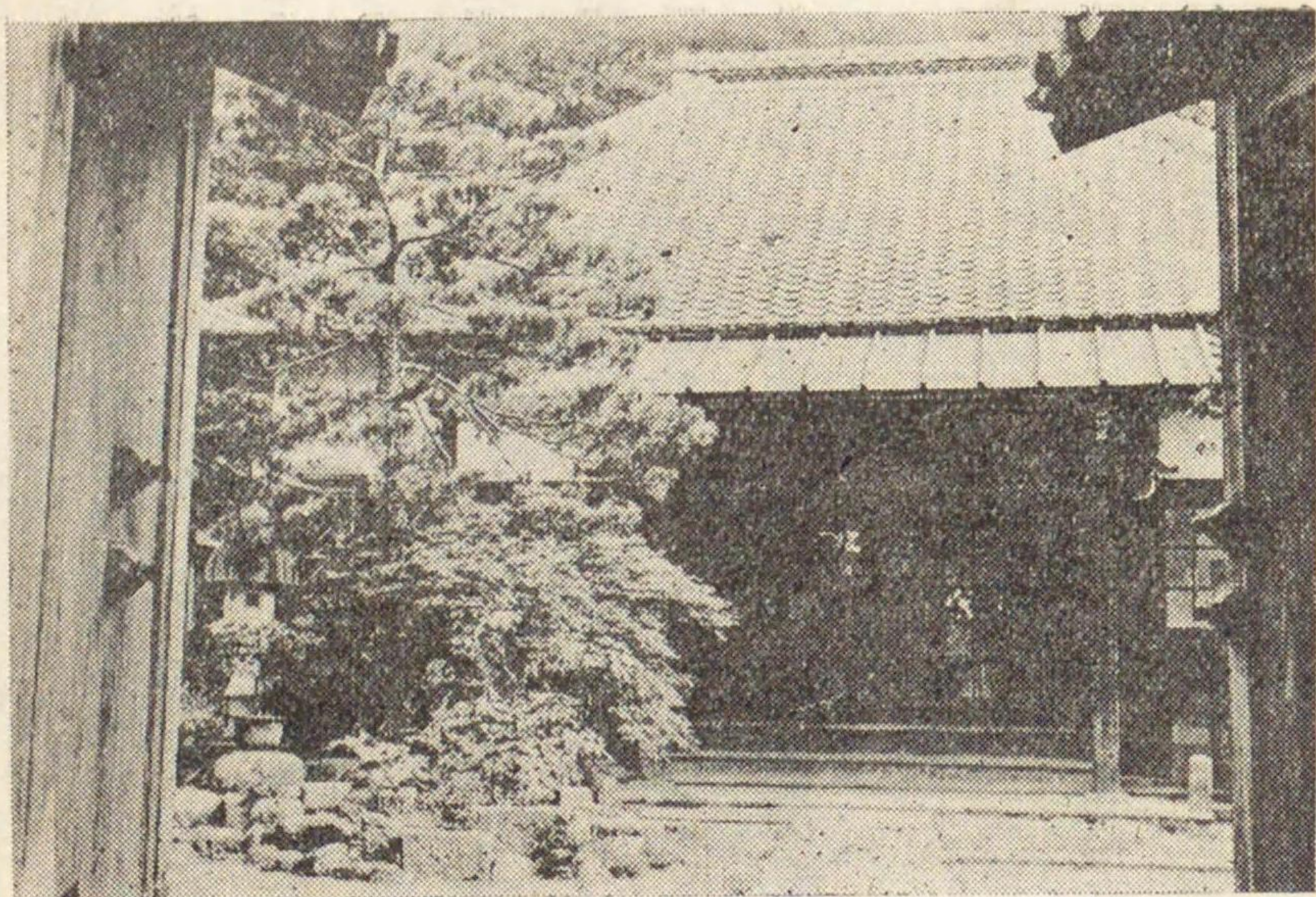


長勝寺と號す、境内三百三十一坪、本堂、間口六間、奥行四間半、庫裡、間口六間、奥行三間半、門、壹坪半、本堂に寶塔中題目釋迦多寶之像二軀、上行等四菩薩之像四軀、持國等四天王之像二軀不動愛染之像二建、宗祖日蓮聖人之木像一軀、鬼子母神之木像一軀等を安置す、本寺の創立年月は不詳なるも新井宿の郷士田中長勝と云へる人の建立せしより其の名を取つて寺號とせしならんと云ふ、初門陽善院日繕上人の在世不詳なるも二世日言上人は寛文十一年入寂せりと云へば、寛永前後の創立ならんか、享和年間日俊上人御寶前の修繕を爲す、文化四年九月表門を再建せり、日孝上人の代庫裡、門、敷石等の大修繕をなせるも其年月不詳なり、安政二年の大地震にて本堂、庫裡等大破し本堂は修繕を加へ庫裡は再建せり之れ日理上人の代なり、明治二十四年日繕上人三寶を大修覆塗替をなせり、明治二十九年日淨上人信徒の寄附を得て境内に梅樹を植へしに今や其木老木となりて年々實を結び梅花の季節薫風境内に漂ふ、大正二年本堂、庫裡大破の爲め修繕と共に瓦葺に葺替を行ふ、大正十二年の關東大震災に依り本堂、庫裡大破せるより大正十五年九月新築落成す、昭和三年表門を再建す、現住職戸部宜潮師は永らく東京青年教會幹事として宗門に盡す事多く年年夏季は布教の爲め講習會を開講し居れりと。

當寺祭祀の貴船大明神は元本門寺の鬼門除けとして今の東の院の上に建立せられし者なりしを、

後ち何時の頃か當寺に移し祀りしも、明治初年神佛混淆の禁令に依り當寺と分離し遂に明治四十五年四月本村の太田神社に合祀するに至れり。

尚本寺は現在小港誕生寺未となり居るも元は本門寺の未寺なりと言ふ、今舊記の有するもの無きも、當町妙雲寺安祥寺等と共に、往昔本門寺の未寺たりしことは推定に餘りあり、實録考證に至りては後人の研究に期待するも、此の理由とする處は、一地形、二本門寺の勢力と町内寺院の分布、三過去帖に本門寺歴代を記録せる事、四不授不施の雄將本門寺日樹上人の供養塔造立等なり、就中寛文三年にかゝる日樹上人三十三回忌の供養塔を當寺境内に造立せしことは、當寺の離未が不授不施問題に關係せるものなることを推定せしむ、因に



第一章 沿革及歴史的考證



造立塔には施主中に妙雲寺、安祥寺、林昌寺、本立寺等の名を刻せることは前二ヶ寺の未寺換とも關係ある可く注目に値する。

境外所有地壹町壹畝十五歩を有す、之れは當寺七世日鏡上人享保年間檀方より資金を得て買求め置きしものなりと、檀家二十五戸、總代は鈴木要助、川島重太郎、川嶋百太郎の諸氏なりと。

當寺歴代の住職次の如し

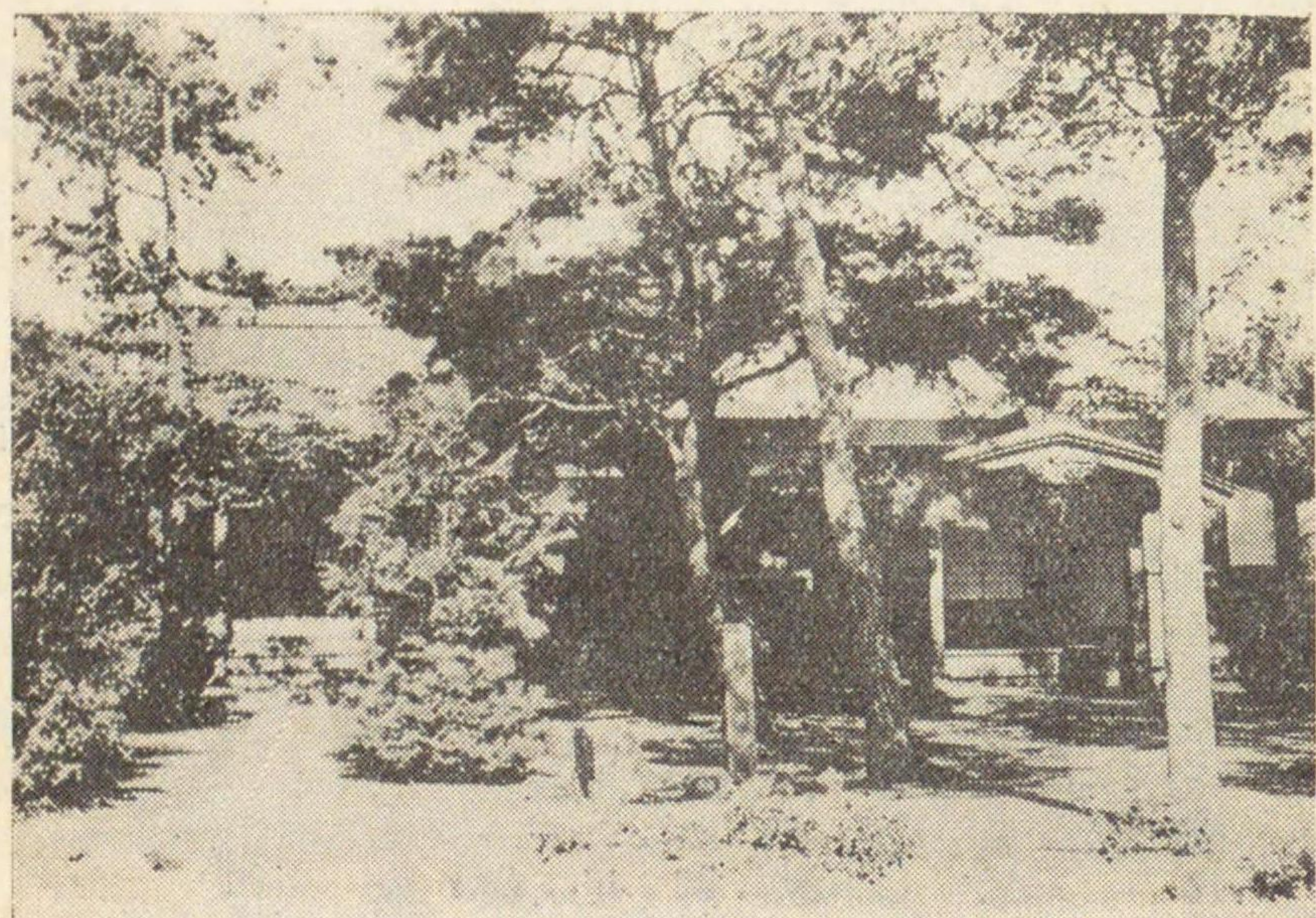
開祖日繕 二世日言 三世日然 四世日禪 五世日純 六世日雅 七世日鏡 八世日縁 九世日靜  
十世日長 十一世日詮 十二世日逢 十三世日啓 十四世日顯 十五世日運 十六世日俊 十七世  
日慶 十八世日彭 十九世日曠 二十世日倫 二十一世日理 二十二世日要 二十三世日得二十  
四世日諦 二十五世日淨 二十六世現住職戸部宜潮

二九、微妙庵

日蓮宗

本門寺未

徳持八拾壹番地にあり、境内二百五拾六坪、本堂、間口四間、奥行三間、本堂に日蓮聖人之像を安置す、當庵は天明年中本門寺第三十世本壽院日利上人の開基とす、久ヶ原安祥寺九世寛中院日騰上人同寺の所有地を割いて當庵に隠居せり（一説に久ヶ原村三木清三郎なる者出家して安祥寺に入



微妙庵

る、三木家は通稱五萬石と呼びし家にて清三郎出家の砌分家の意味にて若干の土地を興へし其土地を割いたるなりとも云ふ）安祥寺十二世甘雨院日治上人の代、寄妙講を作り其寄附金を以て當庵の庫裡を新築せりと、當庵は何時の頃よりか安祥寺と分れて本門寺の境外佛堂となれり、今より三十年前庫裡を取毀つ、後ち本門寺に於て本堂に繼ぎ加へ庫裡として充當す、境内に毘沙門堂あり、堂は二間四方なり、中に五寸許りの毘沙門木像を安置す、此の尊像は今より參拾餘年前本村字砂田小原甚五郎の小僧品川海濱にて佛像を拾ひ來りしも、其様な物は拾ふべきに非ずと家族の諫めに依り、又元の所に捨てしに歸り來りて俄かに發熱せしより、是れ必ず此の尊像を祭れとの佛の告げならん



とて再び拾ひ來りしに忽ち熱は平癒せり、依つて當庵に堂宇を作り安置せりと、境外所有地五十坪を有す。

三〇、妙福寺(御松庵) 日蓮宗 身延山久遠寺末

道々橋(飛地)小字千束三百九十七番地にあり、今を去ること六百五拾餘年の昔、御宇多天皇の御代に於て、宗祖日蓮大聖人御齡六十一歳、弘安五年九月八日甲斐國波木井の郷身延の靈山を御發足遊ばされ、武州玉川の邊千束郷池上の里、池上右衛門太夫宗仲の館に入らせ給ふ、御途すがら同月十八日當所御通過の砌り、暫し池畔に御憩はせられ、傍の松樹に召されたる御袈裟を掛けさせられ、御手足を淨め給ひしに、不思議にも湛々たる池水は風なきに浪を生じ、浪は渦を捲き鳴波高く搖ぐと見れば、忽然として蛇形顯現し今し大聖人の御洗足遊ばされたる方に頭を擡げ、只管に歡喜の體を爲す、宗祖即ち御經文龍神威恭敬云々度脫若衆生等の文義を説き遊ばされて後ち池上太夫の館に入らせ給ふ。

宗祖滅後、郷人相倚り其の御高德を永遠に偲ばんと志し、池畔絶勝の淨地を下し、茲に一字を建て七面太夫女を勸請し信心淺からずと雖も其後星移り物變り修營漸く行はれず、従つて此の袈裟掛の

松も遂に雜木の蔽ふ所となれり、次いで寛永二十一年御檢地に依り御繩入の砌り同地三郎兵衛と云ふ人開拓して畑地となし畑四畝十二歩、年貢二斗二升、同下畑二畝二十歩、年貢一斗三升三合相納め來れるなり。

此三郎兵衛と云ふ人は元徳川家康公第七の御女兒徳姫君長じて相模守池田三左門耀政の室となりて設けられたる三子の中の池田忠氏、故あつて流浪し千束の邊りに住居の折久河原村某氏の養子となりて名を三郎兵衛と改められたる人にして歳三十才の時寛永二十一年近境御繩入れの節世話役致し居りたる者なり、次で寛文七年寂遠院日通、池上に瑞世せること六年其の間三郎兵衛在山して教化に預る、信心渴仰の念篤く寂遠院身延山に晋山



妙福寺



の節供奉して外護す、延寶五年御本尊及圓智院壽觀日解の逆修法號を授與せらる、三郎兵衛は之より不退の信者となり元の久河原村に立歸り同所に閑居し宗祖の四百年遠忌の節一堂を建立し祖師の靈像を得得し唱題修行して終る、茲に於て元來檀越と云ふ者なく年を経て修繕力及ばず元祿の頃久ヶ原村本光寺へ祖師の尊體を預けそれより百四十年を経たる文化の頃右地の邊り三郎兵衛所持の土地も本光寺へ買入になり袈裟松一本植付になりたり、文政三年同寺十六代龍王院日松開發の砌り、此處に昔小堂の有りし事の由縁を御場係山之内助次郎に言上に及びたる處、御聽濟になりしに依り祖堂の再建を志し茲に一字を結び之を稱して洗足御松庵と云へり、連年法筵を修し文政、天保兩度に馬込村の地續きの土地を買入れ丹精すと雖も堂未だ完からざるに日松示寂す、爰に於て法味全く絶へ參詣者隨つて處斷し既に廢地に及ばんとするを歎き嘉永三年久ヶ原村中島長左衛門氏堀之内妙法寺に參詣の節右の由を申立て二十三世遠厚院日解と庵主獅音院日健等再建を發起し世話役頭取日本橋十三日講中近江屋新兵衛普請世話役僧教律久ヶ原村名主中島長左衛門武州麻布の住人大工棟梁星澤松五郎普請肝入世話役頭取日本橋る組の豊次郎の諸人を始め江戸總講中の丹精並に近在の取持講に依りて間口五間奥行六間の祖師御堂全く成就し嘉永五年四月八日日出度上棟の式を執行せり、爾來堀の内妙法寺に所屬し境外御堂たり、明治十二年身延山久遠寺火災に罹り本堂を身延山に献す、

後ち妙福寺は東京市淺草區永住町三十六番地に在り、星頭山と號す、元祿元年七月持法院日慈上人の開山なり、大正十二年九月一日の大震災は同寺を烏有に歸し堀の内妙法寺とは法縁の間柄にて遂に前記の如き深き縁起を有する舊蹟に移轉せしめて宗祖の遺跡を普顯し併せて寺門興隆の長計を完ふせん事を期し昭和三年其の手續を完了移轉せしものなり。

現住職 藤井教詮

### 廢寺

當町に於ける廢寺に就いては的確なる記録の殘存するものなく、爲めに存廢の數計ふるに困難なり、されど文政年間完成せる江戸名所圖繪に依れば、本門寺坊中、坊舎三十六宇とあるも其坊名は見當らない、文政十一年完成せる新編武藏風土記に依ると二十三坊のみ上げて三十六坊存在せし記事は見當らない、本門寺大堂建立棟札に依れば三十八坊らしく思はる、も古き過去帳に依つて、三十五坊しか見出し得ない、各坊の興廢は度々行はれし者なれば何れを正確なりと斷ずるに躊躇するも考證の結果文祿年間頃の棟札過去帳等に依り、文祿の頃に三十四坊現存し文政の頃二十七坊、明



治三十年頃二十坊現存せしなるべしと思はる、現在殘存せるは十七坊なり、今左に移轉、合併、廢止等分明せるものを列記せば次の如し。

坂本坊(移轉) 九老僧日行人の舊跡にて等覺院と號し、初め西の谷車坂の邊にあり、後ち寛文年中總門の前に移す、明治三十六年十月三十日山口縣東岐波村に移す。

妙支坊(合併) 享保十二年十月兩山二十四世妙玄院日等上人の創立なり、大正十二年三月十七日淺草實相寺と合併し當坊敷地にて實相寺と改稱せり。

妙教院(合併) 寛保三年妙教比丘尼の創立せしものなり大正元年七月法養寺と合併し當院敷地にて法養寺と改稱せり。

法雲院(廢寺) 法雲院又は延壽坊とも呼ぶ、寶永の頃山口彦五郎信房の庵室なり、享保年中信房の養子出家し法雲院日淳と號す、此人庵室を再建し日等上人を開基として法雲院と號せり、其後寶永以後長く荒廢せる延壽坊と合し總門の外に移して、延壽院又は法雲院とも稱せしも後ち廢寺となる年代不詳なり。

妙壽坊(廢寺) 妙壽坊は松榮山妙壽寺と號す、覺源坊の北隣にあり、本門寺二十二世日玄上人の開基なり、年月不詳なるも明治維新前廢寺となる。

寶樹坊(合併) 日蓮上人の弟子中老日法上人の庵室にして、寛永年間西之院に合併す。

玄理坊(合併) 貞享年間受悉院妙玄日理尼の創建にして、常仙院と本妙院の中間にありしも天保年間火災を發し東之院に合併せり。

自證坊(合併) 木門寺裏門の前にありて初め覺藏坊と呼び又龍華樹院とも號す、九老日像上人の庵室なり、元祿の頃故ありて自證院と改む、明治維新の頃安立院と合併せり。

戒善坊(廢寺) 中老日祐上人の庵室にして、南之坊の向ひにありて花藏坊とも云ふ、何時の頃か詳かならざるも廢寺となれり。

蓮光坊(廢寺) 法養寺と合併せし妙教院の所にありしものゝ如きも何時の頃か廢寺となれり、創立開基等詳かならず。

要玄院(廢寺) 南之院の門前にありて後ち樹下庵と改めしも明治年間に至り廢寺となる、庵の位牌は南之院に納めあれりと。

四乗坊(廢寺) 理境院の稻荷神社邊にありしとの口碑あるも、誰の創立せしや又廢寺の年月不明なり。

詮量坊 住行坊、長延坊、自精坊、明靜坊、法性坊、精善坊、等は享保八年大堂棟札に見ゆるも、



坊跡並びに創立、廢寺等の年月其他不詳なり。  
德乘院(廢寺) 德持村にありて當町唯一の眞言宗の寺院なりしも、廢寺年月並びに院跡不明なり。

### 池上の御會式

一夜に京濱の信者五十萬を集め省線電車、池上電車、東京市電等の各電車は終夜運轉を爲すの盛況を見る、當地本門寺の御會式及び萬燈の起源に就いて述べんに、昔天竺に阿闍世王と云ふ大王あり、常に御釋迦様を請じて供養の財寶を數々捧げ給へり、或時御釋迦様の御歸りが夜になりしかば王宮より祇園精舍まで十萬石の油を以て萬燈を灯し御釋迦様に供養せり、茲に一貧家の婦人あり、如何にしても此の燈明の數に加ははらんものと思へど、其日々の生活にも堪へ難き貧女なれば一燈の力もなく、涙を流して西に東に我力の及ぶ限り一燈の油を買ふべき代價を需めたれども叶はず、最後に及んで自から我が髪を切り錢二文に賣り是れにて漸く少計りの油を購ひ需め一燈を捧げて、御釋迦様の御歸りを待ち受けたり、彼貧女つくづく思ふ様我が前業如何なるにや、百千燈をだに灯す人あるに一燈すら灯し兼ねる、貧苦の身の恨めしと燈明の下に泣き悲しむ、此の志を現はさん爲めか折しも山風荒く吹き來り數萬の燈明は一度に吹き消されしも、不思議にも貧女の一燈は

消もせず、此の有様を眺めた目蓮尊者は不思議と思召し、袈裟にてあふぎ給へども消もせず、其の時目蓮御釋迦様に問ひ給ふに「多くの燈明の消ゆる中に如何なれば一燈の消へざる」と申され給へば、御釋迦様の御答は「阿闍世王の萬燈の光疎にあらねども貧女が志の深き事を現はさんが爲めに萬燈は消へて一燈は残る」と示されました、斯くして此の貧女成佛して須彌燈光如來と申されたり、古來長者の萬燈より貧女の一燈と申すのは此の事なり、斯くの如く萬燈の起源は御釋迦様御在世の時より初まれり、支那に於ても遠くより行はれ、寶物集に「南京の藥師寺の萬燈會は慧達と云ふ者の初めたりしより今に絶ゆる事なし」とあり、吾國は今より約一千餘年前、淳和天皇の御宇天長年間に萬燈萬華之會の修行あり、高野山千百年史に「空海與諸金剛子等於金剛峯寺聊設萬燈萬華之會奉獻兩部曼荼羅智印所定期每年一度奉設斯事云云」九月二十四日勅許ありて、滯りなく萬燈萬華會を御修行あり、衆生の迷ひを照し給ふ誠に有難き法會なりと、類聚國史には「仁明帝承和十年五月勅して油一斛正稅三百束を元興寺に施して六月十五日に萬華會十月十五日に萬燈會を修せしめ毎年立て、恒例とする」とあり、吾國には一千年以前より萬燈會と云ふ事は行はれ居れり、然るに今日では萬燈は池上本門寺の附き物の如く、又日蓮宗の専有物の様になりしは、徳川幕府初期の頃江戸市中には法華信者ありしも不受不施の亂により、一時衰微せしも民間の信仰は再び年と



共に隆んとなり、元祿以來は市中に各諸本山の出開帳の數々なるに供なひ、寺院と信徒との連絡を取る必要上、講中の成立を見るに至り此等の講中が、本山出開帳の際送迎の爲め幟を立て標章とせしものにて、八代將軍の治世身延山出開帳ありて、江戸の信徒擧つて旅所品川海徳寺に出迎をなす時に、神田講尤も多く混雜を制する爲め、急の間に合せに芝三田の三河屋といふ煙草屋の暖簾を借り、吳粉にて神田講中と認め目標として道案内をなせしを旗幟の濫觴なりと云ふ、其後各講中行列を整へ旗幟、花車、萬燈など思ひ／＼に押立て揃ひの着衣揃ひの手拭、花笠、福草履と随分趣向を凝して、團扇太鼓の音も勇ましく練り歩き沿道篤信の家の小憩し、かくて示威黙折の行列は滞り無く目的寺院に到着しかくして諸本山の出開帳は行はれたり、以上の諸講中が萬燈を生ずる基となり、御會式は日蓮聖人が弘安五年十月十三日御入滅遊ばされて以來年々御報恩會は行はれ、後ち上記の諸講中の參詣する者萬燈を灯せし者にて、文化以後天保の頃は實に益んな萬燈或は假裝萬燈の行列あり、其頃よりのも有りて旗幟は中四尺長さ二丈以上もある、大幟に中央に御題目を書き兩端に昇龍降り龍を書き緞子地に金にて縫出せる立派な物で、是を連臺に乗せ牛車に曳かせ等する實に隆盛なるものなりしも、水野越前守が天保の大改革の時中止を命ぜられたる事もあり、天保以後明治初年に掛けて、角行燈式の大萬燈が作らるゝ様になれり、そして東京を中心として諸講中は必ず、本

門寺御會式に萬燈を出す事となり、今日の如く種々變形や新形を見るに至りて萬燈は本門寺御會式の專有物の如くなれり、此の講中は確かな數は判明せざるも、大正の頃は四百以上もあらんかと云へり、萬燈の太鼓、此の太鼓は中山法華寺附近に太鼓の靈場あり是れが最初なりとも云ひ、泉州堺の歌題目踊りに太鼓を用ひたのが起源だとも、色々傳説あり、何れにしても此頃では萬燈に鐘や太鼓は付物で、揃ひの着物揃ひの手拭でドンツクドン／＼南無妙法蓮華經と十月十二日の夜中は池上名物の名を擅まゝにするに至れるなり。

#### 第四節 名所古跡

##### 國寶の御尊像

昭和三年八月十七日官報に於て文部省より國寶に指定されたる本門寺祖師堂内安置の木造日蓮聖人の坐像は、膝裏に正應元年六月八日大願主、日技、日淨の銘あり、像の高さ二尺八寸三分、寄木造著色玉眼嵌せり、像の膝裏と胎内とに記しある墨書銘に依つて聖人の七週忌に當る正應元年日技、日淨の二人が大願主となり、日行日妙之れを助け造りたるものと知らる、聖人の特長ある面貌



には如何にも日蓮その人らしい雄偉な氣魄を備へ、鎌倉時代の肖像彫刻の優品として推奨せられ、殊に製作由來の顯著なるに於て本像の價值甚大なりと云べく、其の装衣は素絹を彫つり現はすに止め袈裟は實物を著せしむる様造られたる御尊像なり。

#### 養源寺の高野槇 (天然記念樹)

本町大字堤方山下九百七十番地養源寺境内にあり、周圍一丈一尺、富さ五丈五尺、幹は直立し地上二丈の所より枝條分岐して下方に垂れ、枝張均勢を保して樹相甚だ好く、同寺境内の殆んど同面積を掩へり、樹齡大凡二百五十年と云ふ。樹勢旺盛にして流石天然記念樹たるを首肯せしむる優大なる高野槇なり。

#### 本門寺の松 (天然記念樹)

當町大字下池上字長原十三番地、本門寺境内祖師廟前にある老松を云ふ。周圍一丈五尺五寸、高さ十丈、本幹直立して枝條は上部七丈以上の所に有り比較的少く、天空に聳る一大老松なり。樹齡大凡三百五十年と云ふ。

#### 五重塔 (特別保護建造物)

本門寺境内仁王門を入つて右手にあり、慶長十三年臺徳院秀忠公が其の乳母正心院日幸尼の發願に依つて建立せられたるものにして、東京府下に現存する最古の佛塔たり、塔は方三間の五層塔婆で第一及び第二層は本瓦葺、第三、第四層は銅板葺で瓦棒を附し、第五層は銅板葺で瓦棒を用ひず本瓦葺に類する葺方なり。而して各階の隅降り棟は二重にして所謂稚兒棟を設け、其の各端に鬼瓦を乗せ、五重屋頂に露盤を置き相輪を立てたるなり。桃山時代風の建造物にして、明治四十四年特別保護建造物に指定せられたるものなり。

#### 多寶塔 (保護建造物)

本門寺境内客殿の東南、山下鬱蒼たる森林中にあり、日蓮聖人を茶毘に附したる舊跡にして、當時領主池上右衛門太夫宗仲、寶塔を作り餘灰を其の中に盛りて安ぜり。(通俗灰堂と稱す)文政十一年十一月十一日再建せられたるものが現存する寶なり。高い方形石造基壇(正面に突出部あり)の上部へ更に石造の蓮瓣形の圓形臺座あり、其上に建築されたる本邦に於ける寶塔形式建造物中特種なるも



のなりと云ふ。

### 高札場跡

堤方淨國橋の傍に徳川幕府時代の高札場あり、人民への布達の揭示場たりしと。

### 胴殻様

慶應三年徳川慶喜大政を奉還し、只管恭順の意を表したるも、幕府譜代の臣、或は親藩に於ては、大局を辨ぜず反旗を翻す者あるに依り、皇軍は有栖川親王宮を總督として征討の軍を起したり、而して江戸城攻撃に當るに際し當町本門寺は其の本營となり、紅葉、時計の間は參謀本部の事務所に當てられ、西郷吉之助は參謀として理境院を其の宿舎に宛てられたりと。

宮殿下御入山の砌は、本門寺に扁せる「長榮山」の額は祖師堂に「本門寺」の額は大黒堂に下すなど、大混雜を呈したるなりと云ふ。其の混雜に際し幕臣渡邊藏吉郎なる者、密偵として紛れ込みたるも、遂に捕へられて、靈山橋際（今の齋藤醫院の所）に於て四月十日嶺殺し、首は鈴ヶ森の刑場に曝し、胴は千本松と稱する當町久ヶ原谷築（俗に馬捨場と云ふ）に葬り、碑名に「不敵士の

墓」とあり、人呼んで胴殻様と云ふ（當町岩田周三翁の直話。翁は當時十三歳にして西郷參謀の給仕を勤めしと）。

### 内膳山

當町大字市野倉にあり、往昔鎌倉の臣鈴木内膳なるものの舊跡なりと、故に此の稱あり、鈴木家に就ては詳かならず、家運衰退の際屋敷を本門寺に預けたるものにして、其後本門寺に於ても、同家の消息全く絶ふたるに依り其の儘境内になり居るものなりと云ふ。同山に稻荷神社あり、鈴木家の守護神なりしも其の後祭祀の絶ゆるを憂ひ、村民之れを祀り現在に至る。

### 大塚の跡

元當町大字雪ヶ谷字笹丸にあり面積參拾坪、小丘をなし雜木を以て覆はれたるものにして里人呼んで大塚と云傳ふるも、事蹟に付ては詳ならず、池上電鐵軌道敷地に當るも今其の影を認めず。

### 平塚跡



元當町大字池上字平塚にあり、面積七十九坪、圓塔の塚にして周圍は雜木を以て覆はれ、其の形狀より塚たるを想像するのみなり、昔より平塚と云ひ傳へ又地名の平塚より推して古墳なるべしと云ふ。事跡に就ては何等古記の徴すべきものなく詳ならず。

### 鶴 寄 せ 場 跡

當町大字堤方字沼田耕地一帯の地は、江戸時代には、鶴御飼付場として、將軍御狩獵の爲め衆庶の殺生を禁ぜられたる場所なりといふ。

### 競 馬 場 跡

當町大字徳持に明治三十年開設し、閑院宮殿下を總裁に仰ぎ、子爵加納久會長たり周圍約一里半横濱根岸の競馬場よりも規模大なりしと云ふ。取締法の關係より經營僅かに五年にして廢止せられたり。其後徳持耕地整理組合に依つて場内縦横に道路を作り殆んど其の原形を認めず。現在池上驛前池上銀座通りと稱するは當時の場内入口の道路にして、荏原土地會社の經營地は即ち場内の一部なりしと云ふ。

### 辨 天 池 (三ヶ村池)

元當町大字市野倉にあり、里人の傳ふる所に依れば、古は隣村桐ヶ野村邊まで葭沼なりしも、埋立てられ最近迄東西四十間、南北四十三間の淺き蓮池のみ残りしも、是亦最近耕地整理に依り名のみ池と狹められ、傍に辨財天の社あるを以て辨天池と名付けられたるなり。

### 洗 足 池

近年郊外の景勝地として名ある洗足池は本町の北東隅にあり、昔は千束郷の大池と稱したもので、後弘安五年一代の傑僧日蓮聖人が池上の領主池上右衛門太夫宗仲の館に來向の途中、此の池畔に小憩し傍の松に御袈裟を懸けて、その御足を洗はせられたところから、改めて「洗足池」と稱するに至つたものである。

此の池は現在馬込町と本町との境にあり、もとは兩町の所屬となつてゐたといふことである。大きさは乾より巽に約二百間、坤より艮の方に約百八十間あり、總面積は四町七反六畝二歩である。もとは八町八反歩あつたと言はれ、現在の馬込町出穂山や同じく八幡丸等の低地は大正末年頃までは水で覆はれてゐたものである。然るに極めて不可思議なことは、出穂山及び八幡丸に屬するその



水溜りが何時の間にか私有となつてゐたことである。何時如何にして私有になつたかは、非常に興味のある謎で、今もつて、最近の事でありながら全く判明しないのであるが、其の後耕地整理によつて埋立てられ等して、現在の如きものになつたものであると言はれてゐる。

此池は附近の谷合ひより流れ出づる水と池底から湧き出たものとを堰止めて灌漑用溜井としたもので、樋をもつて千束流と稱する水路を開き、千束水利組合の管理するところとなつてゐる。此の水路は本町大字池上及び下池上の田圃に通じて灌漑の用を爲してゐるが、昔は雨季になると水溢れて堰堤を破壊し下流村落に於ては床上に達する洪水となつたことがある。現在に於ても堰樋を全部解放すると本門寺附近で尙床上二尺に達する洪水になるといふことである。爲に以前下流地方の堤方村では、其の害を免れん爲に堤防を築きその傍に住居したと云はれ、堤方なる村名もそれに起因するものと云ひ傳へられてゐる。

尙又此の池の中を鎌倉街道が通じてゐたとも言はれてゐるが、現在の池形からそれが何處に當るかを判別するのは全く困難である。唯此の池が馬込町、池上町の兩方に屬してゐたこと、及び池畔の兩町の陸地の境界に直線を引いてその西側を見れば石垣やうのものがあること、又兩岸陸地の境界に符號する點等より判断するとき、此の處が街道であつたやうに思はれる。而し之は確かなもの

と斷言し得ないのであるし、他に何等據るべき記録も見當らないのである。此の街道が消失したのも、廢道後それが水波や雨水の爲に荒され、その修理も充分でなく、何時ともなく崩壊したものと見える。その結果兩町の池水面の境界標識がなく、水死人のあつた時など村役人の立會ひを必要とするやうな事になつたのである。此の池が後に現在の如く池上町の領分となつたことも、主たる理由は此の池が日蓮上人の遺跡である關係から當然池上町の世話すべきものといふにあつた。併し尙又元來馬込町にとつては、此の池を必要とすることが少しも無かつた上に、前記のやうな面倒があつた等のために、その領分に酒五升を添へて本町に讓渡したによるものと言はれてゐる。

洗足池は前記の如く日蓮聖人の遺跡として著名であるばかりではなく、現在に於ては近郊稀なる景勝幽寂の地として近代都會人士の推讃措く能はざる處となつてゐる。大東京市民にとつて此の名勝地の存在は今や一つの立派な誇りとなつてゐる。

此の池は十數年前迄は世人敢て顧り見る者なき田舎の一沼に過ぎなかつた。人口は少く交通は不便であつたし、道路は車を通すに由なかつたものである。而し此の池は景勝地として人工の美を加へると忽ち變じて都下有數の勝地たるの素質を持つてゐた。之を發見して以て今日の勝地たらしめたものは、近代都人士の功績と云はなければならないが、同時に地元民の有形無形の犠牲と努力の



致すところである。殊に現在の池上電気鐵道が省線五反田驛に接續開通するや、交通の不便は完全に除去され、大東京の中央から半時間足らずして、此の池に接することが出来るやうになつて、最早推しも推されもしない第一流の勝地になつたのである。

池上線電車で來ると、下車驛たる洗足池驛の瀟洒な美しくさに先づ遊士の心は朗らかな氣分に充たされる。下車して東を見れば底地に、段々畑の間に、立ちならんだ形のいい住宅の赤や緑の屋根が、あたりのよく茂つた木や林の間に立ち並んでゐるのが見える。夏ならば涼しい風がその低地の方から草の香を運んでくる。足を移して改札口を出ると十間と隔たない處に、滿々たる水を湛へた洗足池が夏の陽の光を銀のやうに反射させてゐる。近寄つて池畔に立つて、一目眺めるその時に既に近代の大都市に棲む人間は、生き返へつたやうな氣分になつて、その靜かな美しくさと水の緑の色とに驚くだらう。池の岸は單調ではない。岬のやうに池中に突出してゐる處がある。大きく屈曲して入江のやうになつてゐる處がある。そ處には色々な樹木が美しく茂つて水面に倒さまにその全影を映してゐる。その茂みの上に高く聳えてみえるのは、子供達の爲に特に遊歩地として色々な設備を施した「チンカラ園」内のスベリ臺の白い塔である。そこからは又絶えず陽氣な音樂の響きが起つて、池を圍むあたり一杯に擴がつてゐる。池の左方の岸は全く森の茂みの中にあつて見えない。

足を運んで一巡すれば、尙一層池の趣の深きに今更のやうに驚く。石でたたんだ崖がある。水面が靜かだ。そ處にはきまつて大公望達が釣竿を並べて、一心にウキを見凝めてゐる。傍の小さい桶やバケツを覗くと綺麗な魚がエビ等と一緒にピチ／＼遊び廻つてゐる。

茶店がある。小じんまりとしてゐて、きれいだ。茶店の主人達もみんな素材で、朗らかで、お茶を飲んでゐて誠にのんびりした氣持になれる。景色がよくて人々の氣持が名和やかなのは此處の一つの特長である。景色の美しくさに相應しく此處の茶店には何處にも、野卑な處は見當らない。

少し進むと妙福寺御松庵がある。その境内は何時見ても掃除が行き届いて、清淨な感を與へてくれる。此處に日蓮上人の袈裟掛の松がある。現在のは後で植木したものであるが、袈裟をかけた松の根が今尙残つてゐる。

此のお寺に參詣して更に樹林の間を進めば遊園地に出る。ピンポン臺が適當に置かれてある。數は二十臺もあらう。ローラー・スケート場がある。ブランコがある。處々に休息の爲に自由に使える木の長椅子が――ベンチが置かれてある。此處には何時でも大勢の人が寄つて思ひ／＼の遊びに耽つてゐる。日曜日等には尙更の人出だ。

これに續いて「チンカラ園」である。小人五錢、大人十錢の入場料を拂つたら一日中飽きること



なしに楽しめる。芝居小屋も無料で覗かれる。そ處では腹を痛くする程笑はされる。喜劇が日曜毎に上場されてゐる。動物がゐる。猿には子供が何時でも一杯だ。兎は優しい眼をして餌を求めてゐる。子供達が草をとつて來ては、金網の目から差し込んでやるのを夢中で食べる。シーソーがある。それに乗つて子供達が仲よく遊んでゐる。五錢出したら自轉車が一臺かりられる。水遊びの爲にコンクリート造りの池が出來てゐる。ブランコがある。大鼓がある。それから、それから……子供達の遊び道具が五百坪に餘る此の平地に心残りなく設備されてゐる。スベリ臺は高さが五十尺もあらう。四歳五歳位の子供が好んで上つて、迂り降りる。擴声器からは何時でも音楽が響いてゐる。

此處を出て少しゆくと清明文庫がある。立派な建築で、此處では定期的にお經の講義がなされてゐる。

清明文庫へ行く前に小さい道を通つて進めば、一代の偉傑勝海舟の墓及び西郷南洲の留魂碑の前に出る。此處は靜寂で冷気があつて、偉人の眠れる地らしく、清肅の感が漲つてゐる。

更に、春の候には目を北に轉すると全山櫻花に包まれたる櫻ヶ丘を眺めることが出来る、そこを出てぐるりと大きく廻つてゐる中に日蓮上人の銅像の前へ出る。立像である。左手に經文を支へ、

右手を差し延べて、説法せんとする姿態である。生けるが如きその面貌を、信徒は無限の敬慕と讃仰とをもつて、見上げることであらう。線香の煙と花が斷えず流れてゐる。

到る處に茶店を見ながら歩き、小高い芝生に腰を休めてから、更に進めば、百坪ばかりの地を下して設けたベビー・ゴルフ場がある。種類はトムサム・ゴルフである。近代的な若い男女が遊んでゐる。それから——道を越えたと瀟洒な「洗足ホテル」が若者達の休息を待つてゐる。

洗足池に就てはボートを忘れられない。

洗足池驛に降りて右へ少し行くと「水上倶楽部」と入口の上に太い文字で書き誌した白亜の建物がある。そこで一人十錢支拂へばモーター・ボートに乗つて、あの大きな池を三周することが出来る。運轉手は巧みな腕を持つてゐる。迂るやうにして、エンジンの音のリズムを伴奏に、池の中からみた沿岸の風景を賞でながら、白浪を蹴立てて進んでゆくのである。これは一家族老若男女の一團が共同で、此の景勝を池の中から満喫するに一番いい方法である。

若い人々なら、斷然ボートでなくては面白くない。夏の池は此のボートで埋まる。夏の陽に白く輝くボートに色とりどりの服装をした近代人達が、思ひ／＼に漕ぎ廻つて、瞬時も休まない。オーが陽に光る。七十餘隻のボートが全部出拂つて池中享樂の天地である。水が躍る。笑ひさんざめ



く聲がひつきりなしに起つてゐる。ボートとボートが軽い衝突を起して、お互に笑つて、そして又分れる。日傘が動く。オールが流れ出す。それを拾ふのにそのあたりのボートが皆寄つてくる。寫眞屋さんが御注文に應じて、カメラを向けてゐる。

ボート、ボート！ これこそ洗足池の娯樂の花である。夏の陽の下で自由自在に白鳥の如くに遊び廻つてゐる景色は、あたりの芝生と森の木陰に休んでゐて、見てゐるだけでも、又と得られない涼しさがある。

大正十四年、洗足池畔を北から南へ走つてゐる中原街道の改修工事があつた。此の時池畔の樹木が切り拂はれた爲に風致上大なる損失があつた。之を惜しんだ地元民は、田村長、能勢博充の兩氏が發起となつて、有志の醸金を得、此處に柳、櫻を植えたので、近年は益々池畔の美を増して來た。尙又池上町は此の地を一大遊園地として恥かしからざるものとして遠大な計畫を立てたのであつたが、之は實施せざる中に、今回大東京市に併合さるゝことゝなつた。而しやがて區會に於て實現さるゝものと信ずる。内務省は昭和五年十二月此の池を中心附近約十萬坪を風致地區として指定し、建設家屋其他に種々の制限を加へたのである。大東京市の誕生と共に將來は市の一大遊園地として益々發展せんとするもので、池上電鐵や目蒲電鐵沿線の發展と共に、益々その望の大なるものがある。

### 明保乃樓の梅林

明保乃樓は梅の名所として關東隨一である。堤方九七七番にあり、明治十九年の設立で設立者は河野定成氏である。敷地總坪數二千三百四十坪にして、内建坪は二百五十坪である。家屋は十二棟に別れてゐる。

梅は明保乃樓の廣大なる庭園にある。數百年來人工を盡して育て上げたものであつて、何よりもその姿態の優艶なること、花の鮮かなること誠に美の殿堂を思はしむるものがある。遠く徳川三代將軍家光公御寵愛の梅の木は今尙燦然としてその麗枝を張り、齡を保つてゐる。庭内の總株數凡そ四百五十株、三百年の年月を経たるものも稀らしくはない。種類は約二十種もあり、早春の候となれば各その研を盡し美を傾けて咲き揃ふ盛觀は、又とない此の世の悅樂の境地で、樓にあつて酒杯を傾けつゝ望む時、終日も尙一瞬の感がある。馥郁たる芳香正に千年の齡を含んで、酒間に訪るる絶勝地である。

### 小池



洗足池に次いで名高い處で小池の存在は又得難い勝地である。洗足池の東三町、緑林鬱蒼たる地點にある池で、面積一町七反四畝十四歩あり、池中にジュンサイが出来る。此のジュンサイのある處から判断すれば可なり古くからある池のやうである。池畔には近年洋風の住宅點在し、周圍の鬱蒼たる樹林と共に水面にその影を浮べてゐる景は誠に一幅の畫題である、道路完成し、街燈整ひ、遊士の散策する姿も夏季には著しく多い。

昭和二年より當地の耕地整理組合によつて多少埋立てられたけれども、此の程池上電氣鐵道株式會社が池上町より此の池を借り受けたので、近い中に尙一層遊覽地としての設備も整ふものと思はるゝ。

### 呑川の櫻（長榮櫻）

附圖に於て見る通り耕地整理によつて谷川は整然たるものとなつた。川の兩側は幅員三間の道路となつたので、町の加藤復雄氏は自ら四百餘圓を醸出し尙池上電車を初め其他有志の援助と、町青年團の勞力の奉仕とによつて川の兩側に、櫻樹二千本を三間毎に植えたので、約三十町に亘つて蜿蜒たる、櫻堤が出来たのである。櫻樹の種類は吉野、若芽、ボタンの三種で、その咲き亂れたる花

の堤は正に關東隨一の美觀である。尙此の櫻堤の植樹に就ては左記を参照されたい。

### 長榮櫻植樹發願之趣意

弘安五年十月十三日この日宗祖日蓮大聖人は建長五年立教開宗已來悲風慘雨の法華經色讀の御生涯を終へて寶體眠るが如く非滅現滅の大涅槃に入られたのであります。是實に佛滅後二千二百二十餘年時は將に末法の初でありました。大聖人は曾谷入道殿許御書に『次五百年於我法中鬪諍言訟白法隱沒等云今入於末法二百餘年相當於我法中鬪諍言訟白法隱沒之時』と末法に就て申されております。而し大聖人の御出現に依て此の最時惡の末法にも永遠の春光が與へられたのであります。大聖人御入滅の日地を走る獸林に群る鳥皆五十二類の愛別を囀鳴り池上の萬山諸木花開いて法性の春を表すと眞實傳の筆者が描かれたのも亦故ある哉であります。

此の日花一時に咲きそうて人々を驗した庭前の櫻は今尙會式櫻の懐しき名を残して現存してゐます。日本國の表徴する櫻花と救世の大聖日蓮の御入滅と櫻の開花とは沈思靜觀する者に何かな斷ち難き深き因縁の暗示を與へます。今や時運進み帝都の膨張と共に郊の發展は日に月に目醒しきものがあります。本町に於ても西部耕地整理を以て最後の整理となし全町の面目を一新せんとしており



ます。此の時に當つて偶々大聖人御入滅の當時を回顧し會式櫻の因縁を思ひ合せて茲に榮川堤卅町余の地域に櫻樹培植の事を考へ是を發願したのであります。是れ一つに都人士の散策引杖に便し土地發展の一助に資すると共に合せて會式櫻咲く事の靈山淨土たる長榮の山に參詣の縁を作り遍く本因下種の利益を蒙むらしめ度い念願に出たのであります。願くは發願の趣意を了せられ振つて植樹の一助を垂れ給はん事を。

昭和三年二月吉日

發願人

池上町林昌寺住職 加藤文淵

其の後長榮櫻保存會を創立し、櫻の保存に努む。

## 第二章 土地、人口、建物

### 第一節 土地

#### 本町の位置

本町は宮城の西南に位し、東京市を距る三里三十三町、東は入新井町、大森町に、南は蒲田町、矢口町に、西は東調布町、玉川村、碑衾町に、北は馬込町に境し、西北部は高燥にして住宅地に適し、東南は平坦にして商工地となつてゐる。呑川は本町中央部を西より東に流れ六郷用水と合し蒲田町大森町を経て海に注ぐ、地形東西一里十九町、南北二十四町、總面積六百二十四町餘。氣候溫暖にして極寒にも四十度を下らず、酷暑にも亦九十度を昇ること稀である。

#### 面積

本町の面積は目下耕地整理中なので、はつきりしたことを述べることが出来ない。此の整理の爲



にその境界に若干の變更を見たやうであるが、何分未だその引き繼ぎが完了しない爲測量が出来ないので、はつきりしないのである。で、止むを得ず大正十四年頃の調査に若干の増補改訂を加へて次に之を述べることにする。以下、土地に關しては總べて同様である。が、大東京市に編入後充分なる調査の上詳細に發表さるるものと信ずる。

本町の總面積は、六百二十四町四段九畝十九步、之を坪數に換算すれば、百八十七萬三千四百八十九坪となる。此の内譯を示せば、次の通りである。

|        |           |
|--------|-----------|
| 官有地    |           |
| 鐵道敷地   | 四町段九畝二九步  |
| 道路及水路敷 | 一四、七、九、〇〇 |
| 堤塘敷    | 六、三、三、一五  |
| 社寺敷地   | 一一、七、九、一八 |
| 計      | 三七、二、二、〇二 |
| 民有地    |           |
| (免租地)  |           |
| 計      | 一一一、六六二坪  |

|       |          |
|-------|----------|
| 軌道敷   | 六町段六畝二九步 |
| 學校敷地  | 三、六、一四   |
| 計     | 六、七、三、一三 |
| (有租地) |          |
| 計     | 二〇、二〇三坪  |

(二五一、七四九坪)

|    |            |
|----|------------|
| 宅地 | 八三町段九畝一九步  |
| 畑田 | 一六〇、三、〇、一四 |
| 山林 | 三〇五、〇、一、一一 |
| 原野 | 三一、三、〇、二〇  |
| 計  | 五八〇、五、四、〇四 |
| 總計 | 六二四、四、九、一九 |
|    | 一、八七三、四八九坪 |

### 第二節 人口



戸数及人口

本町内に於ける大正五年十二月末現在の總戸数は九百四十戸、人口は男二千七百四十七人、女二千七百十五人合計五千四百六十二人であつた。次に大正十二年即ち彼の關東大震災の年には總戸數千四百六戸、人口は男三千七百五十一人、女三千六百五十人、合計七千四百一人である。これを大正五年度に比較すれば、戸數に於て四百六十戸の増加で、此の増加の割合は、四割九歩である。又人口は、男に於て一千四人、女に於て九百三十五人の増加であつた。随つて總人口に於ては一千九百三十九人の増加で、此の増加の割合は三割五歩強となつてゐる。

更に、昭和元年（大正十五年）末現在では、總戸數に於て二千六百六十五戸、人口は男五千六百六十一人、女五千二百四十人、合計一萬九百一人である。之を大正十二年の夫々に比較すれば、その増加の割合は、總戸數に於て五割四歩弱、總人口に於て四割七分強となつてゐる。

尙更に昭和六年度末現在では、總戸數に於て五千五百五十三戸、人口は男一萬二千百三十三人、女一萬一千八十一人、合計二萬三千二百十四人である。之を大正五年度に於ける夫々に比較すれば、總戸數に於て四千二十五戸、總人口に於て一萬七千七百五十二人の増加で、此の増加率は、總戸數

に於て四十割七分九厘、總人口に於て三十二割四分八厘弱であつて、大正五年度以來十五年間に總戸數に於て五倍半近く、總人口に於て四倍以上の増加となつてゐる。

又大正十二年度即ち彼の大震災のあつた年に夫々比較すれば、總戸數に於て千七百四十七戸、總人口に於て一萬五千八百十三人の増加で、此の増加率は、總戸數に於て十二割二分強、總人口に於て二十一割三分強である。即ち震災後に於て總戸數は三・六倍以上、總人口は三・一倍以上の増加である。

更に、昭和元年（大正十五年）即ち町制施行の年に夫々比較すれば、總戸數に於て二千九百八十八戸、總人口に於て二萬二千三百十三人の増加で、此の増加率は、總戸數に於て十三割八分強、總人口に於て十一割三分強である。即ち町制施行の年以來六年の間に總戸數は二・三倍以上、總人口は二・一倍以上の増加である。

今戸數及び人口の増加の状態を年別に示せば次の如くである。

| 年 別     | 戸 數 及 人 口 |       |
|---------|-----------|-------|
|         | 戸 數       | 人 口   |
| 大・正 五 年 | 九四〇       | 二、七四七 |
| 昭和 元 年  | 二、七四七     | 二、七二五 |
| 昭和 六 年  | 五、四六二     | 一八七   |

第二章 土地 人口 建物



|       |       |        |        |        |
|-------|-------|--------|--------|--------|
| 大正六年  | 九四八   | 二、七七〇  | 二、七一九  | 五、四八九  |
| 同 七年  | 九五八   | 二、八〇六  | 二、七六二  | 五、五六八  |
| 同 八年  | 九七四   | 二、八四一  | 二、八一二  | 五、六五三  |
| 同 九年  | 九七九   | 二、八八五  | 二、八四五  | 五、七三〇  |
| 同 十年  | 一、〇〇八 | 二、九四九  | 二、八八六  | 五、八三五  |
| 同 十一年 | 一、〇八七 | 三、〇五〇  | 二、九四二  | 五、九七二  |
| 同 十二年 | 一、四〇六 | 三、七五一  | 三、六五〇  | 七、四〇一  |
| 同 十三年 | 一、九三五 | 四、九五六  | 四、五三二  | 九、五三二  |
| 同 十四年 | 二、一四七 | 五、三九五  | 四、七八五  | 一〇、一八〇 |
| 昭和元年  | 二、一六五 | 五、六六一  | 五、二四〇  | 一〇、九〇一 |
| 同 二年  | 二、六八八 | 六、七九八  | 六、二三三  | 一三、〇三一 |
| 同 三年  | 三、一五五 | 七、七二四  | 六、八九八  | 一四、六二二 |
| 同 四年  | 四、一七〇 | 九、一八三  | 八、七八五  | 一七、九六八 |
| 同 五年  | 四、四九六 | 一〇、六三二 | 一〇、〇八四 | 二〇、七二五 |

尙年別の増加の状態を各大字別に表示すれば次の如くである。

一、池上 大字別戸数及人口

|              |       |        |        |        |
|--------------|-------|--------|--------|--------|
| 昭和六年         | 五、一五三 | 一一、一三三 | 一一、〇八一 | 二二、二二四 |
| 昭和元年         | 一九〇   | 六二五    | 五三五    | 一、一六〇  |
| 同 二年         | 一九九   | 六七五    | 六〇一    | 一、二七六  |
| 同 三年         | 二二〇   | 七〇九    | 六四五    | 一、三五四  |
| 同 四年         | 二九六   | 八五一    | 七七三    | 一、六二四  |
| 同 五年         | 三四七   | 一、二三一  | 一、〇九一  | 二、三三二  |
| 同 六年         | 四一七   | 一、四三二  | 一、二八七  | 二、七〇九  |
| 二、雪ヶ谷        |       |        |        |        |
| 昭和元年         | 三二四   | 九〇四    | 八二六    | 一、七三〇  |
| 同 二年         | 三二八   | 九七八    | 九五二    | 一、九三〇  |
| 第二章 土地 人口 建物 |       |        | 一八九    |        |







池上町史

六、下池上

| 昭<br>和<br>元<br>年 | 昭<br>和<br>二<br>年 | 昭<br>和<br>三<br>年 | 昭<br>和<br>四<br>年 | 昭<br>和<br>五<br>年 | 昭<br>和<br>六<br>年 | 昭<br>和<br>七<br>年 | 昭<br>和<br>八<br>年 | 昭<br>和<br>九<br>年 | 昭<br>和<br>十<br>年 | 昭<br>和<br>十<br>一<br>年 | 昭<br>和<br>十<br>二<br>年 | 昭<br>和<br>十<br>三<br>年 | 昭<br>和<br>十<br>四<br>年 | 昭<br>和<br>十<br>五<br>年 | 昭<br>和<br>十<br>六<br>年 | 昭<br>和<br>十<br>七<br>年 | 昭<br>和<br>十<br>八<br>年 | 昭<br>和<br>十<br>九<br>年 | 昭<br>和<br>二<br>十<br>年 |
|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|
| 二〇七              | 二二二              | 二三五              | 三三九              | 三五〇              | 四一三              | 四二八              | 四二七              | 四二七              | 四二七              | 四二七                   | 四二七                   | 四二七                   | 四二七                   | 四二七                   | 四二七                   | 四二七                   | 四二七                   | 四二七                   | 四二七                   |
| 男<br>五〇二         | 男<br>五二四         | 男<br>六三一         | 男<br>六八五         | 男<br>七二七         | 男<br>九二八         | 男<br>九二八         | 男<br>九二八         | 男<br>九二八         | 男<br>九二八         | 男<br>九二八              | 男<br>九二八              | 男<br>九二八              | 男<br>九二八              | 男<br>九二八              | 男<br>九二八              | 男<br>九二八              | 男<br>九二八              | 男<br>九二八              | 男<br>九二八              |
| 女<br>四三五         | 女<br>四七二         | 女<br>五〇一         | 女<br>六一九         | 女<br>七〇一         | 女<br>七七二         | 女<br>七七二         | 女<br>七七二         | 女<br>七七二         | 女<br>七七二         | 女<br>七七二              | 女<br>七七二              | 女<br>七七二              | 女<br>七七二              | 女<br>七七二              | 女<br>七七二              | 女<br>七七二              | 女<br>七七二              | 女<br>七七二              | 女<br>七七二              |
| 計<br>九三七         | 計<br>九九六         | 計<br>一一三三        | 計<br>一、三〇四       | 計<br>一、四二八       | 計<br>一、七〇〇       | 計<br>一、七〇〇       | 計<br>一、七〇〇       | 計<br>一、七〇〇       | 計<br>一、七〇〇       | 計<br>一、七〇〇            | 計<br>一、七〇〇            | 計<br>一、七〇〇            | 計<br>一、七〇〇            | 計<br>一、七〇〇            | 計<br>一、七〇〇            | 計<br>一、七〇〇            | 計<br>一、七〇〇            | 計<br>一、七〇〇            | 計<br>一、七〇〇            |

一九二

八、堤方

| 昭<br>和<br>元<br>年 | 昭<br>和<br>二<br>年 | 昭<br>和<br>三<br>年 | 昭<br>和<br>四<br>年 | 昭<br>和<br>五<br>年 | 昭<br>和<br>六<br>年 | 昭<br>和<br>七<br>年 | 昭<br>和<br>八<br>年 | 昭<br>和<br>九<br>年 | 昭<br>和<br>十<br>年 | 昭<br>和<br>十<br>一<br>年 | 昭<br>和<br>十<br>二<br>年 | 昭<br>和<br>十<br>三<br>年 | 昭<br>和<br>十<br>四<br>年 | 昭<br>和<br>十<br>五<br>年 | 昭<br>和<br>十<br>六<br>年 | 昭<br>和<br>十<br>七<br>年 | 昭<br>和<br>十<br>八<br>年 | 昭<br>和<br>十<br>九<br>年 | 昭<br>和<br>二<br>十<br>年 |
|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|
| 七三八              | 八一               | 三六四              | 五九九              | 六七四              | 七七五              | 八〇五              | 八四五              | 八四五              | 八四五              | 八四五                   | 八四五                   | 八四五                   | 八四五                   | 八四五                   | 八四五                   | 八四五                   | 八四五                   | 八四五                   | 八四五                   |
| 男<br>一、四八六       | 男<br>一、六八五       | 男<br>九五九         | 男<br>一、三一八       | 男<br>一、四六八       | 男<br>一、五三九       | 男<br>一、六九一       | 男<br>一、七八三       | 男<br>一、七八三       | 男<br>一、七八三       | 男<br>一、七八三            | 男<br>一、七八三            | 男<br>一、七八三            | 男<br>一、七八三            | 男<br>一、七八三            | 男<br>一、七八三            | 男<br>一、七八三            | 男<br>一、七八三            | 男<br>一、七八三            | 男<br>一、七八三            |
| 女<br>一、四三〇       | 女<br>一、五七一       | 女<br>九一九         | 女<br>一、一〇七       | 女<br>一、二六七       | 女<br>一、四八五       | 女<br>一、六二〇       | 女<br>一、六九〇       | 女<br>一、六九〇       | 女<br>一、六九〇       | 女<br>一、六九〇            | 女<br>一、六九〇            | 女<br>一、六九〇            | 女<br>一、六九〇            | 女<br>一、六九〇            | 女<br>一、六九〇            | 女<br>一、六九〇            | 女<br>一、六九〇            | 女<br>一、六九〇            | 女<br>一、六九〇            |
| 計<br>二、九一六       | 計<br>三、二五六       | 計<br>一、八七八       | 計<br>二、四二五       | 計<br>二、七三五       | 計<br>三、〇二四       | 計<br>三、三一一       | 計<br>三、四七三       | 計<br>三、四七三       | 計<br>三、四七三       | 計<br>三、四七三            | 計<br>三、四七三            | 計<br>三、四七三            | 計<br>三、四七三            | 計<br>三、四七三            | 計<br>三、四七三            | 計<br>三、四七三            | 計<br>三、四七三            | 計<br>三、四七三            | 計<br>三、四七三            |

第二章 土地人口建物

九、市之倉

| 昭<br>和<br>元<br>年 | 昭<br>和<br>二<br>年 |
|------------------|------------------|
| 三七三              | 五四七              |
| 男<br>八二七         | 男<br>一、一七五       |
| 女<br>七九三         | 女<br>一、〇九三       |
| 計<br>一、六二〇       | 計<br>二、二六八       |



| 昭<br>和<br>三<br>年 | 同<br>四<br>年 | 同<br>五<br>年 | 同<br>六<br>年 | 十、<br>桐ヶ<br>谷 | 昭<br>和<br>元<br>年 | 同<br>二<br>年 | 同<br>三<br>年 | 同<br>四<br>年 | 同<br>五<br>年 | 同<br>六<br>年 | 戸<br>数 |       | 人<br>口 |   |
|------------------|-------------|-------------|-------------|---------------|------------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|--------|-------|--------|---|
|                  |             |             |             |               |                  |             |             |             |             |             | 男      | 女     | 計      | 計 |
| 六〇二              | 七三五         | 七四九         | 七六〇         | 二〇            | 三四               | 四一          | 五八          | 六五          | 七二          | 一、三三二       | 一、二二二  | 二、五四二 |        |   |
| 一、五六〇            | 一、七〇一       | 一、七七一       | 一、七七一       | 六六            | 九八               | 一二〇         | 一三〇         | 一四一         | 一五七         | 一、五八〇       | 一、五八一  | 三、一四一 |        |   |
| 一、六八二            | 一、六八二       | 一、六八二       | 一、六八二       | 六一            | 九一               | 一〇三         | 一一九         | 一二六         | 一三八         | 一、六五二       | 一、六五二  | 三、三五二 |        |   |
| 一、七七一            | 一、七七一       | 一、七七一       | 一、七七一       | 二七            | 一八九              | 二二三         | 二四九         | 二六七         | 二九五         | 一、七七一       | 一、七七一  | 三、四五八 |        |   |

本町に於て大正五年中の出数は二百十四人であつた。之が大正十二年即ち大震災のあつた年には二百九十六人となり、昭和元年（大正十五年）には三百八十九人、更に昭和六年には七百十六人となつてゐる。之をその年度の總人口に對する比率を求むれば、夫々三・九%三・九%三・六%三・一%となり、大體出生数の減退を示してゐる。

死 亡

本町に於て大正五年中の死亡数は百七十九人であつた。之が大正十二年には百八十人となり、昭和元年（大正十五年）には百八十五人、更に昭和六年には三百四十三人となつてゐる之をその年度の總人口に對する比率を求むれば、夫々三・三%二・四%一・七%一・五%となり、大體死亡数の減少を示してゐる。

今次に年度別に出生及び死亡数を表示すれば次の如くである。

| 年 別          | 人 口 動 態 | 出 生 | 死 亡 |
|--------------|---------|-----|-----|
| 大 正 五 年      | 五、四六二   | 二二四 | 一七九 |
| 第二章 土地 人口 建物 |         | 一九五 |     |



|    |     |        |     |     |
|----|-----|--------|-----|-----|
| 大正 | 六年  | 五、四八九  | 一八六 | 一四五 |
| 同  | 七年  | 五、五六八  | 二一八 | 一三九 |
| 同  | 八年  | 五、六五三  | 二一六 | 一七二 |
| 同  | 九年  | 五、七三〇  | 二二六 | 一三九 |
| 同  | 十年  | 五、八三五  | 二二七 | 一六一 |
| 同  | 十一年 | 五、九七二  | 二五二 | 一五八 |
| 同  | 十二年 | 七、四〇一  | 二九六 | 一八〇 |
| 同  | 十三年 | 九、五三二  | 二九六 | 一七九 |
| 同  | 十四年 | 一〇、一八〇 | 三七四 | 二一五 |
| 昭和 | 元年  | 一〇、九〇一 | 三八九 | 一八五 |
| 同  | 二年  | 一三、〇三一 | 四三五 | 二一四 |
| 同  | 三年  | 一四、六二二 | 五〇八 | 二六〇 |
| 同  | 四年  | 一七、九六八 | 五一〇 | 二九六 |
| 同  | 五年  | 二〇、七一一 | 五九二 | 三〇四 |

昭和六年

一三三、二一四

七一六

三四三

### 第三節 建物

本町に於ける大正元年十二月三十一日現在の建物棟数は土造二十六棟、石造二棟、煉瓦造一棟、木造一千三百二十七棟、計一千三百五十六棟で、此の延坪数は二萬四千四百五十二坪、一棟の平均坪数は十八坪三勺である。次に昭和元年（大正十五年）十二月三十一日現在の建物棟数を見ると、土造二十六棟、石造三棟、煉瓦造五棟、木造五千五百七十二棟、コンクリート造四棟、計五千六百十棟、此の延坪数は六萬二千三百八十五坪、一棟の平均坪数は十一坪一合一勺である。次に昭和七年七月三十一日現在の建物棟数を見ると、土造二十六棟、石造四棟、煉瓦造九棟、木造七千三百三十五棟、コンクリート五棟、計七千三百七十九棟、此の延坪数十一萬一千七百九十九坪、一棟の平均坪数は十五坪一合一勺である。之を大正元年に比較すれば棟数に於て六千二十三棟の増加、坪数に於て八萬七千三百四十七坪の増加となつてゐる。更に昭和元年に比較すれば棟数に於て一千七百六十九棟の増加、棟数に於て四萬九千三百十四坪の増加となつてゐる。今大正元年以來の數字を示せば次の如くである。



| 年別   | 棟数 | 坪数  | 棟数 | 坪数  | 棟数 | 坪数 | 棟数    | 坪数     | 棟数 | 坪数   | 棟数    | 坪数     | 棟数   | 坪数    | 棟数    | 坪数     | 棟数    | 坪数 |       |        |
|------|----|-----|----|-----|----|----|-------|--------|----|------|-------|--------|------|-------|-------|--------|-------|----|-------|--------|
| 大正元年 | 三六 | 一〇四 | 二  | 一四  | 一  | 五  | 一、三三  | 二四、三九  | 一  | 一、三五 | 二四、四五 | 一      | 一、三五 | 二四、三九 | 一     | 一、三五   | 二四、三九 | 一  | 一、三五  | 二四、三九  |
| 同五年  | 三二 | 一〇一 | 二  | 一四  | 二  | 一〇 | 一、三八  | 二四、九五  | 一  | 二九   | 一、四一八 | 二五、三九  | 一    | 二九    | 一、四一八 | 二五、三九  | 一     | 二九 | 一、四一八 | 二五、三九  |
| 同十年  | 三三 | 一〇九 | 四  | 二五  | 二  | 一〇 | 一、四六二 | 二六、八三  | 一  | 二九   | 一、五〇三 | 二七、九四  | 一    | 二九    | 一、五〇三 | 二七、九四  | 一     | 二九 | 一、五〇三 | 二七、九四  |
| 昭和元年 | 三六 | 一六六 | 三  | 一〇七 | 五  | 三〇 | 五、五七二 | 六一、八五六 | 四  | 三六   | 五、六二〇 | 六二、三九五 | 四    | 三六    | 五、六二〇 | 六二、三九五 | 四     | 三六 | 五、六二〇 | 六二、三九五 |
| 同二年  | 三六 | 一六六 | 三  | 一〇七 | 七  | 三六 | 五、七九六 | 六四、〇二六 | 四  | 三〇   | 五、八三六 | 六四、六四五 | 四    | 三〇    | 五、八三六 | 六四、六四五 | 四     | 三〇 | 五、八三六 | 六四、六四五 |
| 同三年  | 三六 | 一六六 | 三  | 一〇七 | 七  | 三六 | 五、九四六 | 六九、六七  | 四  | 三〇   | 五、九八七 | 七〇、三二八 | 四    | 三〇    | 五、九八七 | 七〇、三二八 | 四     | 三〇 | 五、九八七 | 七〇、三二八 |
| 同四年  | 三六 | 一六六 | 四  | 一五六 | 七  | 三六 | 六、一六七 | 七四、五九四 | 四  | 三〇   | 六、二〇七 | 七五、二六一 | 四    | 三〇    | 六、二〇七 | 七五、二六一 | 四     | 三〇 | 六、二〇七 | 七五、二六一 |
| 同五年  | 三六 | 一六六 | 四  | 一五六 | 九  | 三六 | 六、四二一 | 八四、四三  | 四  | 三〇   | 六、四六四 | 八五、二二  | 四    | 三〇    | 六、四六四 | 八五、二二  | 四     | 三〇 | 六、四六四 | 八五、二二  |
| 同六年  | 三六 | 一六六 | 四  | 一五六 | 九  | 三六 | 六、九八八 | 一〇、七二  | 四  | 三〇   | 七、一〇  | 一〇、四四  | 四    | 三〇    | 七、一〇  | 一〇、四四  | 四     | 三〇 | 七、一〇  | 一〇、四四  |
| 同七年  | 三六 | 一六六 | 四  | 一五六 | 九  | 三六 | 七、三五  | 一一、〇六四 | 五  | 三〇   | 七、三九  | 一一、七九  | 五    | 三〇    | 七、三九  | 一一、七九  | 五     | 三〇 | 七、三九  | 一一、七九  |

### 第三章 町の行政

#### 第一節 機關

##### 行政機關の變遷

本町の行政機關に就て述ぶる前に、明治維新以後に於ける行政機關の變遷の概要を述べることとする。

明治維新以後明治四年までは本町は品川縣に屬してゐた。當時は尙幕府時代の如く、名主に依つて村政を行つてゐたものである。後東京府となり翌五年四月に至つて、從來の名主年寄を廢止し、改めて戸長、副戸長となしたのであるが、更に明治十一年十一月在來の大小區制なるものを廢止し同時に副戸長を廢し、各村一名の官選戸長を置いて、行政事務を取らしめた。翌十二年には始めて町村會が布かれ、同十四年に至つて戸長は民選となり、更に同二十一年始めて町村制を發布、翌二十二年四月より之を實施すると共に從來の戸長を廢し、以後今日の如く村長又は町長を置くに至つ



たものである。

町村制に依ると町村長の次に助役、収入役を置くことになつてゐる。町村長は町村會議員の選舉に依り、助役、収入役は町村長推薦の上、町村會に諮り、議員の同意を得て決定さるゝものである。明治二十二年町村制の實施と共に、池上、雪ヶ谷、道々橋、久ヶ原、下池上、堤方、徳持、市野倉、桐ヶ谷、石川の十ヶ村合併して、池上村となり、大正十五年十一月池上町と改稱して今日に至つてゐる。

町會

町會は本町に於ける最高の議決機關であつて、本町公民中選舉權を有する者の中から選出せられた二十四名の議員に依つて構成せられ、町政に關する一切の事件及び法律命令に依り其の權限に屬する一切の事件を議決するものである。議員の任期は四ヶ年である。尙現在（昭和七年八月末）の議員は次の如くである。

池上町會議員一覽表

| 氏名  | 住所     | 生年月日      | 職業 |
|-----|--------|-----------|----|
| 溝直也 | 市野倉三三三 | 明治一六、五、二九 | 地主 |

|       |         |            |        |
|-------|---------|------------|--------|
| 齋藤宗久  | 下池上三〇四  | 同 二二、一二、二五 | 醫師     |
| 高瀬已作  | 堤方一六    | 同 二七、七、一   | 薪炭商    |
| 平林久藏  | 久ヶ原四三一  | 同 二三、一一、二五 | 地主     |
| 直井藤五郎 | 雪ヶ谷七七一  | 慶應 三、九、一〇  | 牛乳搾取業  |
| 田村長   | 雪ヶ谷四一   | 明治二七、九、四   | 電氣工事請負 |
| 平本隆吉  | 市野倉三二四  | 同 二六、一一、二〇 | 辯護士    |
| 櫻井市太郎 | 堤方一〇六一  | 同 一〇、一、一三  | 農業者    |
| 綱島傳藏  | 池上四八五   | 同 元、四、一一   | 植木業    |
| 小原厚   | 久ヶ原三二三  | 同 一四、一二、二七 | 地主     |
| 鎌田鶴吉  | 堤方九六七   | 同 一四、一二、二五 | 地主     |
| 指田政次郎 | 徳持九四〇   | 同 二六、一〇、二三 | 呉服商    |
| 永久保新藏 | 雪ヶ谷六四九  | 同 二八、九、八   | 會社重役   |
| 篠澤忠藏  | 久ヶ原九九〇  | 慶應 元、一、二三  | 農業者    |
| 直井勝五郎 | 雪ヶ谷一一四二 | 明治 四、一〇、二三 | 農業者    |



|         |        |            |     |
|---------|--------|------------|-----|
| 森 三吉    | 下池上二四七 | 明治一五、三、一八  | 農   |
| 海老澤 金次郎 | 池上三七一  | 同 五、七、二二   | 植木業 |
| 野口 常藏   | 久ヶ原四一一 | 同 一七、二二、二一 | 農   |
| 清水 要藏   | 堤方九二九  | 同 五、一、二八   | 金物商 |
| 鈴木伊三郎   | 石川四三   | 同 一、二、二五   | 地主  |
| 鈴木 要助   | 市野倉一八八 | 同 五、五、二    | 農   |
| 門倉 歙之助  | 池上二四三  | 同 一、九、一八   | 農   |
| 川島百太郎   | 市野倉一八〇 | 同 一三、一、二三  | 地主  |
| 菊地 慣    | 下池上三〇三 | 同 一九、二、二七  | 藥種商 |

町長 助役 収入役 其他の吏員

町長は町政を統轄し、町を代表する執行機關であつて、町會に於て選舉し就任する。助役は町長を補佐し、町長故障ある時は之が代理たるべきもので町長の推薦によつて町會が之を定める。本町の助役は定員二名で町長と共に名譽職である。次に町の出納其他の會計事務を掌理せしむる爲に收

入役がある。助役と同じく町長の推薦によつて町會が之を定める。以上町長、助役、収入役の任期は夫々四ヶ年である。以上の外町長の事務を補助する爲主事一名、書記十三名、技手一名、書記補五名を置き夫々事務に従事してゐる。今是等の吏員の氏名住所等を表示すれば次の如くである。

池上町役場吏員一覧表

| 職名  | 氏名    | 住所      | 生年月日       | 擔當事務  |
|-----|-------|---------|------------|-------|
| 町長  | 今西兼二  | 市野倉二四五  | 文久三、一、三    |       |
| 助役  | 鎌田・鶴吉 | 堤方九六七   | 明治二四、二、二五  |       |
| 収入役 | 永久保徳治 | 雪ヶ谷二〇五七 | 同 一三、九、八   | 會計係長  |
| 主事  | 横溝興吉  | 市野倉一九〇  | 同 一五、九、六   | 庶務係長  |
| 書記  | 宮田 皓  | 久ヶ原四三九  | 同 二〇、五、六   | 稅務係長  |
|     | 石澤 昶  | 同 八七五   | 同 三二、四、七   | 戶籍係長  |
|     | 相原源治  | 同 二二一   | 同 二六、四、一九  | 兵事兼衛生 |
|     | 小原堅吉  | 同 三九二   | 同 三四、一〇、一一 | 家屋    |
|     | 山地正路  | 堤方九一四   | 同 二六、一、一四  | 庶務統計  |



|     |       |              |            |       |
|-----|-------|--------------|------------|-------|
| 書記  | 直井記道  | 雪ヶ谷九〇四       | 明治三四、一二、二八 | 滯納整理  |
| 同   | 遠藤辨次郎 | 久ヶ原四三九       | 同二七、九、二九   | 庶務、選舉 |
| 同   | 杉田次吉  | 下池上二四八       | 同三二、五、二五   | 營業、雜務 |
| 同   | 朝倉英吉  | 大井町八七〇       | 同三四、六、三〇   | 會計係   |
| 同   | 宮田悟   | 神奈川縣中郡平塚町九八九 | 同三七、七、一一   | 庶務、社會 |
| 同   | 澤度源吾  | 下池上三〇七       | 同七、三、一五    | 學事    |
| 同   | 上村多眞章 | 久ヶ原二一一       | 同二〇、七、二八   | 滯納整理  |
| 同   | 矢野多盛  | 同 一〇一三       | 同三七、五、一一   | 會計係   |
| 技手  | 小路眞作  | 同 二〇九        | 同三九、七、二六   | 土木    |
| 書記  | 郡司三四郎 | 矢口町小林一〇      | 同 一六、六、一〇  | 土地、家屋 |
| 同   | 小笛正一  | 市野倉三二四       | 同 二二、一〇、二九 | 稅務兼建築 |
| 書記補 | 篠澤利男  | 久ヶ原九九四       | 同 四一、一〇、一四 | 營業、雜種 |
| 同   | 加藤鎌一  | 下池上三〇七       | 同 二九、一一、二〇 | 戶籍、寄留 |
| 同   | 間中幸作  | 同 二四八        | 同 四五、六、一七  | 戶籍、印鑑 |

常設委員

以上の外町村制其他の法令によつて設置せられたる各種の委員がある。本町に於ける常設委員の種類及其の定数は左の通りである。常設委員の任期は何れも四ヶ年である。

|      |     |
|------|-----|
| 學務委員 | 九人  |
| 土木委員 | 十二人 |
| 衛生委員 | 八人  |

各委員は左の職務及權限を持つてゐる。

- 一、町會の決議に従ひ各其の分擔の事務を施行すること
- 二、擔任事務に要すべき經費を調査し町長に提出し翌年度施行事務及び其の經費の議決を請ふこと
- 三、隨時急施の事務發生の場合に於ては其施行に要すべき經費及び手續を調査し町長に提出し町會の開設を請ふこと
- 四、前年度に於て施行せし事務の報告書を調製し町長に提出すること



更に各委員毎にその任務を述べれば次の如くである。學務委員は本町行政の中教育に關する事務を擔任し、土木委員は本町行政の中土木事務に關する事務を擔任し、衛生委員は本町行政の中衛生に關する事務を擔任する。

常設委員氏名一覽表

一、學務委員(現職)

| 氏名    | 住所     | 生年月日       | 就職月日    | 摘要 |
|-------|--------|------------|---------|----|
| 遠藤惣七  | 下池上三三三 | 明治 六、九、六   | 昭四、六、一七 |    |
| 中里三郎  | 德持 九三三 | 同 二二、三、四   | 同       |    |
| 宮崎彦太郎 | 雪ヶ谷三九一 | 同 三、五、二八   | 同       |    |
| 渡邊善松  | 池上 五一三 | 同 二〇、一一、二一 | 同       |    |
| 野口市太郎 | 久ヶ原四一七 | 同 八、四、九    | 同       |    |
| 篠澤市太郎 | 同 九六三  | 同 九、一〇、一七  | 同       |    |
| 高垣寅次郎 | 市野倉 二一 | 同 二三、二、二六  | 同       |    |
| 塚田金一郎 | 堤方 一五二 | 同 七、二、二    | 同       |    |

井上 弘 下池上七一 同 一八、一、一三 同

池上尋高 小學校長

二、土木委員(現職)

| 氏名    | 住所      | 生年月日       | 就職月日     | 摘要         |
|-------|---------|------------|----------|------------|
| 三木鎌吉  | 久ヶ原一〇七〇 | 明治 一三、四、一七 | 大正九、四、二  |            |
| 小原甚五郎 | 德持 八三八  | 同 八、一、二    | 大二三、三、一七 |            |
| 直井源七  | 雪ヶ谷七三二  | 同 二、九、一六   | 大二四、六、一五 |            |
| 森井半之助 | 池上 四八七  | 同 五、四、二四   | 大二、六、二五  |            |
| 長島鈴吉  | 久ヶ原四八六  | 同 一一、一、五   | 大二四、六、一五 |            |
| 横溝源次郎 | 桐ヶ谷一三二  | 同 二〇、八、三一  | 大二四、六、一五 | 方面委員<br>兼任 |
| 宮島勝太郎 | 市野倉一九八  | 同 一六、三、三〇  | 昭二、五、一一  |            |
| 綱島仙之助 | 池上 二六四  | 同 一七、九、一三  | 昭四、六、一七  |            |
| 永久保三吉 | 雪ヶ谷七〇九  | 同 四、九、一五   | 昭四、六、一七  |            |
| 鈴木久太郎 | 石川 一三四  | 同 二二、九、二二  | 昭四、六、一七  |            |
| 遠藤福太郎 | 堤方 九三四  | 同 一六、二、二四  | 昭四、六、一七  |            |



指田 半六 下池上三三六 同一五、四、一三 昭五、二二〇

三、衛生委員(現職)

| 氏名    | 住所      | 生年月日       | 就職年月日    | 摘要 |
|-------|---------|------------|----------|----|
| 石井 爲吉 | 道々橋三八二  | 明治二四、八、一九  | 大二三、一、二六 |    |
| 三木清三郎 | 久ヶ原一〇二二 | 萬延元、四、二五   | 同        |    |
| 永野 長吉 | 德持 七七二  | 明治 九、三、二八  | 同        |    |
| 横溝宗次郎 | 市野倉三〇二  | 文久 三、二二、一九 | 同        |    |
| 清水佐兵衛 | 下池上三〇一  | 明治一四、一、三   | 昭三、三、五   |    |
| 君島 爲吉 | 池上 六五〇  | 明治一八、六、一   | 昭四、六、一七  |    |
| 宮田初太郎 | 雪ヶ谷三二六  | 同 五、一、一一   | 同        |    |
| 柏木末廣  | 桐ヶ谷一二五  | 同 一九、二、一五  | 同        |    |

尙歴代の各常設委員の氏名その他を記すれば次の如くである

一、學務委員(退職者)

| 氏名      | 住所     | 就職年月日      | 氏名     | 住所     | 就職年月日      |
|---------|--------|------------|--------|--------|------------|
| 三木勇次郎   | 久ヶ原八九三 | 明治三二、七、二   | 磯右衛門   | 池上 五一五 | 明治三六、六、三〇  |
| 織右衛門    | 池上 五一五 | 同          | 三木勇次郎  | 久ヶ原八九三 | 同          |
| 岩田周三郎   | 下池上二九五 | 同 三四、七、二七  | 小木重兵衛  | 下池上二九四 | 同 三九、一〇、一九 |
| 遠藤徳三郎   | 堤方 九九一 | 同          | 遠藤徳三郎  | 堤方 九九一 | 同          |
| 直井 源七   | 雪ヶ谷七三二 | 同          | 鈴木 茂吉  | 雪ヶ谷一〇四 | 同          |
| ○指田 半六  | 下池上三三六 | 明治三九、一〇、一六 | 篠澤 忠藏  | 久原 九九〇 | 大正 六、六、二六  |
| 小原 厚    | 久原 三二三 | 同 四四、六、一五  | 指田 半六  | 下池上三三六 | 同          |
| 渡邊政太郎   | 池上 六〇一 | 同          | 遠藤徳三郎  | 堤方 九九一 | 同          |
| 同       | 同      | 大正 二、六、二五  | ○直井 傳藏 | 雪ヶ谷六五六 | 同 六、七、三一   |
| 遠藤徳三郎   | 堤方 九九一 | 同          | 指田 半六  | 下池上三三六 | 同 一〇、六、一五  |
| 指田 半六   | 下池上三三六 | 同          | 渡邊政太郎  | 池上 六〇一 | 同          |
| 小原 厚    | 久原 三二三 | 同          | 直井 傳藏  | 雪ヶ谷六五六 | 同          |
| 國府方 善太郎 | 雪ヶ谷一〇五 | 同          | 遠藤徳三郎  | 堤方 九九一 | 同          |
| 渡邊政太郎   | 池上 六〇一 | 同 六、六、二六   | 篠澤 忠藏  | 久原 九九〇 | 同          |



|       |        |           |       |        |     |        |
|-------|--------|-----------|-------|--------|-----|--------|
| 國府方   | 雪ヶ谷一〇五 | 同         | 遠藤八十七 | 下池上三一三 | 同   | 一、三、八  |
| 善太郎   | 三      |           | 宮崎彦太郎 | 雪ヶ谷三九一 | 昭和  | 四、六、一七 |
| 網島菊次郎 | 池上 五五〇 | 大正一四、六、一五 | 野口市太郎 | 久ヶ原四一七 | 同   |        |
| 直井 傳藏 | 雪ヶ谷六五六 | 同         | 篠澤市太郎 | 同      | 九六三 | 同      |
| 遠藤 惣七 | 下池上三一三 | 同         | 遠藤 惣七 | 下池上三一三 | 同   |        |
| 篠澤 忠藏 | 久ヶ原九九〇 | 同         | 中里 三郎 | 德持 九三三 | 同   |        |
| 遠藤徳三郎 | 堤方 一九一 | 同         | 高垣寅次郎 | 市野倉 二一 | 同   |        |
| 高垣寅次郎 | 市野倉 二一 | 昭和 三、三、五  | 塚田金市郎 | 堤方 一五二 | 同   |        |
| 渡邊 善松 | 池上 五一三 | 同         |       |        |     |        |

備考——氏名中〇印ヲ付セルモノハ補缺就職ヲ示ス

二、土木委員(退職者)

| 氏名    | 住 所    | 就職年月日     | 氏名     | 住 所    | 就職年月日     |
|-------|--------|-----------|--------|--------|-----------|
| 網島 主計 | 池上 五二九 | 明治三三、三、三〇 | 〇網島 傳藏 | 池上 五〇六 | 明治四二、七、一  |
| 清水虎次郎 | 堤方 九二九 | 同 三四、七、二七 | 永 久 保  | 雪ヶ谷七〇九 | 同 四四、六、一五 |
| 網島 主計 | 池上 五二九 | 同         | 源 太 郎  | 雪ヶ谷七〇九 | 同         |
| 直井 源七 | 雪ヶ谷七三二 | 同         | 網島 傳藏  | 池上 五〇六 | 同         |
|       |        |           | 鈴木 要助  | 市野倉一八八 | 同         |

|       |         |            |       |         |           |
|-------|---------|------------|-------|---------|-----------|
| 森網 三郎 | 下池上二四七  | 同 三六、六、三〇  | 森井半之助 | 池上 四八七  | 大正 二、六、二五 |
| 大山 周藏 | 德持 八三五  | 同          | 平林市太郎 | 久ヶ原四六五  | 同         |
| 森井 一郎 | 池上 四八六  | 同 三九、一〇、一九 | 澤田 金藏 | 德持 七五四  | 同         |
| 柏木助次郎 | 桐ヶ谷一二五  | 同          | 永 久 保 | 雪ヶ谷七〇九  | 同         |
| 直井源太郎 | 雪ヶ谷五二八  | 同          | 柏木助次郎 | 桐ヶ谷一二五  | 同         |
| 永野三五郎 | 德持 七七二  | 大正 二、七、四   | 門倉新次郎 | 池上 二四九  | 大正九、四、二   |
| 川島重太郎 | 市野倉三六一  | 同 三、一、二五   | 直井勝五郎 | 雪ヶ谷一一四二 | 同         |
| 森井半之助 | 池上 四八七  | 同 六、六、二六   | 森井半之助 | 池上 四八七  | 同 一〇、六、一五 |
| 永 久 保 | 雪ヶ谷七〇九  | 同          | 飯田菊五郎 | 雪ヶ谷三四一  | 同         |
| 源 太 郎 | 久ヶ原五一六  | 同          | 川島重太郎 | 市野倉三六一  | 同         |
| 中島直太郎 | 久ヶ原五一六  | 同          | 中島直太郎 | 久ヶ原五一六  | 同         |
| 大山市太郎 | 德持 八三五  | 同          | 石井喜三郎 | 道々橋 四四  | 同         |
| 川島重太郎 | 市野倉三六一  | 同          | 小澤金三郎 | 堤方一〇〇七  | 同 一三、三、一七 |
| 小澤金三郎 | 堤方一〇〇七  | 同 九、四、二    | 三木 鎌吉 | 久ヶ原一〇七〇 | 同         |
| 宗仲傳次郎 | 下池上二五九  | 同          | 宗仲傳次郎 | 下池上二五九  | 同         |
| 三木 鎌吉 | 久ヶ原一〇七〇 | 同          |       |         |           |



門倉新次郎 池上 二四九 大正一三、三、一七  
 直井勝五郎 雪ヶ谷一四二 同  
 小原甚五郎 德持 八三八 同  
 横溝源次郎 桐ヶ谷一三二 同 一四、六、一五  
 川島重太郎 市野倉三六一 同  
 長島 鈴吉 久ヶ原四八六 同  
 飯田菊五郎 雪ヶ谷三三一 同  
 森井半之助 池上 四八七 同  
 鈴木伊三郎 石川 四三三 同  
 ○直井 源七 雪ヶ谷七三二 同  
 久永保三吉 雪ヶ谷七〇九 昭和 四、六、一七  
 鈴木久太郎 一川 一三四 同  
 長島 鈴吉 久ヶ原四八六 同  
 宮島勝太郎 市野倉 一九 同  
 ○門倉 歙次郎 池上 二四九 大正一四、六、一五  
 ○荒 松五郎 堤方 九九〇 同  
 ○宮島勝太郎 市野倉一九八 昭和 二、五、一  
 宗仲傳次郎 下池上二五九 同 三、三、五  
 三木 鎌吉 久ヶ原一〇七〇 同  
 小原甚五郎 德持 八三八 同  
 直井 源七 雪ヶ谷七三二 同  
 門倉 歙之助 池上 二四三 同  
 荒 松五郎 堤方 九九〇 同  
 森井半之助 池上 四八七 同 四、六、一七  
 横溝源次郎 桐ヶ谷一三二 昭和 四、六、一七  
 遠藤福太郎 堤方 九三四 同  
 網島仙之助 池上 二六四 同  
 指田 半六 下池上三三六 昭和 五、二、一〇

備考——氏名中○印ヲ付セルモノハ補缺就職ヲ示ス

三、衛生委員(退職者)

| 氏名      | 住 所     | 就職年月日     | 氏名      | 住 所     | 就職年月日     |
|---------|---------|-----------|---------|---------|-----------|
| 鈴木嘉兵衛   | 市野倉一八八  | 明治三二、七、二  | 指田 半六   | 下池上三三六  | 明治三四、七、二七 |
| 宮 佐五右衛門 | 雪ヶ谷三九一  | 同         | 小原源太郎   | 久ヶ原三二三  | 同         |
| 渡邊 茂吉   | 池上 五一三  | 明治三四、七、二七 | 海老 澤 次郎 | 池上 三七一  | 昭和 三、三、五  |
| ○荒 忠藏   | 堤方 九九〇  | 同         | 飯田 金七   | 雪ヶ谷三四八  | 同         |
| 海老 澤 次郎 | 池上 三七一  | 大正一三、三、一  | 石井 爲吉   | 道々橋三八二  | 同         |
| 直井米太郎   | 雪ヶ谷 四三三 | 同         | 三木清三郎   | 久ヶ原一〇二二 | 同         |
| 石井 爲吉   | 道々橋三八二  | 同         | 清水佐兵衛   | 下池上三〇一  | 同         |
| 三木清三郎   | 久ヶ原一〇二二 | 同         | 永野 長吉   | 德持 七七二  | 同         |
| 稻垣光太郎   | 下池上三一四  | 同         | 清水 要藏   | 堤方 九二九  | 同         |
| 永野 長吉   | 德持 七七二  | 同         | 横溝宗次郎   | 市野倉三〇二  | 同         |
| 清水 要藏   | 堤方 九二九  | 同         | 石井 爲吉   | 道々橋三八二  | 同 四、六、一七  |
| 横溝宗次郎   | 市野倉三〇二  | 同         | 三木清三郎   | 久ヶ原一〇二二 | 同         |
| 永野 長吉   | 德持 七七二  | 昭和 四、六、一七 | 君島 爲吉   | 池上 六五〇  | 同         |



横溝宗次郎 市野倉三〇一同  
清水佐兵衛 下池上三〇二同

宮田初太郎 雪ヶ谷三二六同  
柏木 未廣 桐ヶ谷一二五同

### 區長、區長代理

本町は其の行政上の便宜から、町村制第六十八條に依り本町を左の三十六區に分ち區長及び區長代理者各一名を置き、區内に關する事務を處理してゐる。今池上町區長及區長代理設置規定より、重なる箇條を列記すれば次の如くである。

第二條 區長及區長代理ハ名譽職トス

公民中選舉權ヲ有スル者ヨリ町長ノ推薦ニヨリ町會之ヲ定ム

第三條 區長及其代理者ノ任期ハ四ケ年トシ、滿期重任ヲ妨ケス

缺員ヲ生シタル時ハ直チニ補缺選任ヲ行フヘシ

補缺ニヨリ選任サレタル區長及其代理者ノ任期ハ前任者ノ殘任期間トス

第四條 區長及區長代理者ノ後任者就職シタルトキハ、前任者ハ擔任スル業務ヲ後任者ニ引キ繼

クヘシ

第五條 區長及其代理者ハ町長ノ事務ニシテ其區ニ屬スル其事務ヲ補助ス

但シ公設團體ノ事業トシテ既ニ實施中ノモノニアリテハ總テ協調ヲ要スルモノトス

一、法令、告示、傳達等ノ周知ニ關スル事項

二、學齡兒童ノ就學督勵ニ關スル事項

三、勸業、教育、衛生普及發達ニ關スル事項

四、統計材料調査蒐集ニ關スル事項

五、納税ノ督勵ニ關スル事項

六、道路、溝渠、橋梁管理修繕ニ關スル事項

七、火災、警備ニ關スル諸般ノ事項

八、徵兵召集應募其他兵事ニ關スル事項

九、町是、諸規約ノ勵行ニ關スル事項

一〇、其他特ニ命ゼラレタル事項

第六條 數區協同ヲ要スル事務ニ關シ、爭議ヲ生シタルトキハ、町長之ヲ裁決ス

第七條 區長及其代理者ニハ別ニ定ムルトコロニヨリ報酬ヲ支給ス



區及域區表

| 區名   | 大字名 | 通稱字名 | 區名   | 大字名 | 通稱字名 | 區名   | 大字名 | 通稱字名 |
|------|-----|------|------|-----|------|------|-----|------|
| 第一區  | 池上  | 上谷   | 第十三區 | 久ヶ原 | 向南   | 第二五區 | 堤方  | 宮下上  |
| 第二區  | 同   | 中谷   | 第十四區 | 同   | 向北   | 第二六區 | 同   | 宮下下  |
| 第三區  | 同   | 下谷   | 第十五區 | 同   | 千本松  | 第二七區 | 同   | 西新井  |
| 第四區  | 同   | 小池   | 第十六區 | 同   | 原南   | 第二八區 | 同   | 山下入  |
| 第五區  | 同   | 雪ヶ谷  | 第十七區 | 同   | 原中   | 第二九區 | 同   | 山下山谷 |
| 第六區  | 同   | 通石川  | 第十八區 | 同   | 原北   | 第三〇區 | 同   | 蒲田溝  |
| 第七區  | 同   | 日下山  | 第十九區 | 下池上 | 表下   | 第三一區 | 市野倉 | 山野   |
| 第八區  | 同   | 原    | 第二〇區 | 同   | 表上   | 第三二區 | 同   | 子母澤  |
| 第九區  | 同   | 並木   | 第二一區 | 同   | 北門前  | 第三三區 | 同   | 宮下   |
| 第一〇區 | 同   | 道々橋  | 第二二區 | 德持  | 通り   | 第三四區 | 同   | 谷戸原  |
| 第十一區 | 同   | 千本   | 第二三區 | 同   | 砂田   | 第三五區 | 同   | 同    |
| 第十二區 | 同   | 石川ノ  | 第二四區 | 同   | 千本松  | 第三六區 | 同   | 桐ヶ谷  |

區長一覽表

| 區名   | 氏名     | 住所     | 生年月日     | 就職年月日    |
|------|--------|--------|----------|----------|
| 第一區  | 森井染次郎  | 池上四三〇  | 慶應三、二、三  | 昭和四、六、一七 |
| 第二區  | 門倉元次郎  | 同四七三   | 明治三、四、一一 | 同四、二、五   |
| 第三區  | 海老澤林造  | 同六一三   | 同二〇、六、五  | 同四、六、一七  |
| 第四區  | 森井直吉   | 同一三七四  | 同一二、一、一一 | 同        |
| 第五區  | 平井保兵衛  | 雪ヶ谷三八  | 同一二、五、七  | 同        |
| 第六區  | 宮田文藏   | 同一一一   | 同二二、二、一  | 同        |
| 第七區  | 飯田菊五郎  | 同三四一   | 同八、九、一六  | 同        |
| 第八區  | 田中周藏   | 同五四四   | 同二二、二、一〇 | 同        |
| 第九區  | 永久保十太郎 | 同二〇九三  | 同二二、二、一〇 | 同        |
| 第十區  | 三部正治   | 道々橋九   | 同二九、二、二二 | 同        |
| 第十一區 | 醍醐三次郎  | 同三八四   | 同四、六、二   | 同        |
| 第十二區 | 清水慶三   | 石川一〇〇  | 同二〇、一、二三 | 同        |
| 第十三區 | 宮田信造   | 久ヶ原五〇〇 | 同二三、一、一二 | 同        |



|      |       |   |        |   |          |   |
|------|-------|---|--------|---|----------|---|
| 第一四區 | 宮田重太  | 同 | 三三〇    | 同 | 七、三、二八   | 同 |
| 第一五區 | 岩瀬喜久松 | 同 | 六五四    | 同 | 一五、一〇、二八 | 同 |
| 第一六區 | 中島長五郎 | 同 | 九六五    | 同 | 一五、四、一三  | 同 |
| 第一七區 | 篠澤長吉  | 同 | 九九四    | 同 | 一二、五、二七  | 同 |
| 第一八區 | 三木平吉  | 同 | 一〇五八   | 同 | 三二、六、八   | 同 |
| 第一九區 | 小木重兵衛 | 同 | 下池上二九四 | 同 | 一九、一、二八  | 同 |
| 第二〇區 | 篠澤島三郎 | 同 | 久ヶ原一四  | 同 | 一八、二、一七  | 同 |
| 第二一區 | 藤田作之助 | 同 | 下池上一二四 | 同 | 一八、二、一三  | 同 |
| 第二二區 | 淺野彌五郎 | 同 | 德持九四六  | 同 | 八、六、二四   | 同 |
| 第二三區 | 大山市太郎 | 同 | 八三五    | 同 | 一五、六、二九  | 同 |
| 第二四區 | 澤田與三郎 | 同 | 七五四    | 同 | 五、七、一九   | 同 |
| 第二五區 | 吉田彦太郎 | 同 | 堤方九二二  | 同 | 二一、一、一八  | 同 |
| 第二六區 | 戸張梅吉  | 同 | 同      | 同 | 一五、二、一〇  | 同 |
| 第二七區 | 中西常次郎 | 同 | 九〇〇    | 同 | 一〇、五、四   | 同 |
| 第二八區 | 櫻井政治郎 | 同 | 一〇五八   | 同 | 一一、一、七   | 同 |

區長代理者一覽表

|      |       |       |           |          |         |   |
|------|-------|-------|-----------|----------|---------|---|
| 第二九區 | 荒鐵藏   | 同     | 九八六       | 同        | 一〇、一、一九 | 同 |
| 第三〇區 | 鈴木瀧次郎 | 同     | 一八〇       | 同        | 二三、二、二八 | 同 |
| 第三一區 | 鈴木作造  | 同     | 市野倉二六三    | 同        | 六、七、三〇  | 同 |
| 第三二區 | 冲山定吉  | 同     | 二二一       | 同        | 一一、八、三  | 同 |
| 第三三區 | 鈴木三藏  | 同     | 二六六       | 同        | 六、二、五   | 同 |
| 第三四區 | 川島作藏  | 同     | 三五九       | 同        | 二九、四、四  | 同 |
| 第三五區 | (缺員)  |       |           |          |         |   |
| 第三六區 | 宮島房太郎 | 同     | 桐ヶ谷一八一    | 同        | 一七、一、二三 | 同 |
| 區名   | 氏名    | 住所    | 生年月日      | 就職年月日    |         |   |
| 第一區  | 繩倉太兵衛 | 池上四五九 | 明治六、三、二三  | 昭和四、六、一七 |         |   |
| 第二區  | 網島重太郎 | 同 五一五 | 同 一三、九、三  | 同        |         |   |
| 第三區  | 海老澤萬吉 | 同 六三九 | 同 二、一〇、二八 | 同        |         |   |
| 第四區  | 森井安五郎 | 同 二五四 | 同 一五、一、一九 | 同        |         |   |
| 第五區  | 大附斗米吉 | 雪ヶ谷四一 | 同 二、二、一三  | 同        |         |   |



|      |       |     |        |    |         |   |
|------|-------|-----|--------|----|---------|---|
| 第六區  | 田村竹松  | 同   | 八九     | 同  | 四、五、一   | 同 |
| 第七區  | 飯田淺次郎 | 同   | 一二三六   | 同  | 一〇、九、七  | 同 |
| 第八區  | 直井磯吉  | 同   | 七二九    | 同  | 一五、三、二五 | 同 |
| 第九區  | 直井雪太郎 | 同   | 九八二    | 同  | 二四、八、二三 | 同 |
| 第一〇區 | 醍醐己之助 | 同   | 道々橋 一五 | 同  | 二、九、二〇  | 同 |
| 第一一區 | 綱島文藏  | 池上  | 六六八    | 同  | 一〇、一、九  | 同 |
| 第一二區 | 三田清吉  | 石川  | 二二二    | 同  | 二〇、二、二二 | 同 |
| 第一三區 | 篠澤要藏  | 久ヶ原 | 五七八    | 同  | 一七、一〇、三 | 同 |
| 第一四區 | 小原彦三郎 | 同   | 四〇一    | 同  | 九、四、二〇  | 同 |
| 第一五區 | 久保井定吉 | 同   | 四二     | 慶應 | 三、二、二七  | 同 |
| 第一六區 | 松永丈之進 | 同   | 八八五    | 明治 | 一、五、七   | 同 |
| 第一七區 | 戸田峯吉  | 同   | 九〇二    | 同  | 一四、六、二二 | 同 |
| 第一八區 | 宮田象太郎 | 同   | 一〇四五   | 同  | 五、二、一   | 同 |
| 第一九區 | 白川和市  | 下池上 | 三〇三    | 同  | 一四、二、二三 | 同 |
| 第二〇區 | 中島孝次郎 | 同   | 三二五    | 同  | 二七、三、二五 | 同 |

|      |       |     |      |    |          |   |
|------|-------|-----|------|----|----------|---|
| 第二一區 | 君島爲次郎 | 下池上 | 九五   | 明治 | 二一、一〇、一〇 | 同 |
| 第二二區 | 並木条藏  | 徳持  | 九三八  | 同  | 一七、一、一四  | 同 |
| 第二三區 | 指田豊吉  | 同   | 八三六  | 同  | 元、九、四    | 同 |
| 第二四區 | 飯島藤三郎 | 同   | 七五一  | 同  | 一一、二、二二  | 同 |
| 第二五區 | 石川惣五郎 | 同   | 九三三  | 同  | 二一、一、一〇  | 同 |
| 第二六區 | 楠井久生  | 堤方  | 五八三  | 同  | 二八、六、一〇  | 同 |
| 第二七區 | 遠山清作  | 同   | 七三四  | 同  | 一九、八、二五  | 同 |
| 第二八區 | 小澤肇   | 同   | 一〇〇二 | 同  | 二五、一〇、一〇 | 同 |
| 第二九區 | 大山晋吉  | 同   | 九八七  | 同  | 六、五、一八   | 同 |
| 第三〇區 | 土田重太郎 | 同   | 五〇   | 同  | 二八、三、一〇  | 同 |
| 第三一區 | 中島政次郎 | 市野倉 | 二六〇  | 同  | 二三、八、一五  | 同 |
| 第三二區 | 深谷宗作  | 同   | 四    | 同  | 二三、五、二三  | 同 |
| 第三三區 | 川島菊太郎 | 同   | 三〇一  | 同  | 一〇、六、一七  | 同 |
| 第三四區 | 戸村幹   | 同   | 四〇三  | 同  | 二〇、八、二二  | 同 |
| 第三五區 | (缺員)  |     |      |    |          |   |



第三六區 蒲田熊次郎 桐ヶ谷一三七 明治二八、一、二 昭和四、六、一七

家屋賃貸價格調査員

之は昭和四年十二月二十八日發布の勅令第四〇三號による家屋賃貸價格調査令の命ずる處に従つて、昭和五年四月十五日選出せられたものである。此の調査員の選舉資格は選舉人被選舉人共總て家屋を所有する者全部といふことになつてゐる。本町に於ける現在の調査員の氏名其他を表示すれば次の如くである。

家屋稅調査員一覽表

| 氏名     | 住所     | 生年月日      | 就職年月日    | 摘要 |
|--------|--------|-----------|----------|----|
| 鎌田 鶴吉  | 堤方 九六七 | 明治一四、一、二五 | 昭 五、四、一五 |    |
| 村上 福松  | 市野倉一八〇 | 同 三五、六、一三 | 同        |    |
| 白川 延喜  | 德持 三九一 | 同 二八、一、二四 | 同        |    |
| 宮島 勝太郎 | 市野倉一九八 | 同 一六、三、三〇 | 同        |    |
| 野口 常藏  | 久ヶ原四一一 | 同 一七、二、二一 | 同        |    |

|        |         |            |          |          |
|--------|---------|------------|----------|----------|
| 綱島 傳藏  | 池上 四八五  | 同 元、四、一一   | 昭 七、一、二六 |          |
| 杉谷 末男  | 池上一四四九  | 同 六、三、二四   | 昭 五、四、一五 |          |
| 指田 政次郎 | 德持 九四〇  | 同 二六、一〇、二三 | 同        |          |
| 遠藤 英太郎 | 下池上三三二  | 同 二九、七、六   | 同        |          |
| 直井 金五郎 | 雪ヶ谷九〇四  | 同 八、二、一〇   | 同        |          |
| 平林 久藏  | 久ヶ原四三一  | 同 二三、一、二五  | 同        |          |
| 永久 保徳治 | 雪ヶ谷一〇五七 | 同 一三、九、八   | 同        |          |
| 三吉 勉   | 堤方 一〇六  | 同 二六、二、八   | 同        | 昭七、一、八辭職 |

土地賃貸價格調査委員

之は昭和二年三月二十九日發布の法律第十六號の土地賃貸價格調査委員會法の定むる處によつて選出せられたものである。此の調査員の選舉資格は選舉人、被選舉人とも土地を所有する者全部といふことになつてゐる。本町に於ける現在の調査員の氏名其他を示せば次の如くである。



調査員一覽表

| 氏名   | 住所     | 生年月日      | 就職年月日    | 摘要 |
|------|--------|-----------|----------|----|
| 横溝直也 | 市野倉三二三 | 明治一六、五、二九 | 昭和二、七、二九 |    |

陪審員

之は大正十二年四月十七日發布の法律第五〇號による陪審法に従つて選出せられたものである。陪審員となる爲には次の如き條件を具備した者でなければならぬ。

即ち、帝國臣民にして三十歳以上の男子であること、二ヶ年以上同一町村に居住してゐること、引續き直接國稅三圓以上を納むる者たること、且つ犯罪なきもの及び禁治産、準禁治産者たらざるものたること、讀書を爲し得る者たること、等

尙陪審法第十四條に依ると左に掲ぐる者は陪審員の職務に就くことが出来ないことになつてゐる

- 一、國務大臣
- 二、在職ノ判事、檢事、陸軍法務官、海軍法務官
- 三、在職ノ行政裁判所長官、行政裁判所評定官

- 四、在職ノ宮内官吏
- 五、現役ノ陸軍軍人、海軍軍人
- 六、在職ノ廳府縣長官、郡長、島司、廳支廳長
- 七、在職ノ警察官吏
- 八、在職ノ監獄官吏
- 九、在職ノ裁判所書記長、裁判所書記
- 一〇、在職ノ收稅官吏、稅關官吏、專賣官吏
- 一一、郵便電信電話鐵道及軌道ノ現業ニ従事スル者並船員
- 一二、市町村長
- 一三、辯護士、辯理士
- 一四、公證人、執達吏、代書人
- 一五、在職ノ小學校教員
- 一六、神官、神職、僧侶、諸宗教師
- 一七、醫師、齒科醫師、藥劑師



一八、學生、生徒

尙、本町に於ける陪審員の氏名其他を示せば次の如くである。

陪審員（現在）

| 職名  | 氏名      | 住所     | 生年月日       | 就職年月日     | 摘要 |
|-----|---------|--------|------------|-----------|----|
| 陪審員 | 森井鈴吉    | 池上 五八五 | 明治一、五、二二   | 昭 六、一一、一八 |    |
| 候補者 | 君島久太郎   | 同 六六〇  | 慶 二、一〇、六   | 同         |    |
| 同   | 竹下角太郎   | 雪ヶ谷 三二 | 明治二九、八、七   | 同         |    |
| 同   | 永久保 十太郎 | 同 一〇九三 | 同 二二、一二、一〇 | 同         |    |
| 同   | 三好 大氣   | 石川 一一〇 | 同 二七、一、二〇  | 同         |    |
| 同   | 宮田重太良   | 久ヶ原三三〇 | 同 七、三、二八   | 同         |    |
| 同   | 片山 秀夫   | 同 五六七  | 同 二二、二、一三  | 同         |    |
| 同   | 松田己之助   | 同 一〇五一 | 同 二、五、二五   | 同         |    |
| 同   | 三輪 幸左衛門 | 堤方 七三  | 同 二二、一、一八  | 同         |    |
| 同   | 櫻井政次郎   | 同 一〇五八 | 同 一一、一一、七  | 同         |    |

陪審員（退職者）

|   |       |       |           |   |
|---|-------|-------|-----------|---|
| 同 | 中島八重次 | 市野倉 一 | 同 二四、一二、三 | 同 |
| 同 | 佐藤賢信  | 同 五一  | 同 二二、五、二  | 同 |

| 職名  | 氏名    | 住所     | 就職年月日      | 退職年月日      | 勤続年限 |
|-----|-------|--------|------------|------------|------|
| 陪審員 | 海老澤萬吉 | 池上 六三九 | 昭和 三、一一、二三 | 昭和 四、一一、一五 | 一 年  |
| 候補者 | 網島菊次郎 | 同 五五〇  | 同          | 同          | 同    |
| 同   | 飯田清次郎 | 雪ヶ谷三五五 | 同          | 同 四、一、二二   | 三 月  |
| 同   | 石井喜三郎 | 道々橋 四四 | 同          | 同 四、二、一五   | 一 年  |
| 同   | 石井爲吉  | 同 三八二  | 同          | 同          | 同    |
| 同   | 野口常藏  | 久ヶ原四一一 | 同          | 同          | 同    |
| 同   | 宮田周藏  | 同 五〇四  | 同          | 同          | 同    |
| 同   | 河上弘一  | 同 五六二  | 同          | 同          | 同    |
| 同   | 篠澤市太郎 | 同 九六三  | 同          | 同          | 同    |
| 同   | 瀬下長五郎 | 下池上三〇二 | 同          | 同          | 同    |

第三章 町の行政







池上町史

|   |       |        |     |   |   |
|---|-------|--------|-----|---|---|
| 同 | 野口市太郎 | 同      | 四一七 | 同 | 同 |
| 同 | 宮田信造  | 同      | 五〇〇 | 同 | 同 |
| 同 | 戸田峯吉  | 同      | 九〇二 | 同 | 同 |
| 同 | 鹽路直次郎 | 市野倉二二三 | 同   | 同 | 同 |
| 同 | 佐藤賢信  | 同      | 二四五 | 同 | 同 |
| 同 | 横溝良三  | 同      | 三〇二 | 同 | 同 |
| 同 | 永島銀藏  | 同      | 三二四 | 同 | 同 |

方面委員

之は昭和六年八月十日發布勅令第二百一十一號による救済法施行令に従つて設置せられたもので、地方長官の選任で、任期は四ヶ年となつてゐる。

本町に於ける方面委員の氏名其の他を示せば次の如くである。

方面委員一覽表

| 職名     | 氏名   | 住所    | 生年月日       | 就職年月日    |
|--------|------|-------|------------|----------|
| 救護方面委員 | 渡邊善松 | 池上五三三 | 明治二〇、一一、二一 | 昭和七、一、二七 |

|   |       |        |           |         |
|---|-------|--------|-----------|---------|
| 同 | 直井伊助  | 雪ヶ谷一〇四 | 同三四、一一、四  | 同       |
| 同 | 石井爲吉  | 道々橋三八二 | 同二四、八、一九  | 昭七、二、一三 |
| 同 | 鈴木勇吉  | 石川一九五  | 同八、八、一七   | 昭七、一、二七 |
| 同 | 篠澤長吉  | 久ヶ原九九四 | 同一二、五、二七  | 同       |
| 同 | 小木重兵衛 | 下池上二九四 | 同一九、一一、二八 | 同       |
| 同 | 指田政次郎 | 徳持九四〇  | 同二六、一〇、二三 | 同       |
| 同 | 戸張梅吉  | 堤方九二二  | 同二五、一一、一〇 | 同       |
| 同 | 宮島勝太郎 | 市野倉一九八 | 同二一、三、三〇  | 同       |
| 同 | 横溝源次郎 | 桐ヶ谷一三二 | 同二〇、八、三一  | 同       |

方面委員(退職者)

| 職名     | 氏名   | 住所    | 就職年月日    | 退職年月日    | 勤続年限 |
|--------|------|-------|----------|----------|------|
| 救護方面委員 | 直井幸藏 | 道々橋二七 | 昭和七、一、二七 | 昭和七、二、二二 | —    |

歴代の町長

第三章 町の行政



池上町史

二三二

| 職名 | 氏名     | 就職年月日     | 退職年月日事由     | 住所     |
|----|--------|-----------|-------------|--------|
| 村長 | 森井半四郎  | 明治二二、六、二九 | 明治三〇、六、二八滿期 | 池上四 八六 |
| 同  | 青木長吉   | 同三〇、七、二   | 明治三四、七、一滿期  | 久ヶ原八八一 |
| 同  | 三部甚左衛門 | 同三四、七、二   | 大正四、四、五辭職   | 道々橋 九  |
| 同  | 渡邊茂吉   | 大正五、二、二   | 大正一三、二、二七滿期 | 池上 五一三 |
| 町長 | 小原厚    | 同二三、三、一〇  | 昭和四、三、五辭職   | 久ヶ原三二三 |
| 同  | 今西兼二   | 昭和四、六、一九  |             | 市野倉三四五 |

歴代の助役

| 氏名     | 就職年月日     | 退職年月日事由     | 住所     |
|--------|-----------|-------------|--------|
| 小原源太郎  | 明治二二、六、二九 | 明治三〇、六、二八滿期 | 久ヶ原三二三 |
| 網島磯右衛門 | 同三〇、七、二   | 明治三四、七、一滿期  | 池上 五一五 |
| 横溝邦太郎  | 同三四、七、二七  | 明治四二、七、二六滿期 | 市野倉二三一 |
| 柏木助次郎  | 同四二、七、二七  | 大正二、七、二六滿期  | 柏ヶ谷一二五 |
| 鈴鹿豊吉   | 大正二、七、二七  | 大正六、七、二六滿期  | 雪ヶ谷一〇九 |

歴代の収入役

|       |          |             |        |
|-------|----------|-------------|--------|
| 柏木助次郎 | 同 六、八、九  | 大正一四、八、二二滿期 | 桐ヶ谷一二五 |
| 稻垣光太郎 | 同 一五、五、五 | 昭和四、五、四滿期   | 下池上三一四 |
| 櫻井市太郎 | 昭和五、六、八  | 昭和六、八、一五    | 堤方一〇六一 |
| 鎌田鶴吉  | 昭和七、七、七  |             | 堤方 九六七 |

| 氏名     | 就職年月日      | 退職年月日事由      | 住所      |
|--------|------------|--------------|---------|
| 横溝邦太郎  | 明治二二、七、一二  | 明治二五、六、五辭職   | 市野倉二三一  |
| 横溝儀右衛門 | 同 二五、六、一四  | 同 二九、六、一三滿期  | 桐ヶ谷一二九  |
| 網島主計   | 同 二九、六、一九  | 同 三二、七、二〇辭職  | 池上 五二九  |
| 三木庄左衛門 | 同 三二、八、一九  | 同 四四、一〇、九滿期  | 久ヶ原一〇三七 |
| 平林半次郎  | 同 四四、一〇、一九 | 大正三、五、四辭職    | 同 四三一   |
| 森綱三郎   | 大正三、五、九    | 同 九、五、五死亡    | 下池上二四七  |
| 野口常藏   | 同 九、六、七    | 同 一五、一〇、一〇辭職 | 久ヶ原四一一  |
| 横溝甚之助  | 同 一五、一〇、一二 | 昭和二、四、三〇辭職   | 市野倉一九〇  |

第三章 町の行政

二三三



池上町史  
 川島重太郎 昭和二、五、一二 同 六、五、一一滿期 同 三六一  
 永久保徳治 同 六、五、一二 雪ヶ谷一〇五七

歴代の町村會議員

歴代の町村會議員の處で少しく説明を要する處を述べよう。先づ級制に就てであるが、是れは大正十年四月十一日法律第五十九號を以て一級及二級制度を廢止するに至るまでは町村會議員は一級及二級にわけて選出したもので、本町にては第九期の議員より實施されたものである。その分け方に就て述べると、町税或は村税の年度總額を二分し、二分した額まで最高納税者から選出されたものが第一級に屬する議員で、其の數は總議員定員の半數を占むることになつてゐる。第二級議員はそれ以外の議員である。而して級制の廢止されたのは第十二期からである次に大正十五年六月二十四日法律第七十五號で示された町村制による選舉法——即ち普選法の實施以前にあつては、選舉人資格は滿二十五年以上の男子にして同一町村内に二年以上引き続き居住し、町村税を納むる者といふことになつてゐたが、普選法の實施は選舉人資格を、同一町村内に二年以上居住する滿二十五年以上の男子といふふうに規定した。次に第十期からは町會議員數が十八名となり、それ以前の十二

名に比して六名の増員になつた。尙又十三期即ち現在の議員數は二十四名で、それ以前の議員數十八名よりも六名の増員となつてゐる。此の増員の理由は何れも町内人口の増加によるものである。今次に各期別に歴代町會議員の氏名其他を表示することにする。

第一期 自明治二十二年四月一日 至明治二十五年三月二十七日 三年間 (滿期半數改選) (印滿期退職)

| 氏名      | 住所     | 氏名     | 住所     |
|---------|--------|--------|--------|
| ○森井半四郎  | 池上四八六〇 | 田中定八   | 雪ヶ谷四九九 |
| ○鈴木嘉兵衛  | 市野倉一八八 | 指田平次郎  | 徳持 九四三 |
| ○直井勝五郎  | 雪ヶ谷六五六 | 青木長吉   | 久ヶ原八八一 |
| ○稻垣新左衛門 | 下池上三一四 | 綱島主計   | 池上 五二九 |
| ○吉田覺右衛門 | 堤方 九二二 | 小原源太郎  | 久ヶ原三二三 |
| ○三部甚左衛門 | 道々橋 九  | 鈴木金左衛門 | 石川 四三  |

第二期 自明治二十五年三月二十七日 至明治二十八年五月三十日 三年間 (滿期半數改選) (印滿期退職)

第三章 町の行政 二三五



池上町史

- 田中 定八 雪ヶ谷四九九
- 指田 平次郎 德持 九四三
- 青木 長吉 久ヶ原八八一
- 綱島 主計 池上 五二九
- 小原 源太郎 久ヶ原三二三
- 鈴木 金左衛門 石川 四三

- 森井 半四郎 池上 四八六
- 直井 勝五郎 雪ヶ谷六五六
- 三部 甚左衛門 道々橋 九
- 吉田 覺右衛門 堤方 九二二
- 横溝 邦太郎 市野倉二三一
- 門倉 増五郎 池上 二四九

第三期 自明治二十八年五月三十日至明治三十一年五月三十日 三年間

(満期半数改選)  
○印満期退職

- 森井 半四郎 池上 四八六
- 直井 勝五郎 雪ヶ谷六五六
- 三部 甚左衛門 道々橋 九
- 吉田 覺右衛門 堤方 九二九
- 横溝 邦太郎 市野倉二三一
- 門倉 増五郎 池上 二四九

- 清水 虎次郎 堤方 九二九
- 宮田 榮吉 久ヶ原五〇〇
- 森網 三郎 下池上二四七
- 直井 源七 雪ヶ谷七三二
- 指田 平次郎 德持 九四三
- 小木 重兵衛 下池上二九四

第四期 自明治三十一年五月三十日至明治三十四年五月三十日 三年間

(満期半数改選)  
○印満期退職

- 清水 虎次郎 堤方 九二九
- 宮田 榮吉 久ヶ原五〇〇
- 森網 三郎 下池上二四七
- 直井 源七 雪ヶ谷七三二
- 指田 平次郎 德持 九四三
- 小木 重兵衛 下池上二九四

- 直井 勝五郎 雪ヶ谷六五六
- 森井 半四郎 池上 四八六
- 三部 甚左衛門 道々橋 九
- 渡邊 茂吉 池上 五二三
- 永久保 清兵衛 雪ヶ谷一〇五七
- 遠藤 徳三郎 堤方 九九一

第五期 自明治三十四年五月三十日至明治三十七年五月三十日 三年間

(満期半数改選)  
○印満期退職

- 直井 勝五郎 雪ヶ谷六五六
- 森井 半四郎 池上 四八六
- 三部 甚左衛門 道々橋 九

- 齋藤 宗眠 下池上三〇五
- 綱島 主計 池上 五二九
- 直井 源七 雪ヶ谷七三二

第三章 町の行政



池上町史

二三八

○渡邊 茂吉 池上 五一三  
 ○永久保 清兵衛 雪ヶ谷一〇五七  
 ○遠藤 徳三郎 堤方 九九一

宮崎佐五右衛門 同 三九一  
 宮田 恒吉 久ヶ原五〇〇  
 森網三郎 下池上二四七

第六期 自明治三十七年五月三十日 至明治四十年五月三十日 三年間

(滿期半數改選)  
(〇印滿期退職)

氏名 住所  
 ○齋藤 宗眠 下池上三〇五  
 ○網島 主計 池上 五二九  
 ○直井 源七 雪ヶ谷七三二  
 ○宮崎佐五右衛門 同 三九一  
 ○宮田 常吉 久ヶ原五〇〇  
 ○森網三郎 下池上二四七

氏名 住所  
 渡邊 茂吉 池上 五一三  
 鈴木 幾太郎 石川 一五八  
 清水 虎次郎 堤方 九二九  
 吉田 福太郎 市野倉 八  
 森井 半四郎 池上 四八六  
 青木 長吉 久ヶ原八八〇

第七期 自明治四十三年五月三十日 至明治四十四年五月三十日 三年間

(滿期半數改選)  
(〇印滿期退職)

氏名 住所  
 ○渡邊 茂吉 池上 五一三

氏名 住所  
 網島 主計 池上 五二九

○鈴木 幾太郎 石川 一五八  
 ○清水 虎次郎 堤方 九二九  
 ○吉田 福太郎 市野倉 八  
 ○森井 半四郎 池上 四八六  
 ○青木 長吉 久ヶ原八八〇

齋藤 宗眠 下池上三〇五  
 三木 忠次郎 久ヶ原一〇一三  
 直井 源七 雪ヶ谷七三二  
 直井 源太郎 雪ヶ谷五二八  
 吉田 福太郎 市野倉 八

第八期

自明治四十三年五月三十日 至大正二年五月三十日

三年間

(滿期半數改選)  
(〇印滿期退職)

氏名 住所  
 ○網島 主計 池上 五二九  
 ○齋藤 宗眠 下池上三〇五  
 ○三木 忠次郎 久ヶ原一〇一三  
 ○直井 源七 雪ヶ谷五二八  
 ○櫻井 市太郎 堤方一〇六一  
 ○吉田 福太郎 市野倉 八

氏名 住所  
 大山 周藏 徳持 八三五  
 渡邊 茂吉 池上 五一三  
 鈴木 幾太郎 石川 一五八  
 森網三郎 下池上二四七  
 宮田 恒吉 久ヶ原五〇〇  
 小澤 金三郎 堤方一〇〇七



第九期 自大正二年五月三十日 至大正六年五月三十日 四年間 (満期全員改選)

| 氏名     | 級 | 住所     | 氏名     | 級 | 住所     |
|--------|---|--------|--------|---|--------|
| 篠澤 忠藏  | 一 | 久ヶ原九九〇 | 鈴木 要助  | 一 | 市野倉一八八 |
| 直井 源七  | 一 | 雪ヶ谷七三二 | 渡邊 茂吉  | 一 | 池上 五一三 |
| 綱島 傳藏  | 一 | 池上 五〇六 | 宮田 恒吉  | 一 | 久ヶ原五〇〇 |
| 清水 虎四郎 | 二 | 堤方 九二九 | 齋藤 宗眠  | 二 | 下池上三〇五 |
| 森 綱三郎  | 二 | 下池上二四七 | 直井 源太郎 | 二 | 雪ヶ谷五二八 |
| 櫻井 市太郎 | 二 | 堤方一〇六一 | 鈴木 茂太郎 | 二 | 石川 一五八 |

第十期 自大正六年五月三十日 至大正十年五月三十日 四年間 (満期全員改選)

| 氏名     | 級 | 住所     | 氏名     | 級 | 住所      |
|--------|---|--------|--------|---|---------|
| 鈴木 金太郎 | 二 | 久ヶ原八九一 | 齋藤 宗眠  | 二 | 下池上三〇五  |
| 櫻井 市太郎 | 二 | 堤方 一〇六 | 永久 保徳治 | 二 | 雪ヶ谷一〇五七 |
| 蒲田 平五郎 | 二 | 桐ヶ谷一三七 | 横溝 邦太郎 | 二 | 市野倉二三一  |

第十一期 自大正十年五月三十日 至大正十四年五月三十日 四年間 (満期全員改選)

| 氏名     | 級 | 住所      | 氏名      | 級 | 住所      |
|--------|---|---------|---------|---|---------|
| 直井 源七  | 二 | 雪ヶ谷七三二  | 萩原 文藏   | 二 | 池上 四六六  |
| 綱島 傳藏  | 二 | 池上 五〇六  | 三木 重藏   | 二 | 久ヶ原一〇三九 |
| 平林 半次郎 | 一 | 久ヶ原四三一  | 野口 市太郎  | 一 | 久ヶ原四一七  |
| 鈴木 幾太郎 | 一 | 石川 一五八  | 君島 久太郎  | 一 | 池上 六六〇  |
| 森 五郎次良 | 一 | 下池上一八七  | 鈴木 要助   | 一 | 市野倉一八八  |
| 直井 源太郎 | 一 | 雪ヶ谷五二八  | 三部 甚左衛門 | 一 | 道ヶ橋 一〇  |
| 網島 傳藏  | 二 | 池上 五〇六  | 鎌田 鶴吉   | 二 | 堤方 九六七  |
| 永久 保徳治 | 二 | 雪ヶ谷一〇五七 | 鈴木 金之助  | 二 | 石川 四三   |
| 三木 重藏  | 二 | 久ヶ原一〇三九 | 横溝 邦太郎  | 二 | 市野倉二三一  |
| 櫻井 市太郎 | 一 | 堤方一〇六一  | 直井 八十吉  | 一 | 雪ヶ谷六五三  |
| 大山市 太郎 | 一 | 徳持 八三五  | 海老澤 長四郎 | 一 | 池上 六一八  |
| 平林 市太郎 | 一 | 久ヶ原四六五  | 齋藤 宗眠   | 一 | 下池上三〇五  |



鈴木 要助 二 市野倉一八八  
 森 三吉 二 下池上二四七  
 宮田 初太郎 二 雪ヶ谷三二六

君島 久太郎 一 池上 六六〇  
 篠澤 市太郎 一 久ヶ原九六三  
 三木 勇次郎 一 久ヶ原八九三

第十二期

自大正十四年五月三十日  
 至昭和四年五月三十日

四年間 (満期全員改選級制廢止)

氏名 住所  
 横溝 直也 市野倉二三一  
 森 三吉 下池上二四七  
 鈴木 鹿豊吉 雪ヶ谷一〇九  
 網島 傳藏 池上 五〇六  
 野口市 太郎 久ヶ原四一七  
 櫻井市 太郎 堤方一〇六一  
 永久保 徳治 雪ヶ谷一〇五七  
 門倉 新次郎 池上 二四九  
 平林 久藏 久ヶ原四三一

氏名 住所  
 指田 政次郎 徳持 九四〇  
 石井 喜三郎 道々橋 四四  
 川島 百太郎 市野倉一八〇  
 海老澤 長四郎 池上 六一八  
 鎌田 鶴吉 堤方 九六七  
 直井 勝五郎 雪ヶ谷一〇四二  
 平本 隆吉 市野倉三二四  
 鈴木 要助 市野倉一八八  
 篠澤 市太郎 久ヶ原九六三

第十三期

自昭和四年五月三十日  
 至昭和七年九月三十日

三年四ヶ月間 (解散)

氏名 住所  
 横溝 直也 市野倉二三一  
 高瀬 己作 堤方 一六  
 直井 藤五郎 雪ヶ谷七七一  
 平本 隆吉 市野倉三二四  
 網島 傳藏 池上 四八五  
 鎌田 鶴吉 堤方 九六七  
 永久保 新藏 雪ヶ谷六三九  
 直井 勝五郎 雪ヶ谷一〇四二  
 海老澤 金四郎 池上 三七一  
 清水 要藏 堤方 九二九  
 鈴木 要助 市野倉一八八  
 川島 百太郎 市野倉一八〇

氏名 住所  
 齋藤 宗久 下池上三〇五  
 平林 久藏 久ヶ原四三一  
 田村 長 雪ヶ谷 四一  
 櫻井市 太郎 堤方一〇六一  
 小原 厚 久ヶ原三二三  
 指田 政次郎 徳持 九四〇  
 篠澤 忠藏 久ヶ原九九〇  
 森 三吉 下池上二四七  
 野口 常藏 久ヶ原四一一  
 鈴木 伊三郎 石川 四三  
 門倉 敏之助 池上 二四三  
 菊地 慣 下池上三〇三



### 第二節 事務の分掌及組織

町及び町長の管掌する事務を如何なる組織によつて執行し、又行政の實績を効果あらしむるかはその行政政治上極めて重要な問題である。町政事務組織の整然たる分掌と統制とは町制の根幹であつて、町事務の興隆、肅正は一にかゝつて此の分掌及び組織の如何にあるのみならず、町民の受くる便否も亦此の組織の如何によつて決定せらるゝのである。

本町に於ては次の如くに分掌組織されてゐる。即ち其の要領を述べれば、町及び町長の事務は、先づこれを庶務係、税務係、戸籍係、土木係、會計係、兵事衛生係の六つに分ち前四係には特に係長を各一名宛置き、上司の命を受けて係員を指揮し其係の事務を掌理してゐる。而して庶務係にあつては更に之を統計、學務、社會、選舉に分ち、税務係にあつては滯納、家屋、雜種税に分ち、戸籍係にあつては寄留、戸籍の二つに分ち、會計係にあつては、購買、會計の二つに分ち、各書記及書記補を置いて其の事務を擔任してゐる。以上の外に主事一名を置き、町長、助役共に不在の時は町長に於て豫め指定せられたる範圍に於て其の事務を代理し、又町長の命により所屬各係員を指揮監督し、役場に於ける一切の事務を掌理してゐる。

分掌別役場吏員一覽表

| 職名    | 氏名    | 職名 | 氏名   |
|-------|-------|----|------|
| 町長    | 今西兼二  | 助役 | 鎌田鶴吉 |
| 収入役   | 永久保徳治 | 主事 | 横溝與吉 |
| 庶務係   |       |    |      |
| 係長 主事 | 横溝與吉  | 書記 | 山地正路 |
| 書記    | 遠藤辯次郎 | 同  | 宮田悟  |
| 同     | 澤戸源吾  |    |      |
| 税務係   |       |    |      |
| 係長 書記 | 宮田皓   | 書記 | 小原堅吉 |
| 書記    | 直井記道  | 同  | 杉田次吉 |
| 同     | 上村多眞章 | 同  | 矢野多盛 |
| 同     | 郡司三四郎 | 同  | 小笛正一 |
| 書記補   | 篠澤利男  |    |      |



戸籍係

係長 書記 石澤 勗

書記補 加藤 鎌一

書記補 間中 幸作

土木係

係長 主事 横溝 與吉

技手 小路 眞作

會計係

收入役 永久 保徳 治

書記 朝倉 英吉

兵事衛生係

書記 相原 源治

## 第四章 町の財政

### 第一節 豫算及決算

#### 豫算及決算

近代大都市に隣接した所謂近郊町村は、其の過去に於ては矢張り地方の邊陲の地域にある單なる町村と大差は無かつたのであるが、都市が異常な發達をなし、人口が極度に増加すると、其都市自身を擁護することが出来なくなり、必然の勢をもつて近郊の町村地域に向つて溢出する。此處から主として近接町村の急激な人口増加とそれに伴ふ變革が、その町村の經濟上、政治上、交通上、衛生上並びに社會政策等の上に行はれ、その度毎に次第に大都市の色彩と形貌とを備へ、過去に於けるが如き兩者間の差違は次第に消滅して、融合し統一されるに至るのである。

本町に於ても亦同じことである。近年に於ては加速的な勢を以つて人口の増加とそれに伴ふ經濟上、衛生上、交通上、並びに社會政策上の變革は頗る著しく、近代都市的施設經營の發達は、大都



市のそれ等と大差なき迄に至らしめてゐる。此の發展の程度は何よりもよく、本町に於ける財政上に表はれてゐる。

本町に於ける財政上の膨脹發達は次に於て具體な數字に表はされてゐるが如く頗る著しいものである。殊に大震災(大正十二年)後の異常なる人口増加の結果は、町財政の膨脹を飛躍的に高めた。此の發展膨脹の過程を少しく、具體的に述べて見よう。

本町に於ける明治三十年度の決算額は歳入に於て三千二百六十三圓三十七錢一厘、歳出に於て二千八百六圓八十四圓三厘であつた。而して一戸當り負擔額は歳入に於て四圓七十九錢九厘、歳出に於て四圓十二錢七厘であつた。更に一人當り負擔額は歳入に於て七十三錢六厘、歳出に於て六十三錢一厘であつた。

次に大正十年即ち大震災の二年前に於ける状態を見ると、歳入に於て五萬七千六百八十九圓三十六錢三厘であり、歳出に於て四萬二千二百二十四圓七十四錢である。而して一戸當り負擔額は歳入に於て五圓七十二錢三厘、歳出に於て四圓十八錢八厘である。更に一人當り負擔額は歳入に於て九十五錢四厘、歳出に於て七十二錢三厘である。之を明治三十年の歳入歳出に比較するならば歳入に於て一七・六倍強の増加であり、歳出に於て一五・〇倍強の増加となつてゐる。

次に昭和元年大震災後の状態を見ると、歳入に於て九萬六千二百二十二圓八十錢、歳出に於て九萬六千二百十三圓三十四錢となつてゐる。而して一戸當り負擔額は歳入に於て三圓八十一錢二厘、歳出に於て三圓八十一錢一厘であり、更に一人當り負擔額は歳入に於て八十四錢七厘、歳出に於て同じく八拾四錢七厘となつてゐる。此の歳入、歳出額を明治三十年の夫々に比較すれば、歳入に於て二九・四倍強、歳出に於て三四・二倍強の増加となつてゐる。更に此の歳入、歳出額を大正十年のそれに夫々比較すれば、歳入に於て一・六倍強、歳出に於て二・二倍強の増加となつてゐる。

次に昭和五年度の歳入、歳出決算額を見ると、歳入に於て十九萬六千七百三十三圓八十九錢、歳出に於て十九萬六千七百三十三圓八十九錢、つまり歳入、歳出共同額である。而して一戸當り負擔額は歳入に於て四十四圓十九錢、歳出に於て同じく四十四圓十九錢となつてゐる。更に一人當り負擔額を見ると歳入に於て九十四錢九厘、歳出に於て九十四錢九厘である。此の歳入、歳出額を明治三十年の夫々に比較すれば、歳入に於て六二・八倍強、歳出に於て七〇・九倍強の増加である。更に大正十年度の夫々に比較すれば、歳入に於て三・〇倍強、歳出に於て四・六倍強の増加である。更に昭和元年度の夫々に比較すれば、歳入に於て二・〇倍強、歳出に於て同じく二・〇倍強の増加となつてゐる。



左に歳入出年度別比較を表示するが故に就て精しく研究せられたい。

歳入出決算年度別比較表

| 年 別  | 歳 入         | 歳 出         | 一戸當負擔額 |        | 一人當負擔額 |       |
|------|-------------|-------------|--------|--------|--------|-------|
|      |             |             | 入      | 出      | 入      | 出     |
| 明治三〇 | 三、二六三・三七一   | 二、八〇六・八四三   | 四・七九九  | 四・一二七  | 〇・七三六  | 〇・六三一 |
| 同 四〇 | 五、九一四・四三七   | 五、七四二・二七八   | 七・七五一  | 七・五二五  | 一・二〇二  | 一・一六七 |
| 大正 元 | 九、二三〇・四六七   | 七、八一八・二六五   | 一〇・八五九 | 九・一九七  | 一・八〇一  | 一・五二六 |
| 同 五  | 一〇、八六八・七二三  | 一〇、一〇九・三九〇  | 一一・五六二 | 一〇・七五四 | 一・九八一  | 一・八四三 |
| 同 一〇 | 五七、六八九・三六三  | 四二、二二四・七四〇  | 五・七二三  | 四・一八八  | 〇・九五四  | 〇・七二三 |
| 昭和 元 | 九六、二二二・八〇〇  | 九六、二一三・三四〇  | 三・八一二  | 三・八一   | 〇・八四七  | 〇・八四七 |
| 同 二  | 一〇二、九二二・四一〇 | 一〇一、八二六・〇〇〇 | 三・八二八  | 三・七八八  | 〇・七八九  | 〇・七八一 |
| 同 三  | 三三〇、二一五・八四〇 | 三〇九、三八二・三〇〇 | 八・七八〇  | 八・七五六  | 一・八九四  | 一・八八九 |
| 同 四  | 一八〇、一七五・〇五〇 | 一八〇、一七五・〇五〇 | 四三・二〇七 | 四三・二〇七 | 一・〇〇二  | 一・〇〇二 |
| 同 五  | 一九六、七三三・八九〇 | 一九六、七三三・八九〇 | 四四・一九〇 | 四四・一九〇 | 〇・九四九  | 〇・九四九 |

歳 出 の 内 容

前述の如く大都市の急激な發展は必然的に其の隣接町村を驅つて大都市的な色彩と形貌と施設とを持たざるを得ないやうにする。町村の從來の施設經營は不充分となり随つて之を變革して近代都市的な諸種の施設經營となさなければならぬ。近時の郊外町村は唯此の必然性に順應し得る能力を有する時のみ發展し進歩する可能性を受取るのである。随つて此の能力の具體的に表はれる財政の膨脹は、正に人口の増加以上上るのである。随つて又歳出の内容となるものは隣接町村が近代的都市に發展する爲に自身を變革してゆく状態を數的に示してゐる。そして此の數的增加は町村が近代的都市化の爲に爲す處の施設——主として文化施設に於て著しい。例へば教育費である。之は明治三十年に於ては一千三百五十二圓で歳出總計の五割強にあたる。昭和元年に於ては實業補習學校費、青年訓練所費、をも含めて教育費は五萬九百一圓で、歳出總計の四割八分強に當り、明治三十年のそれに比較すれば金高に於て四萬九千六百四十九圓の増加であり、正に三十九倍強の増加となつてゐる。昭和七年度豫算に於ては九萬九千六百十五圓で、歳出總計の四割強に當り、明治三十年のそれに比較すれば金高に於て九萬八千四百六十三圓の増加で、正に七十八倍強となる。更に



昭和元年度のそれに比較すれば金高に於て四萬八千七百十四圓で、正に十九倍強の増加である。  
 此の教育費の外に著しい増加を示すものは役場費及び土木費であるが、此は次に掲ぐる表によつて研察してもらいたい。

歳出豫算年度別比較表(單位圓)

| 種別      | 明治三十年 | 大正元年  | 大正十年   | 昭和元年   | 昭和五年   | 昭和六年   | 昭和七年   |
|---------|-------|-------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 役場費     | 八一五   | 一、八一三 | 八、二〇四  | 二二、八〇二 | 三〇、七六五 | 三〇、八八六 | 二七、八三一 |
| 會議費     | 一五    | 六〇    | 二四〇    | 二四〇    | 六三二    | 九六二    | 九二三    |
| 土木費     | 一九四   | 三五〇   | 一、八五〇  | 六、〇〇〇  | 三、九〇〇  | 三、五〇〇  | 七、一〇三  |
| 教育費     | 一、二五二 | 五、三二五 | 一九、四二六 | 四七、二四五 | 八六、五六五 | 八四、一六六 | 九七、一一一 |
| 實業補習學校費 | —     | —     | 一四四    | 八四一    | 二、〇一二  | 二、四六二  | 二、三四四  |
| 青年訓練費   | —     | —     | —      | —      | 一、六四四  | 一、三六〇  | 一、一八〇  |
| 所費      | —     | —     | —      | —      | —      | —      | —      |
| 傳染病費    | 三〇    | 四五    | 一四二    | 一、〇九五  | 一、三〇〇  | 一、〇九〇  | 一、〇九〇  |

經常費

|       |       |       |        |        |        |        |        |       |
|-------|-------|-------|--------|--------|--------|--------|--------|-------|
| 就學獎勵費 | —     | —     | —      | —      | —      | —      | —      | 二〇〇   |
| 勸業費   | 一八    | —     | —      | —      | —      | —      | —      | —     |
| 救助費   | 二     | 三七    | —      | 一〇     | 一〇     | —      | —      | —     |
| 社會事業費 | —     | —     | —      | —      | —      | —      | —      | 四、五六二 |
| 警備費   | 四六    | 七三    | —      | —      | —      | —      | —      | —     |
| 基本財産  | —     | —     | —      | —      | —      | —      | —      | —     |
| 造成費   | —     | 一二五   | —      | 八      | —      | —      | —      | —     |
| 財産費   | —     | —     | —      | —      | —      | —      | —      | —     |
| 諸税及負擔 | —     | —     | —      | —      | —      | —      | —      | —     |
| 神社費   | —     | —     | —      | —      | —      | —      | —      | —     |
| 雜支田   | 一八    | 五〇    | —      | —      | —      | —      | —      | —     |
| 豫備費   | 六六    | 一七五   | —      | —      | —      | —      | —      | —     |
| 歳出合計  | 二、四五六 | 八、三四八 | 三三、三三九 | 八五、六八五 | 一五、五四一 | 一四、〇八二 | 一四、五四七 | —     |
| 臨時費   | —     | —     | —      | —      | —      | —      | —      | —     |
| 土木費   | —     | —     | —      | —      | —      | —      | —      | —     |



|      | 池上町史  | 二五四    |
|------|---|--------|
| 公債費  | 九、四九九三、五〇七二八、二二三三三、二九四                        |        |
| 補助費  | 八〇一、一〇〇七、三七六一〇、二一〇二、一九二二、〇四七                  |        |
| 訴訟費  | 六〇  | 四〇〇    |
| 奉悼費  | 一〇〇   |        |
| 寄附金  |   | 六一、〇七〇 |
| 小學校  |   | 二八、〇〇〇 |
| 營繕費  |   | 九〇〇    |
| 選舉費  |   | 一、八五〇  |
| 雜支出  |   |        |
| 臨時費計 | 八〇一、一〇〇一八、五三五四九、五九四四一、六七一九六、三二一               |        |
| 歳出總計 | 二、四五六八、四二八三六、四三九一〇、四、二二〇一八、一三五二七、五、七五三二、四、八六八 |        |

歳入の内容

以上の如き歳出に對し町は其の歳入を如何なる方面より、如何にして、如何なる程度に之を求む

べきかは、歳出の場合と同じく重要な問題である。勿論歳入の殆んど全部は町税に俟つのであるが、更に公債による可とする場合もあり、使用料及び手数料費を増額するをよしとする場合もある。又町税にしても如何なる種類の租税を、如何なる税率によつて賦課すべきか、又特別税を起すべきや否や、起すとするれば如何なる特別税を如何に起して之を如何に賦課するか、町民一般の經濟状態はどうであるか、社會政策上の見地よりして其の正否如何、等々の凡ゆる方面より熟慮審議した上でなければ歳入の決定は出来ない。斯くの如くして歳入の問題は町財政上極めて重要な問題である。而し歳出が必要不可欠からざるものである以上それに應じて歳入は是非爲されなければならぬ。かくして歳入も亦歳出に應じて年々その金額を増大して來たのである。此の増加の状態に就ては次に掲ぐる表によつて研察してもらいたい。

歳入豫算年度別比較表(單位圓)

| 種別        | 明治三十年 | 大正元年 | 大正十年 | 昭和元年 | 昭和五年 | 昭和六年 | 昭和七年 |
|-----------|-------|------|------|------|------|------|------|
| 經常費       | 一七一   | 二〇〇  | 二五五  | 一〇八  | 三〇   | 三〇   | —    |
| 財産ヨリ生ズル收入 | —     | —    | —    | —    | —    | —    | —    |



|         |       |       |        |        |        |        |        |        |    |     |
|---------|-------|-------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|----|-----|
| 使用料及手数料 | 一〇    | 三四    | 八七     | 四四一    | 二〇〇    | 三一     | 一七     | 一七     | 二〇 | 三八九 |
| 國庫下渡金   | —     | —     | —      | 一、〇三二  | 五、九三四  | 一五、〇九二 | 一九、〇九二 | 二二、〇九二 | —  | —   |
| 交付金     | 四四    | —     | —      | 七二九    | 三、〇八六  | 四、一五〇  | 三、二八三  | 三、九九五  | —  | —   |
| 府補助金    | 九二    | —     | —      | 一九六    | 一、三五〇  | 一、六一七  | 一、四七二  | 三、八四一  | —  | —   |
| 國庫補助金   | —     | —     | —      | —      | —      | —      | —      | —      | —  | —   |
| 寄付金     | 三二    | —     | —      | —      | —      | —      | —      | —      | —  | —   |
| 繰入金     | 一三〇   | 一、〇二七 | 五、〇〇〇  | 三、五五五  | —      | —      | —      | —      | —  | —   |
| 繰入金     | —     | —     | —      | —      | —      | —      | —      | —      | —  | —   |
| 雑収入     | 四七三   | 三四五   | 一、二六四  | 一、二八六  | 三三、六三〇 | 二七、一九〇 | 三〇、六六三 | —      | —  | —   |
| 町税      | 一、五〇四 | 六、八二一 | 二五、三八六 | 七二、七六〇 | 一三、四八五 | 一〇、〇八六 | 二八、七〇六 | —      | —  | —   |
| 内訳      | —     | —     | —      | —      | —      | —      | —      | —      | —  | —   |
| 地租      | —     | —     | —      | —      | —      | —      | —      | —      | —  | —   |
| 附加税     | —     | —     | —      | —      | —      | —      | —      | —      | —  | —   |
| 國營業     | —     | —     | —      | —      | —      | —      | —      | —      | —  | —   |
| 附加税     | —     | —     | —      | —      | —      | —      | —      | —      | —  | —   |
| 所得税     | —     | —     | —      | —      | —      | —      | —      | —      | —  | —   |
| 附加税     | —     | —     | —      | —      | —      | —      | —      | —      | —  | —   |

|      |       |       |        |         |        |         |        |   |   |   |
|------|-------|-------|--------|---------|--------|---------|--------|---|---|---|
| 家屋税  | —     | —     | —      | —       | —      | —       | —      | — | — | — |
| 附加税  | —     | —     | —      | —       | —      | —       | —      | — | — | — |
| 府營業  | —     | —     | —      | —       | —      | —       | —      | — | — | — |
| 附加税  | —     | —     | —      | —       | —      | —       | —      | — | — | — |
| 府雜種  | —     | —     | —      | —       | —      | —       | —      | — | — | — |
| 附加税  | —     | —     | —      | —       | —      | —       | —      | — | — | — |
| 歳入合計 | 二、四五六 | 八、四二八 | 三六、四三九 | 一〇四、二二〇 | 一六、一三五 | 一七三、九五三 | 二五、一〇七 | — | — | — |

臨時費

|           |       |       |        |        |        |         |        |   |   |   |
|-----------|-------|-------|--------|--------|--------|---------|--------|---|---|---|
| 財産ヨリ生ズル收入 | —     | —     | —      | —      | —      | —       | —      | — | — | — |
| 不動産       | —     | —     | —      | —      | —      | —       | —      | — | — | — |
| 賣拂代       | —     | —     | —      | —      | —      | —       | —      | — | — | — |
| 臨時部計      | —     | —     | —      | —      | —      | —       | —      | — | — | — |
| 歳入總計      | 二、四五六 | 八、四二八 | 三六、四三九 | 二四、二二〇 | 一六、一三五 | 一七五、七五三 | 二四、八六八 | — | — | — |

特別會計

本町に於ける昭和七年度豫算に於て特別經濟に屬するものは次の三經濟で、其の豫算總額は一萬三千百六十四圓である。



## 一、町営住宅經濟

本町は昭和元年住宅難緩和の目的で内務省より金四萬圓（起債許可額は金五萬圓）の借入れを爲し住宅の建設を爲した。本經濟はその收支を經理するもので、昭和七年度に於ける豫算額は五千四百九十三圓である。

## 二、大字池上經濟

本經濟は池上町大字池上地内所在の千束溜井に關する貸借關係より生ずるものにして、その由來を説明すれば次の如くである。即ち千束溜井四町七反六畝二歩は大正七年十一月七日付を以て東京市小石川區宮下町二番地八木恒藏と千束溜井水利組合との間に、向ふ二十ヶ年間、賃貸料金七百圓をもつて貸借契約を結んだのである。然るに其の後其の權利繼續者・池上電氣鐵道株式會社と本町との間に於て、昭和五年十二月二十四日その賃貸契約を取消し、その代償として使用許可を爲し許可の日より向ふ十ヶ年四ヶ月間其の使用料年毎に金六百圓として受取ることとなり、茲に大字池上特別經濟が起されたのである。而して昭和七年度に於ける歳入豫算は總額三千六百圓である。

## 三、失業救濟農山漁村臨時對策低利資金轉貸經濟

本經濟の昭和七年度に於ける歳入豫算高は二千七百十八圓である。

## 第二節 租 稅

## 租稅調定額

本町大正五年度に於ける租稅の調定額は國稅九千五百七十二圓、府稅千六百九十三圓三十八錢、町稅七千九百二十四圓七十五錢、此合計二萬五千九百九十圓二十七錢で、現住戸數に對する一戸當りの負擔額は二十六圓八十錢で、同一人當りの負擔額は四圓六十一錢であつた。然るに昭和元年（大正十五年）度に於ける本町租稅の調定額を見ると、國稅二萬八千六百八十一圓九十七錢、府稅三萬七千六百三十九圓十錢、町稅七萬五百六圓四十錢、此合計十三萬六千八百二十七圓四十七錢で、現住戸數に對する一戸當りの負擔額は六十三圓二十錢、同一人當りの負擔額は十二圓五十五錢であつた。之を大正五年度の夫々に比較すれば、先づ調定總額に於ては十一萬一千六百三十七圓二十錢の増加で、その増加率は正に五十四割餘に及んでゐる。又現住人口一人當りの負擔額に於ては二十七割餘の増加となつてゐる。尙昭和元年以後に於ては次の表に於て見らるゝが如く調定額の總額は全體に於て増加の傾向を示せるも戸數一戸當りの負擔額及び人口一人當りの負擔額は減退の傾向を示



してゐるのがわかるであらう。此の原因は人口の増加、戸数の増加によるものと見らるゝ。

年度別租税調査額比較表

| 年度別  | 國稅          | 府稅          | 町稅          | 合計           | 戸數     | 一人當    |
|------|-------------|-------------|-------------|--------------|--------|--------|
| 大正元年 | 九、七六〇・八〇    | 七、二九七・六五〇   | 五、九五二・六〇〇   | 二二、〇一〇・〇五〇   | 不明     | 不明     |
| 同 五年 | 九、七三二・一四〇   | 七、六九三・三八〇   | 七、九二四・七五〇   | 二五、三四九・二七〇   | 二六、八〇〇 | 四・六一〇  |
| 同 十年 | 二二、〇六一・四一〇  | 二四、六三七・七五〇  | 二七、九二六・六二〇  | 七四、六一五・七八〇   | 七四、〇三〇 | 一二・七九〇 |
| 昭和元年 | 二八、六八一・九七〇  | ×五九、九八六・〇〇〇 | ×三三、六七九・八六〇 | ×一二二、五八七・八三〇 | 六三、〇〇〇 | 一二・五五〇 |
| 同 二年 | ×二七、九八四・〇〇〇 | 四〇、八二二・六八〇  | 七五、〇八三・四六〇  | 一四九、五五六・〇〇〇  | 五五、六五〇 | 一二、四八〇 |
| 同 三年 | 四四、五五三・三八〇  | ×五三、六〇〇・〇〇〇 | 五三、四四三・〇六〇  | 一五二、八八〇・五六〇  | 六一、二三〇 | 一二、二二〇 |
| 同 四年 | ×五三、六〇〇・〇〇〇 | 四八、二五七・八三〇  | 五七、三〇四・九五〇  | 一五九、一七〇・一五〇  | 五二、五三〇 | 一二、九六〇 |
| 同 五年 | ×六九二・七九〇    | ×六九二・七九〇    | 五〇、一九九・六三〇  | 一六二、一四〇・〇〇〇  | 三六、五〇〇 | 七・八三〇  |
| 同 六年 | ×六九三・九八〇    | ×六九三・九八〇    | ×八五〇・四〇〇    | 二、〇三九・七六〇    | 四四、六八〇 | 九・九二〇  |
| 同 六年 | ×七七一・一五〇    | ×七七一・一五〇    | 五、二一九・一五〇   | 二、〇三九・七六〇    | 四四、六八〇 | 九・九二〇  |

備考——×印ノモノハ資本利子稅。附加稅ハツカナイ。

町稅の内容及附加率

現時東京市近郊町村の租税中其の重要なものは何と云つても家屋稅附加稅と雜種稅附加稅とであらう。殊に家屋稅附加稅は近時發展町村の主稅として國家に於ける所得稅の如く、或はそれ以上に重要な財源をなしてゐる。事實近郊町村に在つては其の町稅の約五割乃至七割位迄は此の家屋稅附加稅が占めてゐるのである。其れ程家屋稅は町村稅中主要なる財源である。今試みに昭和六年度の豫算に依り本町々稅の内容を一瞥して見やう。昭和六年度豫算の總額は二十三萬二千三十六圓四十五錢で、内家屋稅附加稅は六萬六千四百三十三圓三十四錢で最も多く、之は町稅總額の二割八分に當つてゐる。次は雜種稅附加稅で二萬五千六百六十二圓五十二錢で第二位を占め、之は町稅總額の一分に相當する。今町稅の内容を表示せば次の如くである。

町稅年度別比較表

| 年別   | 附加稅      | 國稅     | 府稅     | 所得稅     | 家屋稅   | 府營業附加稅 | 府稅雜種附加稅  | 計 |
|------|----------|--------|--------|---------|-------|--------|----------|---|
| 大正元年 | 一、二五三・二二 | 一四九・九七 | 一六六・〇〇 | 三、七九・八三 | 五三・三九 | 三九〇・二〇 | 五、九五二・六〇 |   |



|      |                  |                 |                  |                   |                    |                  |            |
|------|------------------|-----------------|------------------|-------------------|--------------------|------------------|------------|
| 同 五年 | 一、三三・九一          | 一、六六・五          | 二〇一・八六           | 五、一九八・一三          | 一一九・四五             | 九五・七五            | 七、九二四・七五   |
| 同 十年 | 四、四七・三八          | 一、三四・九七         | 五二・三五            | 一五、一四四・〇          | 八三・三三              | 五、九四・五〇          | 二七、九六・六三   |
| 昭和元年 | 五、九七・三六          | 三、二八・八九         | 三、七六九・一三         | 三七、八〇五・八五         | 一、〇五二・五五           | 一八、八三・七二         | 七〇、五九・四〇   |
| 同 二年 | 五、九四・一一          | 二、九〇・九七         | 二、三八五・二三         | 四三、六二・二三          | 一、五九三・三六           | 一八、六五五・五七        | 七五、〇八三・四六  |
| 同 三年 | 五、九六・〇四          | 三、七六・八〇         | 三、三〇五・四一         | 五三、七〇五・二八         | 二、〇一九・四七           | 二六、四三・八二         | 九五、一八三・一一  |
| 同 四年 | 六、六三・九九          | 五、一九・七一         | 四、〇七一・四〇         | 六三、四三九・二六         | 三、四四四・〇五           | 二六、五二四・〇五        | 一〇九、二七四・四七 |
| 同 五年 | 六、七二・四三          | 三、七三・五一         | 三、八九七・六八         | 三六、〇五五・五五         | 一、六五三・〇三           | 一七、四七三・九二        | 六九、五七一・一〇  |
| 同 六年 | 八、九六・三〇          | 五、七〇・三三         | 五、六九・二二          | 六六、四三三・三四         | 三、四〇二・九二           | 二五、六三・五二         | 一一五、一八四・三三 |
| 同 七年 | 四、九三・九四<br>(一期分) | 一、八〇・三五<br>(同上) | 一、八〇七・七六<br>(同上) | 三七、〇七・七四<br>(前期分) | 一、五七・五<br>(七月末日現在) | 二二、〇二・八二<br>(同上) | 五九、二七・六六   |

備考—昭和七年七月三十一日現在

次は町税の附加税率であるが、之は出来る限り公平な見地から見て、毎年町會の議決を経て之を定めてゐる。参考までに年別一覧表を次に表示しやう。

町税附加税率年度別比較表(本税一圓ニツキ)

| 年 度  | 地 租    |        | 營業稅    | 所得稅    | 家屋稅    | 府營業稅   | 府雜稅    | 同 上 不動產取得稅 |
|------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|------------|
|      | 宅 地    | 田畑其他   |        |        |        |        |        |            |
| 大正元年 | 〇、〇九〇〇 | 〇、二一〇〇 | 〇、一五〇〇 | 〇、一五〇〇 | 〇、一五三〇 | 〇、三〇〇〇 | 〇、三〇〇〇 | 〇、三〇〇〇     |
| 同 五年 | 〇、〇九〇〇 | 〇、二一〇〇 | 〇、一五〇〇 | 〇、一五〇〇 | 〇、一五〇〇 | 〇、五〇〇〇 | 〇、五〇〇〇 | 〇、五〇〇〇     |
| 同 十年 | 〇、二八〇〇 | 〇、六六〇〇 | 〇、四七〇〇 | 〇、一四〇〇 | 〇、九〇〇〇 | 一、五〇〇〇 | 一、五〇〇〇 | 一、五〇〇〇     |
| 昭和元年 | 〇、四二〇〇 | 〇、九九〇〇 | 〇、九一五〇 | 〇、二一〇〇 | 二、五〇〇〇 | 一、五〇〇〇 | 一、五〇〇〇 | 一、五〇〇〇     |
| 同 二年 | 〇、四二〇〇 | 〇、九九〇〇 | 〇、九〇〇〇 | 〇、一〇五〇 | 二、八〇〇〇 | 一、五〇〇〇 | 一、五〇〇〇 | 一、五〇〇〇     |
| 同 三年 | 〇、四二〇〇 | 〇、九九〇〇 | 〇、九〇〇〇 | 〇、一〇五〇 | 三、〇〇〇〇 | 一、五〇〇〇 | 一、五〇〇〇 | 一、五〇〇〇     |
| 同 四年 | 〇、四五四〇 | 一、〇七〇〇 | 一、〇三二〇 | 〇、一一三〇 | 三、〇〇〇〇 | 一、五〇〇〇 | 一、五〇〇〇 | 一、五〇〇〇     |
| 同 五年 | 〇、四五四〇 | 一、〇七〇〇 | 〇、九七二〇 | 〇、一一三〇 | 二、九〇〇〇 | 一、五〇〇〇 | 一、五〇〇〇 | 一、五〇〇〇     |
| 同 六年 | 〇、五六〇〇 | 一、三二〇〇 | 一、二〇〇〇 | 〇、一四〇〇 | 三、一一二〇 | 一、五〇〇〇 | 一、五〇〇〇 | 一、五〇〇〇     |
| 同 七年 | 〇、九四〇〇 | 〇、九四〇〇 | 一、三二〇〇 | 〇、一七〇〇 | 三、六〇〇〇 | 一、五〇〇〇 | 一、五〇〇〇 | 一、五〇〇〇     |

尙参考として國稅及び府稅の内容の一覽表を年度別にして次に掲ぐることをする。



國稅年度別比較表(單位圓)

| 年度   | 地租       |          |          |       | 營業稅       | 所得稅      | 合計        |
|------|----------|----------|----------|-------|-----------|----------|-----------|
|      | 田        | 畑        | 宅地       | 雜種    |           |          |           |
| 大正元年 | 三,九七〇・五九 | 一,七八三・六三 | 一,八三六・九〇 | 六八・四六 | 七,六一・五八   | 九九〇・〇三   | 九,七七八・〇八  |
| 同五年  | 三,七七七・九五 | 一,七三三・一九 | 一,八九二・七七 | 六一・六七 | 七,四五・五八   | 七九一・九六   | 一,三三四・六〇  |
| 同十年  | 三,五七二・九九 | 一,八二〇・七四 | 一,九七七・二五 | 四八・一四 | 七,四四・〇一   | 二,〇九八・五六 | 一三,五三八・八一 |
| 昭和元年 | 三,三四・六九  | 一,四七五・一八 | 二,一七九・〇四 | 四四・〇八 | 七,〇三・九九   | 三,一九五・六二 | 一八,四七三・三五 |
| 同二年  | 三,三六五・二四 | 一,六七四・〇四 | 二,一六六・九五 | 四四・三四 | 七,二七〇・四七  | 三,三三七・三四 | 三三,一七二・〇五 |
| 同三年  | 二,九八八・九七 | 一,六七三・五九 | 二,一九〇・五四 | 四三・六六 | 六,八九六・七六  | 三,八七一・一〇 | 三三,七三九・五三 |
| 同四年  | 三,四六八・八一 | 一,八二〇・〇七 | 二,一九五・四一 | 四三・四六 | 七,四八七・七五  | 四,一三四・五九 | 三六,六三五・四九 |
| 同五年  | 三,三七四・七七 | 一,七六一・九〇 | 二,七八二・〇八 | 四二・四〇 | 七,九六二・一五  | 三,八九八・三四 | 三三,三三九・二四 |
| 同六年  | 二,三〇〇・三三 | 二,三三三・三八 | 九,七四〇・四八 | 九〇・八二 | 一四,二九七・一一 | 三,一〇二・七八 | 三九,五三三・〇九 |
| 同七年  | 四六八・五二   | (未調定)    | 四,八七・二三  | (未調定) | 五,三五五・六五  | 一,四三三・七七 | 一一,四五八・五六 |

備考——昭和七年七月三十一日現在

府稅年度別比較表(單位圓)

| 年別   | 地租附加稅    |          | 附加營業稅    | 附加所得稅     | 家屋稅       | 營業稅      | 雜種稅       | 合計 |
|------|----------|----------|----------|-----------|-----------|----------|-----------|----|
|      | 租        | 附加稅      |          |           |           |          |           |    |
| 大正元年 | 三,一五一・七一 | 二七・七八    | 六四・三三    | 二,四六八・〇七  | 一八・一〇一    | 一,〇三三・七五 | 七,二九七・六五  |    |
| 同五年  | 三,〇三四・三五 | 一三四・三四   | 一〇七・四六   | 二,四七九・〇〇  | 二四・一六〇    | 一,七〇六・一三 | 七,六九三・三八  |    |
| 同十年  | 九,六六〇・九六 | 一,八五三・三三 | 四五七・二九   | 七,九七五・五六  | 五四九・三〇    | 四,一三三・二七 | 二四,二七七・七五 |    |
| 昭和元年 | 六,三六八・五三 | 二,二七六・五三 | 六七七・三三   | 一五,二五・二二  | 六四四・三四    | 一,一五五・三七 | 三七,六三九・一〇 |    |
| 同二年  | 五,八七二・三五 | 二,〇三二・七〇 | 三,四五・四八  | 一五,五六二・三九 | 一,一三四・九五  | 一,一八五・〇一 | 四〇,八三三・六八 |    |
| 同三年  | 五,九〇〇・七三 | 二,八三九・七四 | 七,五六・五三  | 一七,九〇一・六六 | 一,三七二・〇〇  | 一,七八五・一〇 | 五三,四五三・〇六 |    |
| 同四年  | 六,六三〇・八八 | 三,一八二・〇五 | 八,三七六・一七 | 二二,一四三・四三 | 二,四四〇・二一  | 一,五五四・二二 | 五七,三四四・八五 |    |
| 同五年  | 六,一六二・九八 | 二,四五八・九〇 | 八,二六三・五二 | 二二,四三七・八九 | 一,〇九七・八四  | 二,一九五・一六 | 四二,三四三・二九 |    |
| 同六年  | 六,一四〇・九三 | 二,四九三・一〇 | 九,四六四・〇〇 | 二二,三〇三・六六 | 二,二七〇・八七  | 一,六四四・五九 | 五八,一一九・一五 |    |
| 同七年  | 二,五三三・五八 | (同上)     | 二,五三三・三五 | (同上)      | 一〇,〇〇八・八九 | 九六六・七七   | 八,〇九〇・五三  |    |

備考——昭和七年七月三十一日現在



### 第三節 町債

本町に於ける昭和七年七月十二日現在の町債は次の八種で、其の起債許可額は四十萬八千八百十圓借入額は三十九萬三千八百十圓である。此の内五萬六千二百七十三圓三十錢は既に償還済であるから、差引三十二萬七千五百三十圓六十七錢が償還未済額である。今個々の町債に就いて述べれば次の如くである。

- 一、起債許可額
  - 借入額 金十萬五千圓
  - 利率 金十萬五千圓
  - 借入先 年六分五厘
  - 元金償還未済額 簡易保険局
  - 償還期限 七萬六千四百六十二圓六十六錢
  - 起債の目的 昭和十三年三月
  - 摘要 小學校建築資金
  - 一部低利債ニ借替

- 二、起債許可額
    - 借入額 金八萬圓
    - 利率 金七萬五千圓
    - 借入先 年五分四厘
    - 元金償還未済額 日本勸業銀行
    - 償還期限 金五萬九千三百三十二圓七十六錢
    - 起債の目的 昭和十三年三月
    - 三、起債許可額
      - 借入額 小學校建築資金
      - 利率 金三萬五千圓
      - 借入先 金二萬五千圓
      - 元金償還未済額 年四分八厘
      - 償還期限 内務省
      - 起債の目的 金一萬八千四十五圓七十錢
- 昭和十六年九月  
町營住宅建設資金



|         |                     |      |
|---------|---------------------|------|
| 四、起債許可額 |                     | 特別會計 |
| A 借入額   | 金一萬五千圓              |      |
| 利率      | 金二千五百十六圓八十二錢(第一回)   |      |
| 借入先     | 年六分五厘               |      |
| 償還未済額   | 内務省                 |      |
| 償還期限    | 金三百七十二圓二十七錢         |      |
| 起債の目的   | 昭和十八年三月             |      |
| 摘要      | 町營住宅建設資金            |      |
| B 借入額   | 特別會計                |      |
| 利率      | 金一萬二千四百八十三圓十八錢(第二回) |      |
| 借入先     | 年五分六厘               |      |
| 償還未済額   | 内務省                 |      |
| 償還期限    | 金一萬一千四百十七圓九十三錢      |      |
|         | 昭和十八年三月             |      |

|         |           |          |
|---------|-----------|----------|
| 五、起債許可額 |           | 町營住宅建設資金 |
| 借入額     | 特別會計      |          |
| 利率      | 金五萬二千六百十圓 |          |
| 借入先     | 金五萬二千六百十圓 |          |
| 償還未済額   | 年四分二厘     |          |
| 償還期限    | 東京府       |          |
| 起債の目的   | 金五萬二千六百十圓 |          |
| 摘要      | 昭和二十五年三月  |          |
| 六、起債許可額 | 失業救済轉貸資金  |          |
| 借入額     | 特別會計      |          |
| 利率      | 金二萬五千九百圓  |          |
| 借入先     | 金二萬五千九百圓  |          |
|         | 年五分       |          |
|         | 東京府農工銀行   |          |



|         |                |
|---------|----------------|
| 償還未済額   | 金二萬四千百八十九圓三十五錢 |
| 償還期限    | 昭和十三年三月        |
| 起債の目的   | 高利債借替資金        |
| 摘要      | 起債借入未済に充用      |
| 七、起債許可額 | 金八萬圓           |
| 借入額     | 金五萬圓           |
| 利率      | 年四分八厘          |
| 借入先     | 東京府農工銀行        |
| 償還未済額   | 金五萬圓           |
| 償還期限    | 昭和十六年三月        |
| 起債の目的   | 小學校増築資金        |
| 八、起債許可額 | 金一萬五千三百圓       |
| 借入額     | 金一萬五千三百圓       |
| 利率      | 年五分            |

|         |             |
|---------|-------------|
| 借入先     | 東京府農工銀行     |
| 償還未済額   | 金一萬五千三百圓    |
| 償還期限    | 昭和十三年三月     |
| 起債の目的   | 高利債借替資金     |
| 摘要      | 起債借入未済に充用   |
| 九、起債許可額 | ナシ          |
| 借入額     | 金三萬圓        |
| 利率      | 日歩二錢        |
| 借入先     | 東京府農工銀行大森支店 |
| 償還未済額   | 金三萬圓        |
| 償還期限    | 昭和七年八月      |
| 起債の目的   | 一時借入金       |

以上の如くであるが、此の中第四番目の處では、借入が二回になつてゐることに注意してもらいたい。随つて起債許可の回数八種であるが、借入は十回となつてゐる。これは第九番に示したも



のが、起債許可額は不明であるが借入はしてあるによる。尙起債の目的中高利債借替資金は昭和六年度中に償還すべきものである。

### 第四節 町有財産

本町昭和七年八月三十一日現在に於ける町有財産の總額は（備品を除いて）二十一萬一千四百圓八十六錢である。此の内容を種類別に示せば大體次の如くである。

| 種類 | 行政財産   | 員數        | 價格             | 摘 | 要 |
|----|--------|-----------|----------------|---|---|
| 土地 | 九〇・〇〇  | 四、五〇〇・〇〇  | 役場敷地下池上字長榮七三ノ二 |   |   |
| 同  | 二二七・〇〇 | 一一、三五〇・〇〇 | 小學校敷地下池上字長榮七〇  |   |   |
| 同  | 三八三・〇〇 | 一九、一五〇・〇〇 | 同上 七三ノ一        |   |   |
| 同  | 四八四・〇〇 | 一四、五二〇・〇〇 | 同上 雪ヶ谷字大下九一    |   |   |
| 建物 | 六九・三三  | 二、七七三・二〇  | 役場廳舎下池上字長榮七三   |   |   |
| 同  | 三八・〇〇  | 不明        | 池上實務女學校々舎同上番地  |   |   |

|   |        |           |                     |  |  |
|---|--------|-----------|---------------------|--|--|
| 同 | 八二〇・六六 | 四九、二三九・六〇 | 池上尋常高等小學校校舎同上七〇     |  |  |
| 同 | 六八・九〇  | 三、四四五・〇〇  | 同上 附屬建物             |  |  |
| 同 | 四六八・二五 | 二三、四一二・五〇 | 池雪尋常小學校々舎雪ヶ谷大下九一一   |  |  |
| 同 | 三七・〇〇  | 一、四八〇・〇〇  | 同上 附屬建物             |  |  |
| 同 | 二三・七五  | 七一二・五〇    | 同上 校長住宅             |  |  |
| 同 | 三五九・七五 | 一七、九八七・五〇 | 久ヶ原尋常小學校々舎久ヶ原高谷八九一  |  |  |
| 同 | 四二・二五  | 一、六九〇・〇〇  | 同上 附屬建物             |  |  |
| 同 | 二三・七五  | 七一二・五〇    | 同上 校長住宅             |  |  |
| 同 | 五八一・七〇 | 三四、九〇二・〇〇 | 池上第二尋常小學校々舎堤方字蒲田溝三六 |  |  |
| 同 | 五二・〇〇  | 二、六〇〇・〇〇  | 同上 附屬建物             |  |  |
| 同 | 二三・七五  | 七一二・五〇    | 同上 校長住宅             |  |  |

#### 町基本財産

| 種目 | 員數        | 價格 | 摘         | 要 |
|----|-----------|----|-----------|---|
| 現金 | 三、五三六圓・五六 |    | 町一般歳計ニ運用中 |   |

#### 第四章 町の財政



|    |         |          |                   |
|----|---------|----------|-------------------|
| 土地 | 二四歩     | 二四〇圓・〇〇  | 荒蕪地大字石川字日向二四二番    |
| 同  | 三畝〇〇歩   | 九〇〇・〇〇   | 雑地大字池上字小池臺一四七三番   |
| 同  | 一畝二〇歩   | 五〇〇・〇〇   | 雑地大字池上字千束一六六六番ノ一號 |
| 同  | 二歩      | 二〇・〇〇    | 同上ノ二號             |
| 同  | 一畝一五歩   | 四五〇・〇〇   | 田地大字市野倉字子母澤五六番ノ二號 |
| 同  | 一畝〇五歩   | 三五〇・〇〇   | 番地大字石川字桑ノ木一二四ノ二耕地 |
| 同  | 〇・五〇坪   | 一〇・〇〇    | 宅地同上ノ一〇五ノ二        |
| 同  | 一六〇・一三坪 | 三、二〇二・六〇 | 宅地同上九五ノ二          |
| 同  | 四九二・八一坪 | 九、八五六・二〇 | 宅地馬込町字清水窪一六二九番ノ一〇 |
| 同  | 一五七・四一坪 | 三、一四八・二〇 | 宅地同上三六二九ノ九        |

### 第五章 宗教

#### 第一節 神社

現在本町に於ける神社数は村社三、無格社七で、其の社格、社名、祭神、所在地、神職氏名は次の如くである。尙各神社の由緒に關しては別項記載の事項を参照せられたい。

| 社格  | 社名   | 祭神     | 所在地     | 神職   |
|-----|------|--------|---------|------|
| 村社  | 八幡神社 | 譽田別命   | 池上五六三   | 山口直麿 |
| 同   | 八幡神社 | 譽田別命   | 道々橋     | 北川忠一 |
| 同   | 八幡神社 | 譽田別命   | 久ヶ原一〇〇六 | 大村榮助 |
| 無格社 | 八幡神社 | 譽田別命   | 雪ヶ各六三八  | 北川忠一 |
| 同   | 八幡神社 | 譽田別命   | 久ヶ原四二〇  | 大村榮助 |
| 同   | 德持神社 | 應神天皇   | 德持八〇九   | 大村榮助 |
| 同   | 稻荷神社 | 宇迦之御魂命 | 下池上九〇   | 大野良教 |



|   |      |                                    |        |      |
|---|------|------------------------------------|--------|------|
| 同 | 堤方神社 | 大鷗命、天照大神、<br>應神天皇、天兒屋根命、<br>宇迦之御魂命 | 堤方一〇七六 | 大野良教 |
| 同 | 太田神社 | 譽田別命、澳津彦命、<br>澳津姫命、高龍神、<br>宇迦之御魂命  | 市の倉三五〇 | 大野良教 |
| 同 | 稻荷神社 | 宇迦之御魂命                             | 桐ヶ谷四五  | 大野政顯 |

### 第二節 寺院

現在本町に於ける寺院は總じて三十一あり、うち寺が十二、院が十七、庵が一つ、堂一つとなつてゐる。全部共その宗派は日蓮宗に屬し、他宗派に屬するものは一寺もない。本門寺は大本山であり、日蓮聖人臨終の土地である。是が爲本町に於ける住民の殆んどは日蓮宗の歸依者である。毎年十月十二日十三日の御會式には數十萬の信徒雲集し、その盛觀比類なきものである。

今各寺院堂宇、宗派別、寺院名、所在地、住職氏名を擧げると次の如くである、尙寺院の由緒に就ては別項記載の事項を参照せられたい。

| 宗派  | 寺院名 | 所在地    | 住職   |
|-----|-----|--------|------|
| 日蓮宗 | 本門寺 | 下池上 一三 | 酒井日慎 |

|   |     |   |     |      |
|---|-----|---|-----|------|
| 同 | 西之院 | 同 | 一〇五 | 吉田廣教 |
| 同 | 東之院 | 同 | 一七  | 山村惠俊 |
| 同 | 安立院 | 同 | 一八  | (同右) |
| 同 | 法養寺 | 同 | 四四  | 杉本勝俊 |
| 同 | 心淨院 | 同 | 四六  | 武田宣祐 |
| 同 | 永壽院 | 同 | 四九  | 金子厚山 |
| 同 | 照榮院 | 同 | 五五  | 石川謙靜 |
| 同 | 本妙院 | 同 | 七八  | 早水稠雄 |
| 同 | 常仙院 | 同 | 八〇  | 牧野雲銑 |
| 同 | 中道院 | 同 | 八三  | 石川謙靜 |
| 同 | 本成院 | 同 | 八四  | 三瓶戒俊 |
| 同 | 覺源院 | 同 | 九七  | 鈴木戒秀 |
| 同 | 理境院 | 同 | 八七  | 大場耀光 |
| 同 | 南之院 | 同 | 一〇二 | 秋山海穩 |







所詮智者は八萬法藏をも習ふべし、十二部經をも學すべし。末代濁惡世の愚人は念佛等の難行易行等をば抛て、一向に法華經の題目を南無妙法蓮華經と唱へ給ふべし。日輪東方の空に出でさせ給へば南浮の空皆明かなり。大光を備へ給へる故也螢火は未だ國土を照さず。寶珠は懷中に持ちぬれば萬物皆ふらさずといふことなし。瓦石は財をふらさず。念佛等は法華經の題目に對すれば、瓦石と寶珠と螢火と日光との如し。我等が昧き眼を以て螢火の光を得て物の色を辨ふべしや。旁凡夫 叶ひがたき法は念佛眞言等の小乘權經也。

又我師釋迦來夜は一代聖教乃至八萬法藏の説者也。此娑婆無佛の世の最先に出させ給ひて、一切衆生の眼目を開き給ふ御佛也。東西十方の諸佛菩薩も皆此佛の教なるべし。譬へば皇帝以前は人父をしらずして畜生の如し。堯王己前は四季を辨へず、牛馬の癡かなるに同じかりき。佛世に出させ給はざりしには、比丘比丘尼の二衆もなく只男女二人にて候ひき。

(善無畏三藏鈔)

## 第六章 教 育

### 第一節 幼稚園教育

現在本町に於ける幼稚園は左記の三園であるが、其の所在地、兒童數、保姆數其他を示せば次の如くである。

#### 一、池上幼稚園

- 名稱——池上幼稚園
- 位置——荏原郡池上町大字市野倉四八
- 區域——制限ナシ
- 組織——私立
- 創立——大正十五年四月
- 代表者——中田フミ



現在児童数——三〇名

目的及事業——幼児を哺育して其心身を健全に發達せしめ、善良なる性情を涵養し、家庭教育を補ふを目的とす。

保育事業

保母数——二名

### 二、小池幼稚園

名稱——小池幼稚園

位置——荏原郡池上町大字池上三三三

創立——昭和六年四月一日

組織——私立

區域——制限ナシ

代表者——上村松五郎

現在児童数——四〇名

目的及事業——國民ノ基礎教育ノ向上ト幼児ノ人格ノ善導トヲ以テ本園ノ目的トス

保育事業

保母教——三名

### 三、双葉幼稚園

名稱——双葉幼稚園

位置——荏原郡池上町大字久ヶ原六三八

創立——昭和六年九月十五日

組織——私立

區域——制限ナシ

代表者——佐々木一正

現在児童数——三〇名

目的及事業——幼児の個性を尊重し、善良なるしつけに導き、天與の素質をそのままに發揮させるやうに育て哺くむのを以て目的とす。

保育事業

保母数——三名



### 第二節 小學校教育

#### 小學校

現在本町に於ける小學校の数は四校であつて、昭和七年七月三十一日現在の學級數は六十二、職員六十八人、生徒高等科二百六十四人、尋常科二千八百七十四人である。尙其の校名、所在地、校長名其他は次の如くである。

| 校名        | 所在地    | 學級數             | 職員數 | 生徒數   | 校長名   |
|-----------|--------|-----------------|-----|-------|-------|
| 池上尋常小學校   | 下池上 七一 | 尋常科 一七<br>高等科 六 | 二六  | 一、一八一 | 井上 弘  |
| 池雪尋常小學校   | 雪ヶ谷九一一 | 一八              | 一九  | 八五八   | 坂口 勇造 |
| 久ヶ原尋常小學校  | 久ヶ原八九一 | 六               | 七   | 二八九   | 堀部 滋吉 |
| 池上第二尋常小學校 | 堤方 三六  | 一五              | 一六  | 八〇五   | 上田 若松 |
| 計         |        |                 | 六二  | 六八    | 三、一三三 |

#### 學齡兒童

本町に於ける學齡兒童數は大正七年五月末日現在によれば、男兒千四百四十五名、女兒千四百三十四名合計二千八百七十九名である。之を大正元年五月末日現在に於ける男兒三百七名、女兒三百二十九名に比較すれば男兒に於て千百三十八名、女兒に於て千百五名の増加となつてゐる。參考までに累年の學齡兒童表を掲ぐれば左の如くである。

學校別學齡兒童表

| 年次     | 男兒  |     | 女兒  |     | 計    |
|--------|-----|-----|-----|-----|------|
|        | 男   | 女   | 男   | 女   |      |
| 大正元年   | 一一二 | 一一六 | 一五九 | 一五〇 | 一一二八 |
| 同 五年   | 一四八 | 一五四 | 一六四 | 一五七 | 一六二二 |
| 同 十年   | 二二四 | 一六〇 | 一六八 | 二三五 | 一六五  |
| 昭和元年   | 四〇八 | 二二二 | 一六九 | 四九六 | 一六九  |
| 同 二年   | 三九五 | 二三〇 | 一六七 | 四二五 | 一七一  |
| 同 三年   | 四六八 | 二三一 | 一六四 | 五二四 | 一九四  |
| 同 四年   | 二七四 | 二三六 | 二七一 | 三八三 | 二三四  |
| 計      |     |     | 九一  | 三三三 | 二五〇  |
| 第六章 教育 |     |     |     |     | 二八五  |



|     |     |     |     |     |     |     |     |     |       |       |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-------|
| 同五年 | 三八二 | 二五五 | 三三一 | 一一三 | 四〇五 | 二五五 | 三三〇 | 九八一 | 〇八一   | 〇八八   |
| 同六年 | 四三四 | 三二九 | 三六五 | 一三五 | 四四三 | 三二七 | 三五三 | 一一五 | 一、二六三 | 一、二三八 |
| 同七年 | 四六七 | 四三五 | 三八八 | 一五五 | 四六〇 | 四二四 | 四一七 | 一三三 | 一、四四五 | 一、四三四 |

就學及不就學兒童數

小學校教育に於て學齡兒童の就學及不就學の狀況如何はかなり重大な問題に屬する。今本町に於ける其の狀況を一覽すると昭和七年五月末日現在の學齡兒童數は、前掲の表に於て見らるるが如く男兒一千四百四十五名、女兒一千四百三十四名であるが、その中で不就學兒童の數は男兒四名女兒一名で、學齡兒童百人に對する就學歩合は九十九・八二%である。今本町累年の兒童就學及不就學狀況を擧げれば左表の如くである。

就學及不就學兒童表

| 年次   | 就學兒童 |     | 不就學兒童 |   | 就學歩合   |
|------|------|-----|-------|---|--------|
|      | 男    | 女   | 男     | 女 |        |
| 昭和元年 | 六八八  | 七二九 | 一     | 二 | 三九九・七七 |
| 同二年  | 六九〇  | 六五八 | 二     | 四 | 六九九・五六 |

|     |       |       |   |   |         |
|-----|-------|-------|---|---|---------|
| 同三年 | 七六二   | 七八〇   | 一 | 二 | 三九九・八〇  |
| 同四年 | 八七〇   | 九四九   | 二 | 三 | 五九九・七二  |
| 同五年 | 一、〇七九 | 一、〇八五 | 二 | 三 | 五九九・七六  |
| 同六年 | 一、二六〇 | 一、二三一 | 三 | 七 | 一〇九九・六〇 |
| 同七年 | 一、四四一 | 一、四三三 | 四 | 一 | 五九九・八二  |

小學校在籍兒童

小學校在籍兒童表

| 年別   | 尋常科 |     | 高等科 |    | 合計  |     |
|------|-----|-----|-----|----|-----|-----|
|      | 男   | 女   | 男   | 女  | 男   | 女   |
| 大正元年 | 三〇七 | 三二九 | —   | —  | —   | —   |
| 同五年  | 三六六 | 三七一 | —   | —  | —   | —   |
| 同十年  | 四五一 | 四四九 | —   | —  | —   | —   |
| 昭和元年 | 六八八 | 七二九 | 六八  | 七四 | 七五六 | 八〇三 |
| 同二年  | 六九〇 | 六五八 | 八七  | 七三 | 七七七 | 七三一 |



|     |       |       |       |     |     |     |       |       |       |
|-----|-------|-------|-------|-----|-----|-----|-------|-------|-------|
| 同三年 | 七六二   | 七八〇   | 一、五四二 | 一二〇 | 六四  | 一八四 | 八八二   | 八四四   | 一、七二六 |
| 同四年 | 八七〇   | 九四九   | 一、八一九 | 一一七 | 八〇  | 一九七 | 九八七   | 一、〇二九 | 二、〇一六 |
| 同五年 | 一、〇七九 | 一、〇八五 | 二、一六四 | 一一四 | 八五  | 一九九 | 一、一九三 | 一、一七〇 | 二、三六三 |
| 同六年 | 一、二六〇 | 一、二三一 | 二、四九一 | 一三〇 | 一一一 | 二四一 | 一、三九〇 | 一、三四二 | 二、七三二 |
| 同七年 | 一、四四一 | 一、四三三 | 二、八七四 | 一五七 | 一一一 | 二六八 | 一、五九八 | 一、五四四 | 三、一四二 |

現在學級及現在職員

一、池上尋常高等小學校（七月一日現在）

| 學年 | 組  | 兒童數 |    | 計  | 就職年月日     | 擔當職員名     |
|----|----|-----|----|----|-----------|-----------|
|    |    | 男   | 女  |    |           |           |
| 尋一 | 男  | 五六  | —  | 五六 | 昭和六、四、一〇  | 訓導 佐久間 正明 |
| 同  | 女  | —   | 六〇 | 六〇 | 昭和六、五、一二  | 代用 太田 高子  |
| 同  | 男女 | 三〇  | 二八 | 五八 | 昭和三、一、一三  | 訓導 井筒 はな  |
| 同  | 男  | 五六  | —  | 五六 | 大正一四、四、一〇 | 同 天 明 武   |
| 同  | 女  | —   | 五四 | 五四 | 昭和四、四、八   | 同 向井千鶴 代  |

| 學年 | 組   | 兒童數 |    | 計  | 就職年月日     | 擔當職員名        |
|----|-----|-----|----|----|-----------|--------------|
|    |     | 男   | 女  |    |           |              |
| 同二 | 男女  | 三六  | 二〇 | 五六 | 昭和七、五、一〇  | 代用 平島 さちえ    |
| 同三 | 男   | 五四  | —  | 五四 | 昭和六、二、一〇  | 同 翁 長 良 助    |
| 同三 | 女   | —   | 五九 | 五九 | 大正一五、二、二四 | 訓導 御瀧 國 雄    |
| 同三 | 男女  | 二六  | 三一 | 五七 | 昭和七、三、三一  | 代用 二 瓶 光     |
| 同四 | 男   | 五〇  | —  | 五〇 | 昭和六、四、一八  | 訓導 山 本 章     |
| 同四 | 女   | —   | 五〇 | 五〇 | 昭和四、三、三一  | 同 鈴 木 しつゑ    |
| 同四 | 男女  | 二二  | 二八 | 五〇 | 昭和七、四、一五  | 代用 福山 マツエ    |
| 同五 | 男   | 六三  | —  | 六三 | 昭和三、九、二〇  | 訓導 菅 原 廣 志   |
| 同五 | 女   | —   | 六七 | 六七 | 昭和二、三、三一  | 同 碓 井 正 一    |
| 同六 | 男   | 三六  | —  | 三六 | 昭和二、三、三一  | 同 名 當 英 吉    |
| 同六 | 女   | —   | 三八 | 三八 | 昭和四、四、二四  | 同 藤 本 カツコ    |
| 同六 | 男女  | 二七  | 二六 | 五三 | 昭和七、五、一〇  | 代用 井 手 治 作   |
| 高一 | 男ノ一 | 四五  | —  | 四五 | 昭和七、八、三一  | 訓導 松 岡 乙 二 郎 |
| 同  | 男ノ二 | 四二  | —  | 四二 | 昭和七、四、二六  | 代用 瀧 口 深     |
| 同  | 女   | —   | 六五 | 六五 | 大正一、三、三一  | 訓導 中 田 實     |







三、久ヶ原尋常小學校

| 學年 | 組 | 男    | 女   | 計   | 就職年月日     | 職名     | 氏名    |
|----|---|------|-----|-----|-----------|--------|-------|
| 一  | 一 | 三一   | 二六  | 五七  | 昭和三年五月一六  | 訓導     | 大沼秀   |
| 二  | 二 | 二二   | 二八  | 五〇  | 大正一四年二月七  | 同      | 遠藤しん  |
| 三  | 三 | 二七   | 一九  | 四六  | 昭和七年三月三一  | 訓導     | 大八木敏夫 |
| 四  | 四 | 二九   | 二三  | 五二  | 大正一四年九月二一 | 同      | 藤村丘吾  |
| 五  | 五 | 二四   | 二四  | 四八  | 昭和七年五月三一  | 同      | 平井柳二  |
| 六  | 六 | 一七   | 一九  | 三六  | 昭和五年三月三一  | 同      | 大越勝秋  |
| 計  |   | 六一五〇 | 一三九 | 二八九 | 昭和五年四月二五  | 校訓導兼校長 | 堀部滋吉  |

四、池上第二尋常小學校

| 學年 | 組 | 男    | 女   | 計   | 就職年月日    | 職名     | 氏名   |
|----|---|------|-----|-----|----------|--------|------|
| 一  | 一 | 五六   | 一   | 五六  | 昭和四年八月三一 | 訓導     | 中村松夫 |
| 二  | 二 | 一九   | 三八  | 五七  | 昭和四年三月三一 | 同      | 細田茂弘 |
| 一  | 三 | 四八   | 一   | 四八  | 昭和五年二月二八 | 同      | 倉掛ペン |
| 二  | 二 | 三〇   | 一八  | 四八  | 昭和四年七月三一 | 代用     | 清水嘉雄 |
| 三  | 三 | 一    | 四九  | 五〇  | 昭和四年三月三一 | 訓導     | 瀧澤かつ |
| 二  | 二 | 五〇   | 一   | 五〇  | 昭和六年五月一六 | 同      | 三橋義雄 |
| 三  | 三 | 二〇   | 三〇  | 五〇  | 昭和七年七月五  | 代用     | 森丙五郎 |
| 三  | 三 | 二    | 五二  | 五二  | 昭和四年三月三一 | 訓導     | 沖倉サト |
| 四  | 四 | 一    | 六〇  | 六〇  | 昭和五年三月三一 | 同      | 松本隆  |
| 四  | 四 | 一    | 六五  | 六六  | 昭和五年三月三一 | 同      | 佐藤フク |
| 五  | 五 | 一    | 五二  | 五三  | 昭和四年三月三一 | 同      | 岡田行夫 |
| 五  | 五 | 一    | 四八  | 四九  | 昭和四年三月三一 | 同      | 阿部文治 |
| 六  | 六 | 一    | 五四  | 五五  | 昭和六年一月〇  | 同      | 佐野武治 |
| 六  | 六 | 一    | 六一  | 六二  | 昭和四年三月三一 | 同      | 大月繁  |
| 計  |   | 一五三八 | 四一七 | 八〇五 |          | 校訓導兼校長 | 上田若松 |



入學及び卒業兒童

本町昭和七年四月一日現在に於ける小學校入學兒童の數は尋常科男三百二十名、女三百四十名、計六百六十名である。高等科は男八十一名、女六十五名、計百四十五名である。尋常、高等兩科の合計八百六名である。之を昨年の入學數に對比してみると尋常科に於て五十一名の増、高等科に於て七名の増となつてゐる。

次に小學校卒業者の數であるが、之は昭和六年三月末に於て尋常科男百七十二名、女百五十八名、計三百三十名である。高等科は男五十三名、女三十九名、計九十二名である。尋常、高等兩科の合計は四百二十二名となつてゐる。之を前年度即ち昭和五年度末に對比してみると、尋常科に於て八十二名の増、高等科に於て三十六名の増となつてゐる。

次に入學者數と卒業者數とを較べて其の差を調査することも強ち無用ではないと思ふがあまり煩雜になる恐れがあるから、之は茲で一先づ區切つて置くこととする。次に累年の表を各別校のものゝと總括的のものとの二種に分けて掲げることとする。

小學校入學兒童之部

A (各 校 別)

一、池上尋常高等小學校入學兒童數

| 種別   | 尋常科 |    | 高等科 |    | 合 計 |     |
|------|-----|----|-----|----|-----|-----|
|      | 男   | 女  | 男   | 女  | 男   | 女   |
| 大正元年 | 二二  | 二一 | 三二  | 二五 | 五五  | 四六  |
| 同 五年 | 二一  | 三五 | 三二  | 三三 | 五三  | 六八  |
| 同 十年 | 四二  | 三九 | 二六  | 二九 | 六八  | 一三六 |
| 昭和元年 | 八四  | 八〇 | 三八  | 三六 | 一二二 | 一六六 |
| 同 二年 | 七〇  | 八四 | 五四  | 四一 | 一二四 | 一五五 |
| 同 三年 | 八五  | 九四 | 七三  | 三六 | 一五八 | 一三〇 |
| 同 四年 | 六一  | 七五 | 六二  | 四七 | 一二三 | 一二二 |
| 同 五年 | 八三  | 八一 | 六〇  | 四三 | 一四三 | 一二四 |
| 同 六年 | 九〇  | 六五 | 七九  | 六〇 | 一六九 | 一二五 |
| 同 七年 | 八七  | 八八 | 八一  | 六五 | 一六八 | 一五三 |
| 計    | 四四  | 五六 | 三二  | 三五 | 六八  | 一〇一 |

備考——昭和四年四月一日池上第二尋常小學校分校トナル



一、池雪尋常小學校入學兒童數

| 種別  | 年別   | 男  | 女  | 計  | 種別  | 年別   | 男  | 女  | 計   |
|-----|------|----|----|----|-----|------|----|----|-----|
| 尋常科 | 大正元年 | 二五 | 二四 | 四九 | 尋常科 | 昭和三年 | 三九 | 三七 | 七六  |
|     | 同 五年 | 二七 | 三七 | 六四 |     | 昭和四年 | 四六 | 五八 | 一〇四 |
|     | 同 十年 | 二九 | 三九 | 六八 |     | 昭和五年 | 五四 | 五五 | 一〇九 |
|     | 昭和元年 | 三四 | 二七 | 六一 |     | 同 六年 | 七五 | 六九 | 一四四 |
|     | 同 二年 | 三五 | 三五 | 七〇 |     | 同 七年 | 九八 | 九五 | 一九三 |
| 尋常科 | 大正元年 | 一六 | 七  | 二三 | 尋常科 | 昭和四年 | 七  | 九  | 一六  |
|     | 大正十年 | 九  | 八  | 一七 |     | 大正五年 | 一七 | 一四 | 三一  |
|     | 昭和元年 | 一三 | 一一 | 二四 |     | 同 五年 | 二三 | 一五 | 三八  |
|     | 同 二年 | 一二 | 一〇 | 二二 |     | 同 六年 | 二五 | 二四 | 四九  |
|     | 同 三年 | 一四 | 一三 | 二七 |     | 同 七年 | 三一 | 二六 | 五七  |

二、久原尋常小學校入學兒童數

| 種別  | 年別   | 男   | 女   | 計   | 種別  | 年別   | 男   | 女   | 計   |
|-----|------|-----|-----|-----|-----|------|-----|-----|-----|
| 尋常科 | 大正元年 | 一二三 | 一二五 | 二四八 | 尋常科 | 昭和六年 | 一三五 | 一二六 | 二六一 |
|     | 昭和四年 | 一二三 | 一二五 | 二四八 |     | 昭和六年 | 一三五 | 一二六 | 二六一 |
|     | 同 五年 | 一二九 | 一二五 | 二五四 |     | 同 七年 | 一〇四 | 一三一 | 二三五 |

四、池上第二尋常小學校入學兒童數

◎四校合併入學兒童數一覽表

| 種別  | 年別   | 尋常科 | 高等科 | 合計  |
|-----|------|-----|-----|-----|
| 尋常科 | 大正元年 | 六三  | 二五  | 八八  |
|     | 同 五年 | 五五  | 三三  | 八八  |
|     | 同 十年 | 八〇  | 二九  | 一一〇 |
|     | 昭和元年 | 一三一 | 七四  | 一〇六 |
|     | 同 二年 | 一一七 | 一六九 | 二八六 |
| 高等科 | 同 三年 | 一三八 | 一〇九 | 二四七 |
|     | 同 四年 | 一四四 | 九五  | 二三九 |
|     | 同 五年 | 一四四 | 七三  | 二一七 |
|     | 同 六年 | 二八二 | 三六  | 三一八 |
|     | 同 七年 | 二八二 | 三六  | 三一八 |



|     |     |     |     |    |    |     |     |     |     |
|-----|-----|-----|-----|----|----|-----|-----|-----|-----|
| 同四年 | 二四七 | 二七二 | 五一九 | 六二 | 四七 | 一〇九 | 三〇九 | 三一九 | 六二八 |
| 同五年 | 二八九 | 二七六 | 五六五 | 六〇 | 四三 | 一〇三 | 三四九 | 三一九 | 六六八 |
| 同六年 | 三二五 | 二八四 | 六〇九 | 七九 | 六〇 | 一三九 | 四〇四 | 三四四 | 七四七 |
| 同七年 | 三二〇 | 三四〇 | 六六〇 | 八一 | 六五 | 一四六 | 四〇一 | 四〇五 | 八〇六 |

小學校卒業兒童之部

△(各 校 別)

一、池上尋常高等小學校卒業兒童數

|      |    |     |    |     |     |    |    |     |    |     |
|------|----|-----|----|-----|-----|----|----|-----|----|-----|
| 年別   | 種別 | 尋常科 |    | 計   | 高等科 |    | 計  | 合 計 |    |     |
|      |    | 男   | 女  |     | 男   | 女  |    | 男   | 女  |     |
| 大正元年 |    | 一八  | 一九 | 三七  | 二七  | 七  | 三四 | 四五  | 二六 | 七一  |
| 同五年  |    | 一六  | 二七 | 四三  | 三〇  | 一六 | 四六 | 四六  | 四三 | 八九  |
| 同十年  |    | 二〇  | 一七 | 三七  | 三六  | 一二 | 四八 | 五六  | 二九 | 八五  |
| 昭和元年 |    | 四七  | 四四 | 九一  | 三二  | 二六 | 五八 | 七九  | 七〇 | 一四九 |
| 同二年  |    | 四八  | 四八 | 九六  | 二九  | 三七 | 六六 | 七七  | 八五 | 一六二 |
| 同三年  |    | 六二  | 五四 | 一一六 | 三三  | 二九 | 六二 | 九五  | 八三 | 一七八 |

一、池雪尋常小學校卒業兒童數

|     |    |    |     |    |    |    |     |     |     |
|-----|----|----|-----|----|----|----|-----|-----|-----|
| 同四年 | 六三 | 七三 | 一三六 | 四七 | 二八 | 七五 | 一一〇 | 一〇一 | 二一一 |
| 同五年 | 四八 | 三四 | 八二  | 五八 | 三五 | 九三 | 一〇六 | 六九  | 一七一 |
| 同六年 | 六二 | 五八 | 一二〇 | 五三 | 三九 | 九二 | 一一五 | 九七  | 二二二 |
| 同七年 | 六四 | 七一 | 一三五 | 四八 | 三六 | 八四 | 一一二 | 一〇七 | 二一九 |

|      |    |     |    |    |      |    |     |    |    |
|------|----|-----|----|----|------|----|-----|----|----|
| 年別   | 種別 | 尋常科 |    | 計  | 年別   | 種別 | 尋常科 |    | 計  |
|      |    | 男   | 女  |    |      |    | 男   | 女  |    |
| 大正元年 |    | 一八  | 二〇 | 三八 | 昭和三年 |    | 三五  | 二九 | 六四 |
| 同五年  |    | 一七  | 二三 | 四〇 | 同四年  |    | 三九  | 二八 | 五五 |
| 同十年  |    | 二二  | 三二 | 五四 | 同五年  |    | 三四  | 二七 | 六一 |
| 昭和元年 |    | 三〇  | 三七 | 六七 | 同六年  |    | 四四  | 四六 | 九〇 |
| 同二年  |    | 四四  | 二六 | 七〇 |      |    |     |    |    |

二、久原尋常小學校卒業兒童數



|      |    |    |    |     |    |    |    |
|------|----|----|----|-----|----|----|----|
| 大正元年 | 六  | 一一 | 一七 | 昭和三 | 一三 | 一一 | 二五 |
| 同五年  | 七  | 九  | 一六 | 同四年 | 一一 | 一二 | 二三 |
| 同十年  | 一一 | 八  | 一九 | 同五年 | 一〇 | 一五 | 二五 |
| 昭和元年 | 一一 | 一〇 | 二一 | 同六年 | 一四 | 一五 | 二九 |
| 同二年  | 八  | 七  | 一五 | 同七年 | 二一 | 一九 | 四〇 |

四、池上第二尋常小學校卒業児童數

|      |     |     |     |     |    |    |    |
|------|-----|-----|-----|-----|----|----|----|
| 種別   | 尋常科 | 高等科 | 尋常科 |     |    |    |    |
| 年別   | 男   | 女   | 男   | 女   |    |    |    |
| 昭和四年 | 三七  | 三五  | 七二  | 昭和三 | 五二 | 三八 | 九〇 |
| 同五年  | 四一  | 三九  | 八〇  | 昭和六 |    |    |    |

◎ 四校合併卒業児童數一覽表

|      |     |     |    |    |   |    |    |    |     |
|------|-----|-----|----|----|---|----|----|----|-----|
| 種別   | 尋常科 | 高等科 | 合計 |    |   |    |    |    |     |
| 年別   | 男   | 女   | 男  | 女  | 男 | 女  | 計  |    |     |
| 大正元年 | 四二  | 五〇  | 九二 | 二七 | 七 | 三四 | 六九 | 五七 | 一二六 |

|      |     |     |     |    |    |    |     |     |     |
|------|-----|-----|-----|----|----|----|-----|-----|-----|
| 同五年  | 四〇  | 五九  | 九九  | 三〇 | 一六 | 四六 | 七〇  | 七五  | 一四五 |
| 同十年  | 五三  | 五七  | 一一〇 | 三六 | 一一 | 四八 | 八九  | 六九  | 一五八 |
| 昭和元年 | 八八  | 九一  | 一七九 | 三二 | 二六 | 五八 | 一二〇 | 一一七 | 二三七 |
| 同一年  | 一〇〇 | 八一  | 一八一 | 二九 | 三七 | 六六 | 一二九 | 一一八 | 二四七 |
| 同三年  | 一一〇 | 九五  | 二〇五 | 三三 | 二九 | 六二 | 一四三 | 一二四 | 二六七 |
| 同四年  | 一五〇 | 一四八 | 二九八 | 四七 | 二八 | 七五 | 一九七 | 一七六 | 三七三 |
| 同五年  | 一三三 | 一一五 | 二四八 | 五八 | 三五 | 九三 | 一九一 | 一五〇 | 三四一 |
| 同六年  | 一七二 | 一五七 | 三二九 | 五三 | 三九 | 九二 | 二二五 | 一九六 | 四二一 |

教育費負擔

近時頗る著しい發展をなしつつある近郊町村の財政上の論議をなすに當つて殊に其の歳出上に於て重要な問題となるのは教育費と土木費とである。就中教育費は倒年其の歳出の約五割乃至七割を占めており、而も累年増加に増加を重ねて毫も止むことなき状態である。かくて教育費の問題は近時發展町村に於ける歳入中の家屋税附加税の問題と共に町村財政上の二大問題であると云はねば



ならない。乍然累年膨張し且町村財政の状況に比較し餘りに多額に上るの故を以て之に嚴重なる緊縮方針を加ふるに於ては、時に嚴に失して國民教育上重大なる障害を來すに至る恐れがある。茲に市町村自治團體に取つて教育費問題の重要性が存在するのであり、今にして之が根本的對策を考究するに有らざれば遂には此の止むことなき増大の爲に町村財政の破綻を來すことは必然であると云はねばならない。殊に近時の如く決して克服されることなき深刻なる世界經濟恐慌の、益々深まりゆく時に於ては、町村財政の破綻は此の教育費問題より生ずるとさへ言ひうると信ずる。而して之が對策として當面最も重要なことは凡ゆる市町村自治體の教育費の一切を國庫負擔にすることである。教育費中の大部を占むる教員給は勿論小學校建築費、修繕費、増築費を始めとして一切の兒童に對する教科書、學用品一切の無料給與、晝食の無料給與等の爲にその一切の費用を國庫に負擔せしむるやう、強烈に要求することが當面の根本的なる對策である。次に本町累年の教育費に關する表を掲げることとする。

| 年別   | 年別教育費(單位圓) | 經費總額 | 一戸當負擔額 | 一人當負擔額 | 兒一人當負擔額 |
|------|------------|------|--------|--------|---------|
| 大正元年 | 五、一〇〇・二八三  | —    | —      | —      | 六・八九二   |

|      |            |        |       |        |
|------|------------|--------|-------|--------|
| 同 五年 | 五、八二三・三二〇  | 六・一九五  | 一・〇六六 | 八・一一〇  |
| 同 十年 | 一八、一六三・五九〇 | 一八・〇一九 | 三・一一三 | 一九・六三六 |
| 昭和元年 | 四三、三一三・八六〇 | 一七・一六〇 | 三・八九八 | 三〇・九六〇 |
| 同 二年 | 五二、〇二六・四三〇 | 一九・七一〇 | 五・〇二八 | 三四・五〇〇 |
| 同 三年 | 六三、〇〇八・八四〇 | 一七・八三〇 | 三・八四八 | 三九・三八〇 |
| 同 四年 | 八八、二一六・三四〇 | 二一・一五五 | 四・九一〇 | 四三・五四二 |
| 同 五年 | 八五、八八〇・一五〇 | 二〇・五九五 | 四・七八〇 | 三六・四三六 |
| 同 六年 | 七七、六〇五・八六〇 | 一六・九六三 | 三・六四三 | 二八・六七九 |
| 同 七年 | 九七、一一一・〇〇〇 | 一八・九五七 | 四・一四五 | 三一・〇六五 |

備考—昭和七年度分は豫算を示す。

尙参考迄に本町に於ける四小學校の教育費を各校別に示せば次の如くである。

| 年別   | 年別教育費表(池上尋常高等小學校) | 經費總額 | 一戸當負擔額 | 一人當負擔額 | 兒一人當負擔額 |
|------|-------------------|------|--------|--------|---------|
| 大正元年 | 二、七七九・三八          | —    | —      | —      | 七・六三    |



| 年別   | 經費總額      | 一戸當負擔額 | 一人當負擔額 | 一兒一人當負擔額 |
|------|-----------|--------|--------|----------|
| 同五年  | 三、一八四・三八  |        |        | 七・五八     |
| 同十年  | 九、九〇七・〇〇  |        |        | 二〇・六八    |
| 昭和元年 | 二五、〇四六・〇〇 |        |        | 二八・四六    |
| 同二年  | 三一、〇三五・〇〇 |        |        | 三一・〇三    |
| 同三年  | 三一、五八〇・〇〇 |        |        | 二八・三三    |
| 同四年  | 三六、四四二・〇〇 |        |        | 四一・七九    |
| 同五年  | 三二、四五三・〇〇 |        |        | 三二・九八    |
| 同六年  | 三〇、七九〇・〇〇 |        |        | 二七・九四    |
| 同七年  | 三四、〇八〇・〇〇 |        |        | 二八・六九    |

備考—1、昭和七年度ハ豫算ヲ示ス。  
2、空欄ハ不詳ニツキ記入セス。

年別教育費表(池雪尋常小學校)

大正元年

一、七二三・〇〇圓

一、七二三・〇〇圓

六・七四圓

| 年別   | 經費總額      | 一戸當負擔額 | 一人當負擔額 | 一兒一人當負擔額 |
|------|-----------|--------|--------|----------|
| 同五年  | 二、〇二三・〇〇  |        |        | 六・四〇     |
| 同十年  | 五、九四三・〇〇  |        |        | 一八・二七    |
| 昭和元年 | 一一、八〇七・〇〇 | 一八・二七  | 四・九〇   | 四四・九五    |
| 同二年  | 一三、四八二・〇〇 | 一八・九九  | 四・五九   | 四四・八〇    |
| 同三年  | 一七、一七五・〇〇 | 二〇・二一  | 四・八八   | 四二・七八    |
| 同四年  | 一九、六〇四・〇〇 | 二〇・八九  | 四・七三   | 四二・一六    |
| 同五年  | 二〇、七五八・〇〇 | 二〇・七六  | 三・九二   | 四〇・四二    |
| 同六年  | 二〇、六〇五・〇〇 | 一八・二九  | 三・四五   | 三一・四一    |
| 同七年  | 二九、三四一・〇〇 | 一七・八一  | 三・八五   | 三四・一〇    |

備考—1、昭和七年度ハ豫算ヲ示ス。  
2、空欄ハ不詳ニ付記入セス。

年別教育費表(久原尋常小學校)

大正元年

六二六・二二圓

第六章 教育

三〇五

五・六九圓



| 年別   | 經費總額      | 一戸當負擔額 | 一人當負擔額 | 一兒當負擔額 |
|------|-----------|--------|--------|--------|
| 池上町史 |           |        |        |        |
| 同五年  | 六八〇・五〇    |        |        | 六・四一   |
| 同十年  | 二、九三七・八九  |        |        | 二五・一一  |
| 昭和元年 | 七、二七〇・五六  |        |        | 六〇・八一  |
| 同二年  | 七、九五〇・三三  |        |        | 五九・三三  |
| 同三年  | 一一、二一三・三六 |        |        | 八七・六〇  |
| 同四年  | 一三、一六九・四〇 |        |        | 七四・八三  |
| 同五年  | 一一、四二九・八七 |        |        | 六〇・〇四  |
| 同六年  | 一〇、九四三・〇〇 |        |        | 四四・八四  |
| 同七年  | 一一、〇七三・〇〇 |        |        | 四一・九二  |
| 大正元年 |           |        |        |        |

備考—1、昭和七年度及昭和六年度ハ豫算ヲ示ス。  
2、空欄ハ不詳ニツキ記入セス。

年別教育費表(池上第二尋常小學校)

| 年別   | 經費總額      | 一戸當負擔額 | 一人當負擔額 | 一兒當負擔額 |
|------|-----------|--------|--------|--------|
| 同五年  |           |        |        |        |
| 同十年  |           |        |        |        |
| 昭和元年 |           |        |        |        |
| 同二年  |           |        |        |        |
| 同三年  |           |        |        |        |
| 同四年  | 一五、七〇六・〇〇 | 二四・一二  |        | 四六・七〇  |
| 同五年  | 一九、七九七・〇〇 | 二〇・七六  |        | 三六・五一  |
| 同六年  | 一九、六八〇・〇〇 | 一八・三九  |        | 三〇・三一  |
| 同七年  | 一一、二三二・〇〇 | 一八・九四  |        | 三〇・九五  |

備考—1、昭和三年以前ハ經費ナシ。  
2、昭和四年以後空欄ハ不明ニツキ記入セス。  
3、昭和七年度經費ハ豫算ヲ示ス。

尙参考として教員給料に關する年別一覽表を左に掲ぐることをする。  
教員給料年別一覽表(七月一日調)



| 年別   | 正教員 |    | 専科正教員 |    | 准教員 |    | 代用教員 |    | 平均   |
|------|-----|----|-------|----|-----|----|------|----|------|
|      | 最高  | 最低 | 最高    | 最低 | 最高  | 最低 | 最高   | 最低 |      |
| 大正元年 | 三六  | 二六 | 一     | 一  | 二   | 一  | 一    | 一  | 二〇・〇 |
| 同五年  | 三三  | 二六 | 一     | 一  | 二   | 一  | 一    | 一  | 二五・〇 |
| 同十年  | 三〇  | 二五 | 一     | 一  | 一   | 一  | 一    | 一  | 二〇・〇 |
| 昭和元年 | 二七  | 二五 | 一     | 一  | 一   | 一  | 一    | 一  | 二一・五 |
| 同二年  | 二五  | 二五 | 一     | 一  | 一   | 一  | 一    | 一  | 二一・五 |
| 同三年  | 二五  | 二五 | 一     | 一  | 一   | 一  | 一    | 一  | 二一・五 |
| 同四年  | 二五  | 二五 | 一     | 一  | 一   | 一  | 一    | 一  | 二一・五 |
| 同五年  | 二五  | 二五 | 一     | 一  | 一   | 一  | 一    | 一  | 二一・五 |
| 同六年  | 二五  | 二五 | 一     | 一  | 一   | 一  | 一    | 一  | 二一・五 |
| 同七年  | 二五  | 二五 | 一     | 一  | 一   | 一  | 一    | 一  | 二一・五 |

小學校教員數

昭和七年四月一日現在に於ける本町小學校の教員數は總計六十八名で内男四十六名、女二十二名である。更に資格別にすれば正教員に於ては男三十八名、女十三名、専科教員に於ては男一名、女一名、代用教員に於ては男七名、女八名といふ状態である。之を昭和元年の總數三十三名に比較すれば員數に於て三十五名の増加で、その比率は十割六分強の増加である。今大正元年以後の小學校教員數を示せば次の如くである。

年別教職員數表

| 年別   | 正教員 |   | 専科正教員 |   | 准教員 |   | 代用教員 |   | 合計 |
|------|-----|---|-------|---|-----|---|------|---|----|
|      | 男   | 女 | 男     | 女 | 男   | 女 | 男    | 女 |    |
| 大正元年 | 六   | 一 | 一     | 一 | 一   | 一 | 一    | 一 | 九  |
| 同五年  | 九   | 二 | 一     | 一 | 二   | 三 | 一    | 一 | 一六 |
| 同十年  | 一〇  | 四 | 一     | 一 | 一   | 二 | 三    | 一 | 一六 |
| 昭和元年 | 一八  | 六 | 一     | 一 | 一   | 一 | 四    | 四 | 二二 |
| 同二年  | 一九  | 八 | 一     | 一 | 一   | 一 | 四    | 三 | 二二 |
| 同三年  | 二三  | 八 | 一     | 一 | 一   | 一 | 五    | 四 | 二八 |



|     |        |   |   |   |   |   |   |   |    |    |    |    |
|-----|--------|---|---|---|---|---|---|---|----|----|----|----|
| 同四年 | 三四一五四九 | 一 | 一 | 二 | 一 | 一 | 四 | 二 | 六  | 三九 | 一九 | 五八 |
| 同五年 | 三四一四四八 | 二 | 一 | 三 | 一 | 十 | 二 | 三 | 五  | 三八 | 一八 | 五六 |
| 同六年 | 三四一三四七 | 二 | 一 | 三 | 一 | 十 | 四 | 五 | 九  | 四〇 | 一九 | 五九 |
| 同七年 | 三八一三五  | 一 | 一 | 二 | 十 | 十 | 七 | 八 | 一五 | 四六 | 二二 | 六八 |

學校要覽

本町に於ける四つの小學校の夫々に付要約的にその概要を述べることにする。

一、池上尋常高等小學校

設置

創立——明治十一年六月二十八日。

名稱——荏原郡池上尋常高等小學校。

位置——荏原郡池上町下池上七十一番地。

沿革——理境院堂宇假用ニ依リ授業開始明治十二年十二月大字久ヶ原ニ分校ヲ設置ス。

明治十四年七月、校舍新築落成ス。

明治二十六年四月、分校ヲ廢止ス。

明治三十五年十二月、池上尋常高等小學校ト改稱ス。

大正十四年一月、二階建校舎一棟増築ス。

昭和七年六月二十八日、二階建校舎一棟落成ス。

現在ノ狀況

通學區域

一、尋常科——堤方、下池上、徳持、久ヶ原ノ一部。

二、高等科——池上町全部。

設備

校地

一一〇四四、八二坪。

運動場

一三〇〇坪。

校舎

八九〇、五五坪。

教室

普通教室

一一三。

特別教室

三。



|        |    |
|--------|----|
| 器械標本室  | 一。 |
| 職員室    | 一。 |
| 宿直室    | 一。 |
| 應接室    | 一。 |
| 御眞影奉安庫 | 一。 |
| 小使室    | 一。 |
| 物置     | 一。 |
| 便所     | 三。 |

二、池雪尋常小學校

設置

創立 明治十一年十月。

名稱 荏原郡池雪尋常小學校。

位置 荏原郡池上町大字雪ヶ谷九一一。

沿革 明治十二年十月大道々橋に建設す。

明治二十二年三月、増築す。

明治三十七年二月、雪ヶ谷九一一に新築移轉す。

明治四十二年三月、四教室増築す。

明治四十三年十二月、池雪農業補習學校を併設す。

大正十五年七月一日、池雪青年訓練所併置。

昭和三年十月二日、御眞影御下賜。

昭和三年十二月、新校舍建築移轉。

昭和五年四月一日、池雪青年訓練所廢止、池上青年訓練所併置。

昭和六年四月二十一日、御眞影御交換再御下賜。

昭和六年四月一日、一、二學年八學級二部教授編成。

現在の狀況

通學區域 雪ヶ谷、池上、石川、道々橋。

設備

校地 一九四四坪。 運動場 一五二四坪。

第六章 教育

三二三 校舍 四二〇坪。



|        |     |        |    |      |    |
|--------|-----|--------|----|------|----|
| 普通教室   | 一四。 | 職員室    | 一。 | 應接室  | 一。 |
| 宿直室    | 一。  | 御眞影奉安庫 | 一。 | 校長住宅 | 一。 |
| 湯沸及使丁室 | 一。  | 物置     | 二。 | 便所   | 二。 |

三、久原尋常小學校

設置

創立——明治十二年十二月、池上小學校分校として創立。

名稱——荏原郡久原尋常小學校。

位置——荏原郡池上町大字久原八九一。

沿革——明治十二年十二月新設、池上小學校分校と稱す。

明治二十六年四月分離して久原尋常小學校と稱す。

明治二十九年十月校舍改築。

明治三十年九月暴風の爲校舍全部倒潰す。

明治三十一年六月再築。

明治四十二年三月校舍一棟一教室増築す。

現在の状況

昭和三年四月校舍改増築單式六學級に編成す。

通學區域——久ヶ原、道々橋。

設備

|      |        |      |       |        |      |
|------|--------|------|-------|--------|------|
| 校地坪數 | 一四四六坪。 | 運動場  | 八〇二坪。 | 學校園    | 三〇坪。 |
| 其他坪數 | 二三〇坪。  | 校舍坪數 | 三八四坪。 | 普通教室   | 六。   |
| 特別教室 | 三。     | 職員室  | 一。    | 應接室    | 一。   |
| 衛生室  | 一。     | 宿直室  | 一。    | 御眞影奉安庫 | 一。   |
| 校長住宅 | 一。     | 小使室  | 一。    | 湯呑所    | 一。   |
| 物置   | 一。     | 便所   | 二。    |        |      |

四、池上第二尋常小學校

設置

創立——昭和四年四月一日。

名稱——荏原郡池上第二小學校。



位置——荏原郡池上町大字堤方三六。

沿革——昭和四年四月一日創設。

昭和四年一月十日、校舍新築着手。

昭和四年三月三十一日、新築落成。

昭和七年二月六日、校舍増築着手。

昭和同年三月三十一日、増築落成。

現在の状況

通學區域——市野倉、桐ヶ谷、堤方ノ一部。

設 備

|      |         |       |       |      |      |
|------|---------|-------|-------|------|------|
| 校地坪數 | 一五〇〇坪。  | 運動場坪數 | 七〇〇坪。 | 其他坪數 | 五二坪。 |
| 校舍坪數 | 五八二坪三六。 | 普通教室  | 一六。   | 特別教室 | 一。   |
| 職員室數 | 一。      | 應接室數  | 一。    | 宿直室數 | 一。   |
| 校長住宅 | 一。      | 小使室   | 一。    | 湯吞所  | 一。   |
| 便所   | 二。      | 物置    | 一。    |      |      |

### 學 校 醫

本町に於ける各學校には何れも學校醫及び學校齒科醫を囑託し、以て兒童の健康衛生に留意してゐる。今學校別にその氏名を示せば次の如くである。

學 校 醫

| 氏 名      | 住 所    | 囑託學校名     |
|----------|--------|-----------|
| ○齋 藤 宗 久 | 下池上三〇五 | 池上尋常高等小學校 |
| 富 永 虎 二  | 雪ヶ谷四〇  | 池雪尋常小學校   |
| 富 谷 貫 二  | 徳持四九〇  | 久原尋常小學校   |
| ○中 里 三 郎 | 同 九三三  | 第二尋常小學校   |

備考——○印ハ町醫ヲ兼ヌ。

### 學 校 齒 科 醫

氏 名 住 所

囑託學校名



池上町史

小原八郎 德持四一六

稻垣菊太郎 堤方九四〇

三一八

池上尋常高等小學校

久原尋常小學校

池雪尋常小學校

第二尋常小學校

歷代校長及舊職員

一、歷代學校長一覽表(池上尋常高等小學校)

| 就職年月     | 退職年月      | 氏名    | 就職年月    | 退職年月    | 氏名    |
|----------|-----------|-------|---------|---------|-------|
| 明治十五年二月  | 明治三十三年十月  | 大久保 等 | 大正七年三月  | 大正九年二月  | 增井喜太郎 |
| 明治二十三年十月 | 明治三十四年二月  | 遠山 四郎 | 大正九年三月  | 大正十三年一月 | 内藤虎三郎 |
| 明治三十四年四月 | 明治三十六年十月  | 瀧谷新次郎 | 大正十三年一月 | 大正十五年六月 | 篠澤 政吉 |
| 明治三十六年十月 | 明治三十二年六月  | 井上勇次郎 | 大正十五年六月 | 昭和三年三月  | 堀内鏡三郎 |
| 明治三十三年一月 | 明治三十三年十二月 | 水野 信夫 | 昭和三年三月  | 昭和四年二月  | 山田 茂吉 |
| 明治三十四年一月 | 明治三十六年九月  | 石田 幸造 | 昭和四年二月  | (現)     | 井上 弘  |
| 明治三十六年九月 | 大正七年三月    | 中田 多平 |         |         |       |

二、歷代學校長一覽表(池雪尋常小學校)

| 就職年月 | 退職年月 | 氏名        | 就職年月     | 退職年月     | 氏名    |
|------|------|-----------|----------|----------|-------|
| (不明) | (不明) | 渡邊 親滿(不明) | (不明)     | (不明)     | 井澤 金吾 |
| 同    | 同    | 奥井 簡道 同   | 同        | 同        | 石川 豊  |
| 同    | 同    | 光田 修藏     | 明治三、三、三  | 大正一四、三、三 | 佐野愨之助 |
| 同    | 同    | 米村善太郎     | 大正一四、三、三 | 大正一四、七、三 | 高橋 正  |
| 同    | 同    | 高木 正      | 大正一四、七、三 | 昭和四、二、六  | 井上 弘  |
| 同    | 同    | 石川勝五郎     | 昭和四、二、六  | 昭和六、四、二  | 當麻 赫郎 |
| 同    | 同    | 田中 大堅     | 昭和六、四、二  | (現)      | 坂口 勇造 |

三、歷代學校長一覽表(久ヶ原尋常小學校)

| 就職年月日   | 退職年月日   | 氏名    | 就職年月日    | 退職年月日    | 氏名    |
|---------|---------|-------|----------|----------|-------|
| 明治三、四、〇 | 大正四、三、〇 | 鈴木金太郎 | 大正一〇、六、〇 | 大正一三、八、三 | 淺賀 金作 |
| 大正四、四、〇 | 大正四、二、〇 | 白木 益得 | 大正一三、三、三 | 大正一五、六、三 | 堀内鏡三郎 |
| 大正四、三、  | 大正六、三、  | 綱島 延重 | 大正一五、六、三 | 昭和五、四、三  | 矢野 留次 |



大正六、三 大正一〇、六 吉田 昇 昭和五、四、五(現)

在)堀部 滋吉

四、歷代學校長一覽表(池上第二尋常小學校)

| 就職年月日   | 退職年月日   | 氏名    | 就職年月日   | 退職年月日 | 氏名    |
|---------|---------|-------|---------|-------|-------|
| 昭和四、三、七 | 昭和五、四、五 | 上竹原清薫 | 昭和五、四、五 | (現)   | 上田 若松 |

一、舊職員一覽表(池上尋常高等小學校)

| 在職期間                       | 職名         | 氏名    | 在職期間                     | 職名         | 氏名     |
|----------------------------|------------|-------|--------------------------|------------|--------|
| 自明治二一、六、二八<br>至不詳          | 訓導         | 米山善太郎 | 自明治二五、一〇、五<br>至明治二五、一〇、五 | 准訓導        | 富田 秀優  |
| 自明治一三、二<br>至不詳             | 同          | 村山安太郎 | 自明治三二、一〇、一<br>至明治三二、一〇、一 | 同          | 深堀 覺次郎 |
| 自明治一三、七<br>至不詳             | 同          | 高木 正  | 自明治二五、一〇、一<br>至明治二五、一〇、一 | 訓導         | 勝山 儀助  |
| 自明治一四、一<br>至不詳             | 同          | 中山欽一郎 | 自明治二六、一、一〇<br>至明治二六、一、一〇 | 同          | 長田 恒三郎 |
| 自明治一六、二、二<br>至不詳           | 同          | 鈴木義信  | 自明治二七、二、二<br>至明治二七、二、二   | 同          | 鈴木 金太郎 |
| 自明治二〇、一〇、一〇<br>至明治二五、一〇、一〇 | 授業生<br>助 手 | 淺野長太郎 | 自明治二七、二、二<br>至明治二七、二、二   | 同          | 安西 繁次郎 |
|                            |            |       | 自明治三二、四、三〇<br>至明治三二、四、三〇 | 雇教員<br>服 部 | 菫      |

|                          |      |        |                          |      |         |
|--------------------------|------|--------|--------------------------|------|---------|
| 自明治二二、一〇、三<br>至明治二二、一〇、三 | 同    | 内田 久一  | 自明治三二、五、一<br>至明治三二、五、一   | 同    | 君嶋 茂助   |
| 自明治二二、一〇、三<br>至明治二二、一〇、三 | 同    | 村 政太郎  | 自明治三一、八、一七<br>至明治三一、八、一七 | 同    | 吉田 しう   |
| 自明治二二、一〇、三<br>至明治二二、一〇、三 | 雇教員  | 三田廣三郎  | 自明治三二、一、二七<br>至明治三二、一、二七 | 同    | 森 三吉    |
| 自明治二二、一〇、三<br>至明治二二、一〇、三 | 同    | 市川 寛行  | 自明治三三、一、一〇<br>至明治三三、一、一〇 | 訓導   | 田口 浪藏   |
| 自明治二二、一〇、三<br>至明治二二、一〇、三 | 准訓導  | 鍋田 繁利  | 自明治三三、一、一〇<br>至明治三三、一、一〇 | 同    | 吉田 喜美   |
| 自明治二二、一〇、三<br>至明治二二、一〇、三 | 同    | 松野辰之助  | 自明治三三、一、一〇<br>至明治三三、一、一〇 | 同    | 古田土 吉之助 |
| 自明治二二、一〇、三<br>至明治二二、一〇、三 | 訓導   | 松野辰之助  | 自明治三三、一、一〇<br>至明治三三、一、一〇 | 同    | 長谷川 源作  |
| 自明治二二、一〇、三<br>至明治二二、一〇、三 | 代用教員 | 原 田 今  | 自明治三三、一、一〇<br>至明治三三、一、一〇 | 代用教員 | 折笠 惣治   |
| 自明治二二、一〇、三<br>至明治二二、一〇、三 | 同    | 佐野 信正  | 自明治三三、一、一〇<br>至明治三三、一、一〇 | 同    | 河野 勝三郎  |
| 自明治二二、一〇、三<br>至明治二二、一〇、三 | 代用教員 | 手塚 順一郎 | 自明治三三、一、一〇<br>至明治三三、一、一〇 | 同    | 丸山 由五郎  |
| 自明治二二、一〇、三<br>至明治二二、一〇、三 | 同    | 西川 まき  | 自明治三三、一、一〇<br>至明治三三、一、一〇 | 同    | 野村 乙酉   |
| 自明治二二、一〇、三<br>至明治二二、一〇、三 | 同    | 飯田 むら  | 自明治三三、一、一〇<br>至明治三三、一、一〇 | 同    |         |
| 自明治二二、一〇、三<br>至明治二二、一〇、三 | 准訓導  | 黒河内 忠  | 自明治三三、一、一〇<br>至明治三三、一、一〇 | 同    |         |











二、舊職員一覽表(池雪尋常小學校)

| 在職期間       | 職名   | 氏名    | 在職期間       | 職名   | 氏名    |
|------------|------|-------|------------|------|-------|
| 自(不)明      | 訓導   | 竹田道堅  | 自明治四〇、一、二四 | (不明) | 野村尙   |
| 至明治三九、五、二八 |      |       | 自明治四一、一、二四 |      |       |
| 自明治三四、九、二八 | (不明) | 前橋育三郎 | 自明治四二、三、二〇 | 同    | 中田せん  |
| 至明治三四、三、二八 |      |       | 自明治四二、三、二〇 |      |       |
| 自明治三四、五、三一 | 同    | 石井保之  | 自明治四二、九、二二 | 代用教員 | 森田八男  |
| 至明治三四、八、三一 |      |       | 自明治四二、九、二二 |      |       |
| 自明治三四、六、三一 | 同    | 宇田川定豐 | 自明治四二、五、二七 | 代用   | 木村いね  |
| 至明治三四、六、三一 |      |       | 自明治四二、五、二七 |      |       |
| 自明治三五、六、四一 | 同    | 宮地貞頼  | 自明治四二、二、二二 | 同    | 清水哲二郎 |
| 至明治三五、六、四一 |      |       | 自明治四二、二、二二 |      |       |
| 自明治三五、四、二一 | 同    | 野村乙酉  | 自明治四二、三、二九 | 准訓導  | 金子正介  |
| 至明治三五、四、二一 |      |       | 自明治四二、三、二九 |      |       |
| 自明治三九、六、二二 | 訓導   | 三浦正治  | 自明治四二、一、一七 | 訓導   | 遠藤文七  |
| 至明治三九、六、二二 |      |       | 自明治四二、一、一七 |      |       |
| 自明治三九、一、一六 | 准訓導  | 佐野むめ  | 自明治四五、六、三〇 | 代用教員 | 金子カノ  |
| 至明治三九、一、一六 |      |       | 自明治四五、六、三〇 |      |       |

三、舊職員一覽表(久原尋常小學校)

|           |    |       |           |    |       |
|-----------|----|-------|-----------|----|-------|
| 自大正二、八、一九 | 代用 | 重野治郎  | 自大正二、三、一五 | 訓導 | 渡邊愿   |
| 至大正二、八、一九 |    |       | 自大正二、三、一五 |    |       |
| 自大正二、一、〇九 | 訓導 | 宮坂清正  | 自大正二、三、一八 | 同  | 米川與三郎 |
| 至大正二、一、〇九 |    |       | 自大正二、三、一八 |    |       |
| 自大正七、五、三一 | 同  | 山口憲治  | 自大正二、四、二五 | 同  | 大橋祐一  |
| 至大正七、五、三一 |    |       | 自大正二、四、二五 |    |       |
| 自大正一、六、四二 | 同  | 長田喜幾  | 自大正二、三、一五 | 同  | 松下勝子  |
| 至大正一、六、四二 |    |       | 自大正二、三、一五 |    |       |
| 自大正一、〇、九一 | 同  | 安達長三郎 | 自昭和七、三、一〇 | 同  | 佐藤チエ  |
| 至大正一、〇、九一 |    |       | 自昭和七、三、一〇 |    |       |
| 自大正九、八、一九 | 代用 | 渡邊福松  | 自昭和七、三、一〇 | 同  | 寺本誠   |
| 至大正九、八、一九 |    |       | 自昭和七、三、一〇 |    |       |
| 自大正四、八、三一 | 訓導 | 光山覺禪  | 自昭和七、三、一〇 | 同  | 吉田寅藏  |
| 至大正四、八、三一 |    |       | 自昭和七、三、一〇 |    |       |
| 自昭和五、〇、三〇 | 同  | 池谷誠藏  | 自昭和七、三、一〇 | 同  | 吉田寅藏  |
| 至昭和五、〇、三〇 |    |       | 自昭和七、三、一〇 |    |       |
| 自大正二、一、〇六 | 代用 | 熊王政信  | 自昭和六、四、三三 | 同  | 添谷孝雄  |
| 至大正二、一、〇六 |    |       | 自昭和六、四、三三 |    |       |
| 自大正三、二、三二 | 同  | 甲田正夫  | 自昭和七、六、三二 | 同  | 佐野猛   |
| 至大正三、二、三二 |    |       | 自昭和七、六、三二 |    |       |



| 在職期間                    | 職名   | 氏名   | 在職期間                    | 職名   | 氏名     |
|-------------------------|------|------|-------------------------|------|--------|
| 自明治四一、三、三〇<br>至同四二、三、三〇 | 訓導   | 中田せん | 自大正五、四、二九<br>至同五、二、三二   | 訓導   | 齋藤カツ   |
| 自明治四三、一、四<br>至同四三、一、四   | 代用教員 | 三好愛子 | 自大正七、六、三<br>至同七、三、二五    | 同    | 菊地ゆく   |
| 自明治四二、二、一<br>至同四二、二、一   | 同    | 中原のぶ | 自大正八、七、一六<br>至同八、一、二二   | 同    | 鶴岡操    |
| 自明治四三、二、一八<br>至同四三、二、一八 | 同    | 元川ふく | 自大正七、七、三<br>至同七、三、一〇    | 代用教員 | 福井こいそ  |
| 自明治四四、二、一五<br>至大正元、二、一五 | 准訓導  | 堀ヒロ  | 自大正八、一、三〇<br>至同八、一、三〇   | 訓導   | 山本數之助  |
| 自大正三、四、二六<br>至同四、二、二六   | 代用教員 | 戸田緑  | 自大正八、四、三〇<br>至同八、三、三〇   | 代用教員 | 初鹿野うめ代 |
| 自大正四、六、二六<br>至同四、八、二六   | 同    | 今野うめ | 自大正九、二、三〇<br>至同九、一、三〇   | 同    | 杉村シゲ   |
| 自大正五、三、三<br>至同五、三、三     | 同    | 上田利保 | 自大正一〇、三、一〇<br>至同一〇、三、一〇 | 同    | 田口ノイ   |
| 自大正三、一、三<br>至同三、一、三     | 准訓導  | 堤基喜  | 自昭和五、二、三<br>至同五、三、二     | 代用教員 | 矢野多盛   |
| 自大正〇、九、三〇<br>至同〇、九、三〇   | 代用教員 | 原つな  | 自昭和四、四、一七<br>至同四、一、二四   | 同    | 中村芳藏   |
| 自大正二、三、一七<br>至同二、三、一七   | 同    | 玉川たみ | 自昭和四、四、一五<br>至同四、三、一五   | 同    | 清水一美   |

| 在職期間                  | 職名 | 氏名   | 在職期間                | 職名 | 氏名   |
|-----------------------|----|------|---------------------|----|------|
| 自大正二、八、三二<br>至同二、八、三二 | 同  | 山田ひろ | 自昭和六、六、八<br>至同六、三、三 | 同  | 小林義則 |
| 自大正三、二、三<br>至同三、二、三   | 同  | 小川貞  | 自昭和七、三、三<br>至同七、三、三 | 訓導 | 絹笠峯士 |
| 自大正三、二、二<br>至同三、二、二   | 同  | 菅野誠  | 自昭和七、四、五<br>至同七、三、二 | 同  | 關平   |
| 自大正二、四、一六<br>至同二、四、一六 | 訓導 | 酒田善作 |                     |    |      |

四、舊職員一覽表(池上第二尋常小學校)

| 在職期間                  | 職名   | 氏名   | 在職期間                  | 職名 | 氏名   |
|-----------------------|------|------|-----------------------|----|------|
| 自昭和四、六、二〇<br>至同四、八、三一 | 代用教員 | 菊地誠一 | 自昭和六、四、三<br>至同六、三、三一  | 訓導 | 稻葉群造 |
| 自昭和五、六、三<br>至同六、九、四   | 訓導   | 奥山亮吉 | 自昭和五、四、二<br>至同五、二、三   | 同  | 蒔田小作 |
| 自昭和五、四、三一<br>至同五、四、三一 | 同    | 鹽川光代 | 自昭和六、四、三〇<br>至同六、四、三〇 | 同  | 古川七郎 |

後援會

本町に於ける各小學校には何れも児童の父兄によつて後援會が創立されて、各々その目的とする所を果してゐる。今その各々に就て左に述べて置くこととする。







|     |          |     |        |
|-----|----------|-----|--------|
| 評議員 | 下池上清水佐兵衛 | 評議員 | 徳持吉田正美 |
| 同   | 宗仲靜太郎    | 同   | 小宮民三郎  |
| 同   | 指田半六     | 同   | 梶山貞吉   |
| 同   | 中島孝次郎    | 同   | 白川延喜   |
| 同   | 森和三郎     | 同   | 方戸張梅吉  |
| 同   | 藤田作之助    | 同   | 吉田源七   |
| 同   | 徳持淺野彌五郎  | 同   | 横溝昌一   |
| 同   | 並木条藏     | 同   | 櫻井政次郎  |
| 同   | 永野長吉     | 同   | 吉田彦太郎  |
| 同   | 永野定一郎    | 同   | 荒鐵藏    |
| 同   | 飯島藤三郎    | 同   | 中西常次郎  |
| 同   | 佐藤 喊     | 同   | 荒松五郎   |
| 同   | 男 澤 純    | 同   | 岩壁保    |
| 同   | 森下惠世男    | 同   | 伊藤六太郎  |

評議員 堤 方遠 藤 福太郎

二、池雪尋常小學校後援會

名稱——池雪尋常小學校後援會。

創立——大正十二年四月十六日。

位置——池雪尋常小學校内。

區域——池雪尋常小學校兒童通學區域内。

代表者——綱島菊次郎。

歴代代表者氏名——鈴鹿豊吉、三部正治、鈴木幾太郎、萩原豊吉、綱島傳藏、綱島菊次郎。

會員數——六〇六名。

目的——學校と家庭との聯絡を圖り以て小學校教育の實績の向上を圖る爲の後援をなすを以て目的とす。

事業——一、兒童學用品の補給。

二、諸施設に對する後援。

三、其他兒童教育上必要なる事項。

略歴——大正十二年四月十六日學校長佐野愨之助氏就職當時に保護者會なる名目の下に設立さる。鈴鹿豊吉氏初代會長として就任あり、引續き他役員の選舉、規約の制定に及ぶ。

大正十三年五月二十日鈴鹿會長病氣辭任副會長三部正治氏會長に就任す。大正十五年















|    |            |    |          |
|----|------------|----|----------|
| 理事 | 道々橋直井幸藏    | 理事 | 久ヶ原中島直太郎 |
| 同  | 同 三木鎌吉     | 同  | 同 長島金太郎  |
| 同  | 同 久ヶ原宮田重太郎 | 同  | 同 篠澤岩吉   |
| 同  | 同 戸田峰吉     | 同  | 同 中島長五郎  |
| 同  | 同 宮田條太郎    | 同  | 同 三木房太郎  |

四、池上第二尋常小學校後援會

名稱——池上第二尋常小學校後援會。

創立——昭和四年四月一日。

位置——荏原郡池上第二尋常小學校内。

區域——池上第二尋常小學校通學區域。

組織——池上第二尋常小學校兒童の保護者並びに本會の趣旨に賛同する同校學區内居住の有志を以て組織す。

代表者——内山濱喜地、守屋伍郎、石田善次郎、濱田敬資、高垣寅次郎、松田太郎左衛門、赤澤猪吉。

歴代々表者——横溝直也、小澤肇、川島百太郎、横溝良三、塚田金市郎、三吉勉、宮島房太郎

鈴木要助。

會員數——三九八名。

目的——本會は池上第二尋常小學校の施設に關し後援を爲し學校と家庭との連絡を密にし以て兒童教育上の効果を増進するを目的とす。

事業——一、教育上の施設に對する援助。

二、保健衛生上の施設に對する援助。

三、運動會、遠足會、講演會、父兄會等に對する援助。

四、學用品の補給。

五、學用品共同購入の受託。

六、教職員及兒童の慰藉弔問。

七、善行、學術、運動等に對する獎勵及表彰。

八、其の他理事會に於て必要と認めたる事項。

略歴——昭和四年四月一日池上第二尋常小學校創立と共に池上尋常高等小學校保護者會と合同

經營し、昭和六年八月三十一日を以て分離し、昭和七年九月一日會名を池上第二尋常

小學校後援會と改稱し、會則、組織等の變更を成し以て今日に至つてゐる。



現在の役員は左表の如くである。

| 職名   | 住所  | 氏名      | 職名  | 住所  | 氏名    |
|------|-----|---------|-----|-----|-------|
| 常務理事 | 市野倉 | 内山濱喜地   | 評議員 | 市野倉 | 折尾伊勢郎 |
| 同    | 同   | 守屋伍郎    | 同   | 同   | 川島百太郎 |
| 理事   | 桐ヶ谷 | 石田善次郎   | 同   | 同   | 村上福松  |
| 同    | 堤方  | 濱田敬資    | 同   | 同   | 沖山定吉  |
| 同    | 市野倉 | 高垣寅次郎   | 同   | 同   | 鈴木三藏  |
| 同    | 堤方  | 松田太郎左衛門 | 同   | 同   | 出口文三郎 |
| 同    | 同   | 赤澤猪吉    | 同   | 同   | 小林秀二郎 |
| 監事   | 桐ヶ谷 | 柏木末廣    | 同   | 同   | 竹井長次郎 |
| 同    | 市野倉 | 森象三     | 同   | 同   | 永島銀藏  |
| 評議員  | 同   | 越田正次    | 同   | 同   | 平本隆吉  |
| 同    | 同   | 齋藤又一    | 同   | 同   | 丸山百吉  |
| 同    | 同   | 吉岡次吉    | 同   | 同   | 有元史郎  |

| 評議員 | 市野倉 | 牧野近之助  | 評議員 | 堤方  | 藤野篤藏  |
|-----|-----|--------|-----|-----|-------|
| 同   | 同   | 三木庸造   | 同   | 同   | 青島彌四郎 |
| 同   | 堤方  | 國光寅吉   | 同   | 同   | 小堀信克  |
| 同   | 同   | 丸山督憲   | 同   | 同   | 山口儀六  |
| 同   | 同   | 萩島忠太郎  | 同   | 同   | 杉浦宏俊  |
| 同   | 同   | 鈴木加壽滿  | 同   | 同   | 佐藤康逸  |
| 同   | 同   | 金丸清一   | 同   | 桐ヶ谷 | 宮島房太郎 |
| 同   | 同   | 三輪幸左衛門 | 同   | 同   | 同     |

五、池上第二尋常小學校母の會

名稱——池上第二尋常小學校母の會。

創立——昭和六年四月二十五日

位置——荏原郡池上第二尋常小學校内。

區域——池上第二尋常小學校通學區域。

組織——本會は左の會員を以て組織す。

一、普通會員——本校在學兒童の母姉にして月額十錢の會費を醸出する者。

二、特別會員——本校學區内に居住しその兒童通學せざるも特志により月額十錢の會費を



醸出する主婦たる者。

代表者——石田けい、濱田キヨシ、大月珠子、渡邊みさほ、久保とよ、赤澤五月、佐藤益子、三吉キヌヨ、平本ます子。

歴代々表者——石田けい、渡邊みさほ、三輪書子、三吉キヌヨ、穴戸徳子。會員數——二五八名。

目的——本會は母として必要なる修養をなし、兼ねて會員相互の親睦を圖るを以て目的とす。事業——本會の目的を達せんがため左の事業を行ふ。

一、講演會、講習會等の開催。

二、懇話會の開催。

三、池上第二尋常小學校の援助。

四、其の他必要なる事項。

略歴——昭和六年四月二十五日の創立にして、今日に及ぶ。

現在役員——は次の如くである。

| 職名   | 住所  | 氏名     | 職名   | 住所  | 氏名     |
|------|-----|--------|------|-----|--------|
| 常任理事 | 桐ヶ谷 | 石田 けい  | 常任理事 | 市野倉 | 大月 珠子  |
| 同    | 堤方  | 濱田 キヨシ | 同    | 同   | 渡邊 みさほ |

|      |            |    |            |
|------|------------|----|------------|
| 常任理事 | 桐ヶ谷 久保 とよ  | 理事 | 堤方 守屋 くまの  |
| 同    | 堤方 赤澤 五月   | 同  | 市野倉 丸山 清子  |
| 同    | 同 佐藤 益子    | 同  | 同 平本 ます子   |
| 同    | 市野倉 三吉 キヌヨ | 同  | 同 久保 とよ    |
| 同    | 同 平本 ます子   | 同  | 同 三輪 たま    |
| 理事   | 同 和氣 秀子    | 同  | 堤方 三吉 キヌヨ  |
| 同    | 同 櫻井 クニ子   | 同  | 同 尾崎 春子    |
| 同    | 堤方 萩島 ちく   | 同  | 同 久世 かすゑ   |
| 同    | 市野倉 内山 清子  | 同  | 同 石井 美代    |
| 同    | 堤方 細谷 喜久子  | 同  | 市野倉 横溝 千代子 |
| 同    | 市野倉 小森 八千代 | 同  | 堤方 小野 花子   |
| 同    | 堤方 中村 蝶    | 同  | 同 濱田 キヨシ   |
| 同    | 同 赤澤 五月    | 同  | 桐ヶ谷 山田 たね  |
| 同    | 桐ヶ谷 北川 芳子  | 同  | 市野倉 渡邊 みさを |











年四月五日の設立である。日本に於ける新學校の一つとして獨自の存在を示してゐるものであつてその目的とする處は、一、個性尊重の教育、二、自學自律の教育、三、勞作を重んずる教育、四、親自然の教育、五、不撓の意志と強健なる身體を養ふ教育——にあり、此の目的から學級の定員も三十名といふ理想的状態に置かれてゐる。而して教授も教科擔任主義をとり各科目毎に専門の教師を置いてゐる。學區は一定せず何れの土地に住める者にも入學することが出来る。

### 第三節 實業補習教育

#### 池上實務女學校

本校は池上町下池上七一番地にあり、明治四十三年十一月二十一日の創立である。在來池上町全體をその學區とし生徒數は六名で、一學級あるのみであつた。職員數も兼任教員二名、兼任校長一名計三名で、外に専任教員が一名缺員のまゝであつた。かゝる状態から遂に本校は昭和六年度限り廢校にしたのである。尙廢校に至るまでの沿革の概要を述べれば、明治四十三年十一月二十一日池上尋常高等小學校の一室を教室にあて荏原郡池上村立池上女子實業補習學校を創設し、大正十一年

九月一日池上村役場新築落成に及び舊役場建物を校舎にあて四學級を編成し、同十五年八月一日池上町立池上女子實業補習學校と改稱し、更に昭和四年六月一日荏原郡池上町立池上實務女學校と改稱し、以て今日に及んだものであるが、前述の如き不振状態の爲に遂に廢校の止むなきに至つたものである。

尙經費、歴代校長一覧、舊職員一覧等を掲げれば次の如くである。

#### 經費(圓單位)

|    |      |       |       |         |         |         |         |         |         |
|----|------|-------|-------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 年次 | 大正元年 | 同 五年  | 同 十年  | 昭和元年    | 同 二年    | 同 三年    | 同 四年    | 同 五年    | 同 六年    |
| 總計 | 一九四  | 一、二五五 | 三、五五四 | 一、一、一〇〇 | 一、一、一〇〇 | 一、一、一〇〇 | 一、一、一〇〇 | 一、一、一〇〇 | 一、一、一〇〇 |

#### 廢校當時職員一覧

| 就職年月日    | 職名  | 名     | 就職年月日    | 職名  | 名     |
|----------|-----|-------|----------|-----|-------|
| 昭和四、三、二〇 | 助教諭 | 井上 弘  | 昭和五、四、一〇 | 助教諭 | 京谷 ノブ |
| 同 六、四、九  | 助教諭 | 御瀧 國雄 |          |     |       |

#### 歴代校長一覧

| 就職年月日    | 退職年月日   | 氏 名   | 就職年月日     | 退職年月日     | 氏 名   |
|----------|---------|-------|-----------|-----------|-------|
| 明治三三、二、〇 | 大正七、三、三 | 中田 多平 | 大正一三、一、三〇 | 同 一五、六、二五 | 篠澤 政吉 |